

383
40



始





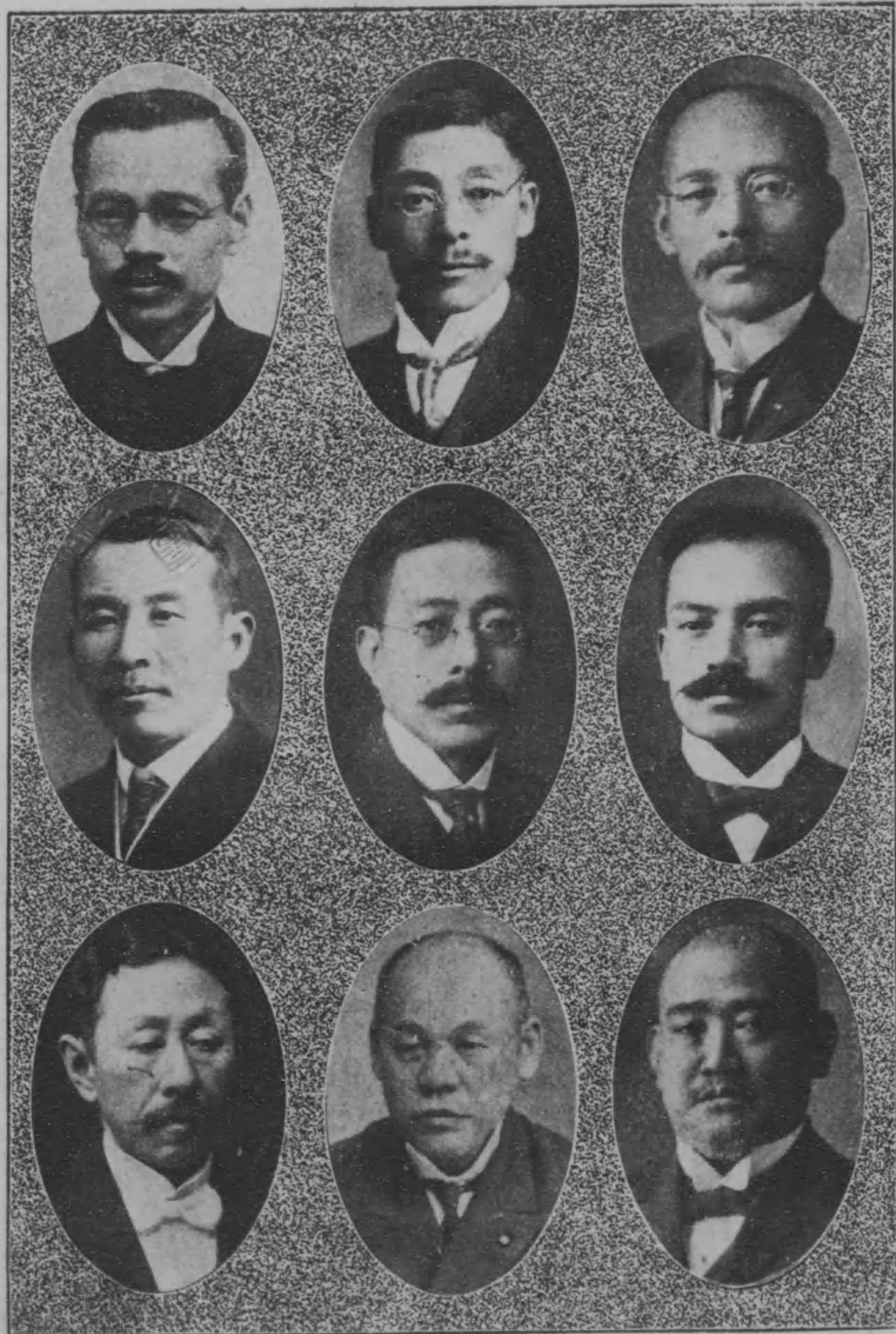
383-40



大日本
人物事業大觀

上卷第一輯

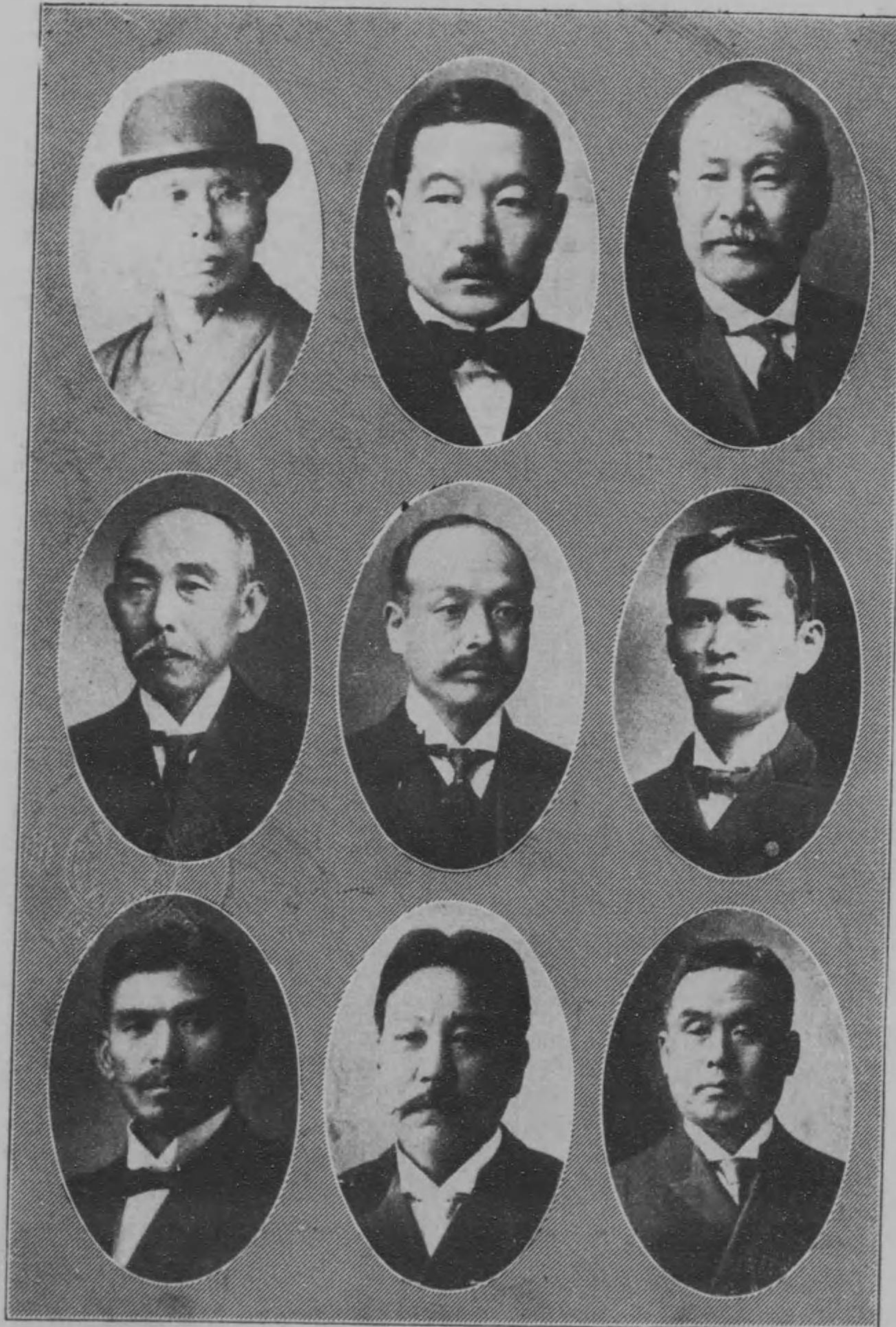
大正
8. 10. 4
内交



末島正繁太郎君
 末島正繁太郎君
 末島正繁太郎君

柴白石林宗太郎君
 柴白石林宗太郎君
 柴白石林宗太郎君

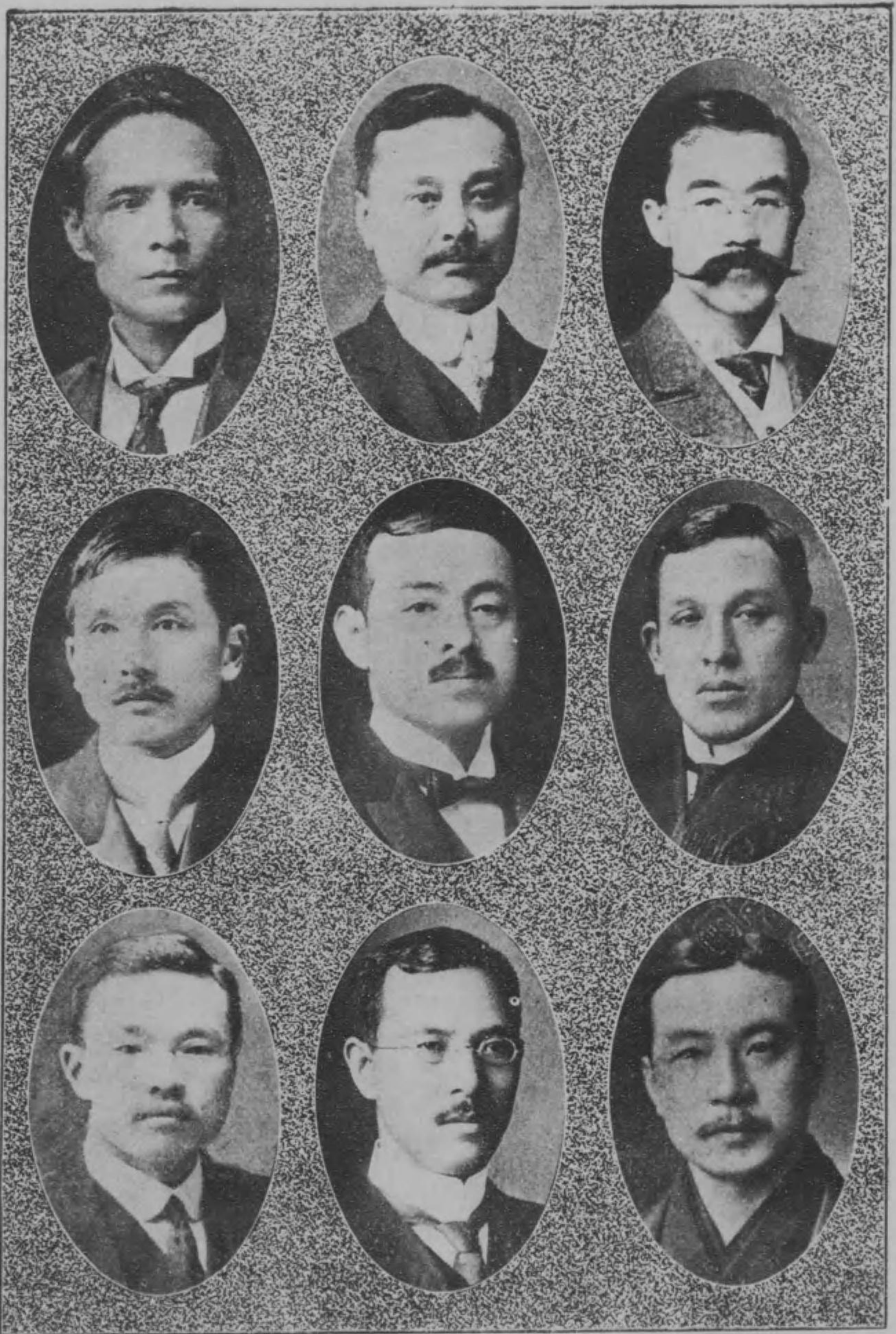
柏木勘八郎君
 柏木勘八郎君
 柏木勘八郎君



小野大川 野平 光彦 景三 景一郎 中内小 川藤野 木久金 吉寛六 吉君 原鳴古 六瀧賀 六幸三 幸千 幸人 君君



高山鈴 取岡木 伊國良 好吉一 好君 海樋服 江口部 山途部 半兵俊 一君 色静坂 忠温本 忠三 碓夫 碓君



松正 田原 方貞 五又 郎策 君 倉倉 知知 誠一 夫誠 君 荒中 井山 泰佐 君 治市 君

上梓に際して

明治維新の變革以來、泰西文物の輸入と共に我が事業界は駁々として異常の發展
 進歩を遂げ、今や全國到る處に之れが事績の顯著なるを見る、殊に這次世界的戰亂
 は、我國事業界の轉換機にして、戰時に於ける事業の勃興は實に儼然として頗る偉
 觀を呈せり。

看よ我國事業界の現状は、最も新進として世界に誇るに足るものあり、就中化學
 工業の發達程度に臻りては、歐米先進國の壘を摩するものあるに非ずや。

如斯事業の隆盛は、寔に國家の爲め甚だ慶すべき事にして、何れの國、何れの地
 たるを問はず、富國強兵の實を擧げんと欲せば、勢ひ事業の殷盛を期せざるべから
 ず、況んや我國の如く地勢上將來工業の國是を以て經綸の大本とする國家にありて
 は最も其必要を認む。

而して事業の隆替は、一に係りて其人物の如何にあり、彼の燦然たる光輝ある珠
 璞も琢磨せざれば其用をなさざる如く、如何に好望の事業と雖も、經營者に其人を
 得ざれば、到底之が發展は期し得られざる可し、即ち堅實なる事業は堅實なる人に
 依つて築かる、先づ國を知らんとせば其人を知らざるべからず、然も人の姓名を知
 ることは易く、人の性格を知ること難し、又人の風采を知ること易に、其性
 癖を知るは困難なり、故に此種人物の研究は處世上最も有益なるは論を俟たず、就
 中實業家が他の實業家に關する一斑を知るは、各自の事業經營上最大の要件とも云
 ふべし、吾人敢て大日本人物事業大觀の編纂を企てたるも、眞意は實に茲に存す。
 吾徒の微衷が事業界の爲に貢獻する處あれば、即ち望みは足る、豈に他意あらんや。

大正八年十月

大日本人物事業大觀 第一卷 目次 (いろは順)

池田寅次郎君	(三)
磯野良吉君	(五)
伊藤彌太郎君	(六)
石田文七君	(七)
岩井勝次郎君	(八)
井上虎治君	(九)
一色忠雄君	(一〇)
林平造君	(一一)
林千八君	(一二)
橋本辰二郎君	(一三)
原六郎君	(一四)
長谷川糾七君	(一五)
濱口吉兵衛君	(一六)
服部俊一君	(一七)
星加彦太郎君	(一八)
大倉喜八郎君	(一九)
小野金六君	(二〇)
大川平三郎君	(二一)
小野光景君	(二二)
大塚一君	(二三)

小川直馬君	(二四)
岡部菊太郎君	(二五)
渡邊義郎君	(二六)
貝島太市君	(二七)
海江田準一郎君	(二八)
柏木勘八郎君	(二九)
梶莊右衛門君	(三〇)
河東田經清君	(三一)
吉田源次郎君	(三二)
吉田芳太郎君	(三三)
吉田良春君	(三四)
吉田正寛君	(三五)
田村正寛君	(三六)
田邊貫一君	(三七)
田中徳次郎君	(三八)
田中丸善藏君	(三九)
田中豊輔君	(四〇)
田上源太郎君	(四一)
田中梅一君	(四二)
高松治君	(四三)
高取伊誠君	(四四)

内藤久寛君	(七)
中井新右衛門君	(八)
中川末吉君	(九)
中山佐市君	(一〇)
内藤彦一君	(一一)
鳴瀧幸恭君	(一二)
中村忠七君	(一三)
長野善五郎君	(一四)
中根壽君	(一五)
村上定君	(一六)
上西龜之助君	(一七)
野口遵君	(一八)
倉知鐵吉君	(一九)
久保田庄左衛門君	(二〇)
倉名誠夫君	(二一)
山内政良君	(二二)
山岡國吉君	(二三)
山下尚市君	(二四)
松本健次郎君	(二五)
松本藏君	(二六)
松村八次郎君	(二七)
深川忠吉君	(二八)
古賀三千人君	(二九)

小曾根喜一郎君	(三〇)
小林作五郎君	(三一)
荒井泰治君	(三二)
坂本清三郎君	(三三)
坂本千代八君	(三四)
木俣其七君	(三五)
宮本貞一郎君	(三六)
正田貞又策君	(三七)
鹽原太郎君	(三八)
下坂藤次郎君	(三九)
白石元次郎君	(四〇)
重田榮治君	(四一)
靜間温夫君	(四二)
末正繁太郎君	(四三)
島名福十郎君	(四四)
莊清次郎君	(四五)
樋口達兵衛君	(四六)
日野辰次君	(四七)
森野辰次君	(四八)
菅川清君	(四九)
鈴木幸作君	(五〇)
鈴木良一君	(五一)
鈴木音吉君	(五二)



本美入函スーロク總頁千一判菊

本書は全國知名人物の評傳を
集録し壹千頁を以て一卷とな
せるもの之が内容の完璧を期
せんが爲め一卷を五輯に分ち
假裝釘の上一應之を座右に供
し記事の正確を期せんことす、
依つて該記事中の誤謬は御手
數ながら御補正御送附あらん
ことを希望す而して之が完結
を待つて上掲の如き單行本と
して之を諸賢に提供す

目丁二町田區坂赤市京東

所務事纂編觀大業事物人本日大

大日本人物事業大觀

大倉喜八郎君

大日本人物事業大觀

時勢の推移により、輒近「富豪の社會的使命」と云ふ事が、喧びしく論せられるやうになつた、即ち彼等の言を以てすれば、富豪は直接間接に社會の恩恵により、或は又多數労働者の労働の剩餘により、今日を贏得したるものなれば、之が當然の義務として、萬金の一部を社會に献納す可きであること云ふのである、勿論之は近來著しく擡頭して來たデモクラチク思想の影響であるが、果して之が正當なるや、否や吾人はこゝに詳略するが、只こゝに一言すべき事は現在の如き不平等なる貧富の差が益々劇烈となるに連れ若し眞に心ある富豪なれば、自ら進んで之が救済を爲す可き何等かの具體策を取る可きである、現に之等の方法を講じてゐる人々を寥々たるながらも認め得らるゝのである。

近代物質文明の特徴たる「拜金崇拜熱」は、凡有社會の人々をして無際限なる慾望の中に引き摺つて行く、其結果彼等は人生眞平の幸福を握り得ずして、唯だ貪るものゝ貪婪だけを知つてゐる、かくて社會の實狀は、更に一層、不均衡不平等を重ねつゝあるのである。

この時に當つて、近時三菱、山下、大倉の三富豪が期せずして東京府の爲めに、否、我國社會の爲めに、各一百万圓宛を寄附したのは、甚だ吾人の意を得たものであつた、今大倉喜八郎君の評傳せんとするに際し、吾人は新にこの近來の快事を想起するものである。

男は越後新發田の人にして、天保八年九月廿四日を以て生れた、大倉千之助氏の三男にして、幼より儼磊落にして自から群童と異なるものあり、而も機敏にして活智に富むを以て里人は稱して「今太閤」の名を以てし、其將來を矚目したものである。

生家は檢斷と稱する格式の舊家として、世々苗字帯刀を許されたる質屋業者であつた、男は幼名を鶴吉と呼び、夙に藩儒圓羽伯弘に就き和漢の學を修めて出藍の譽があつた。

年初あて十有八、感ずる所あり、奮然として意を決し、東上して麻布飯倉町の中川屋に仕へた、勵精恪勤、大に主家の爲めに盡瘁し、幾許ならずして商略に曉通して、其機微を悟ることが出来た。

而し君は思ふらく、徒らに他人の家に仕るは、之れ志ある男兒の執る可き手段には非ずと、茲に於てか君は多少の資本を擁して下谷上野町に乾物店を開き、始めて獨立獨行の人となつたのである。

當時君が如何に確固たる抱負をもつてゐたかを表明する一の挿話がある、即ち一日郷友兩三輩が來訪して男に勸むるに新發田なる吳服店に養子たらん事を以つてした、然るに男は床間に懸けたる香川

景樹の一軸を指し、朗詠して曰く「佗びて世をふるやの軒の繩すだれ朽ちはつるまでかゝるべしやは」と、知友は亦強ふるに由なく悄然として去辭せりといふ、かくて君は從來と數倍して事業を努め、且つ

「薄利多賣主義」をモットーとして經營せるより、業務益殷盛なるに及んだ。

是より先男は祖父の名を襲ひ、喜八郎と改稱したが、時恰も幕末に際し、諸外國よりの開港互市を迫られ、尊王攘夷の議論は海外に沸騰した、されば志士は東西に奔走して形勢益々險惡となり、維新の一大混亂時代は正に爛熟したのである、即ち男は思へらく、「今や公武の意見一致せず、諸藩浪士京師に雲集し、攘夷の議論沸騰して止まず、而して一方幕府の勢力は日に日に衰退し居れり、國內騷亂は發せざらんとするも得べからざるべし、爰に於て必然兵器の需要あるは火を觀るよりも炳なり」と、即ち男はこの機を千載一遇と看破し、文久三年八月堀谷某に就き、兵器賣買の業に習得し、幾年なら

ずして和泉橋通りに移り、銃砲彈藥其他兵器の販賣店を開始した、果せる哉男の炯眼は強弩的中の如く、初め鳥羽伏見の戰爆發して、更に東叡山、奥羽、函館の戰爭起り、隨つて兵器の需要は頓に劇増し、焦眉の注文山積するに至つた、かくて男は一舉にして巨萬の財産を作つたのである。

戰亂終熄するや、男は決する所あり、蹶然洋行を企て、明治五年親しく歐米を漫遊し、各國の商業を視察し、大に得る處あり、歸來直ちに大倉組を組織し自ら其社長となり、次で業務の都合により、英京倫敦に支店を開設し次いで、明治七年臺灣征伐の事あるや、男は陸軍省の命に依り、砲具糧食を調達する任務を帯び、部下數百名を率ひて臺灣に渡り、征討軍をして遺憾なき活躍を爲さしめたのである、又十年西南の役にも、男は戰地に出張して、軍用の充實に努め、以て後顧の憂なからしめたのである。

尋で明治十七年の交我輸出製茶に粗製濫造の弊盛に信用頓に失墜するや、男は之を深く概し、挺身米國に航して都市に亘りて當業者を集め、日本製茶の純良にして無害なるを説明し、或ひは數千金を抛つて新聞記者を響應する事極力之が聲價の挽回に努めたる結果漸く日本製茶は其信用を挽回し、従前に倍して需要を増加するに至つた、之れ偏に男の献身的努力の賜にして、我國斯業者の永く徳とす可き處である。

後男は、我帝國の現在及將來の種々なる事業に就て憂慮する所あり、之を改善するには何うしても徹底的なる教育の力に據らざるは能はざるを看取し、巨額の私財を投じて東京に大倉商業學校を起し、同時に大阪に大阪大倉商業學校を創設し、東西相呼應して後進の士の啓發に努め、更に進んでは朝鮮京城に善隣商業學校を設立し、以て鮮地の商業にも一大貢獻を具體化しつゝあるに見れば、男が如何に國家的觀念の豊富なる人であるかと想到することが出来やう、吾人は其着眼點の卓抜にして、又抱負の遠大なるに敢て賞讃の聲を吝まないものである。

又男は極めて愛國心に富み、報國盡忠の精神旺盛なのである。即ち今其一例を挙げれば日露戦争の劈頭に於て、銀行團の外に個人として卒先三百萬圓の應募を申出で、以て人心を戦時に鼓舞せる如きは其最も好適例にして、戦後勳二等を授けられたるも、豈決して偶然ではないのである。此外曩には恩賜財團財生會に一百萬圓を獻納して大に其事業を助け、又神戸市安養寺山の別墅を寄附して大倉山公園を造らしめたるは男の公共的誠心の如何に勃々たるものあるかを推知し得べく、今亦一百萬圓を寄附す、男が常に事業家として實業界に重きを爲すのみならず、又人として、人格者として一般世人の渴仰の的たることは蓋し當然である。

今現在に於ける男の關係事業を挙げれば、日本化學工業、日本皮革、東海、紙料等の各株式會社會長、帝國ホテル、十勝開墾兩社の社長、大倉組の取締役頭取等を始めとして、成田鐵道、東京製銅、新高製糖、郡山電氣、東京電燈、大日本麥酒、帝國製麻、帝國劇場、日本電氣黒鉛、日本製靴、大倉鑛業、大倉製紙等各株式會社の取締役、北海道拓殖銀行、臺灣銀行、日清製油、宇治川電氣、鑛業銀行等、各會社銀行の監査役を兼任してゐる。之等の會社或は銀行が如何に斯界に於て聲名あり基礎あるものなるか、贅言を要しまい。

而して男は、老後の事業として専ら支那の事業に嚆目し、支那政府と合辦し、滿洲本溪湖に炭礦公司を經營し、同所に一大製鐵所の建設に着手しつゝある傍、奉天借款に百萬圓を承諾し、尙明治四十五年の支那革命勃發に際し、三百萬圓の借款を支那政府に引き受けたる如きは、決して眼界の小にして、膽なき人の爲し能はざる處である。

斯くの如く男の既往を八十有餘年に顧れば、眞に之れ一編の光彩陸離たる健康史として、屢々死生の境に出入して百折不撓、千挫不屈の大精神を發揮してゐる。思ふに君が一度少年の頃單獨に東上して中川屋に仕へたる時のことを追想すれば、實に感慨無量なるものがあらう。

小野金六君

眞に實業家の實業家たる所以のものは、決して單に自己營利のみが目的ではない。その事業によつて如何に社會を益し、同時に國家を益し、延いては自己も又益せんとする——之が眞の實業家たる所以である。けれどもこの意味に於て現在本邦の實業界を見渡せば、果して幾人か眞の實業家らしき實業家の資格に價するであらうか。それは又別個の問題として、吾が小野金六氏が正に其中の一人であることは吾人の深く欣ぶ所である。

氏は山梨縣の人、嘉永五年八月十八日同縣北巨摩郡葦崎に生れたが、父を小野傳吉氏と云ひ、酒造及び呉服物商として名高かつた。氏は其二男であるが、天資至つて洒脱にして機才に富み、霸氣實に滿々たるものがあつた。十四才にして早く同郷の酒造業者より選ばれて、同業の取締役となりしを見ても、氏の天稟の決して凡でないことが證せられやう。

後氏は縣廳と謀つて甲信兩國に食鹽の輸入を策し、又養蠶の發達を圖つて、桑苗の培植に努めたが不幸にして二つながら失敗に終つた、之を見たる氏は切齒して、直接取引先なる江州商店と協約し以つて多少の反物を借入れ、自ら遠近各地を巡りて其卸賣に従事したが、これも又不幸にして利なく遂に氏は志を抱いて上京し、京濱間を放浪し其成功の機會を睨つた。恰もよし當時(明治九年頃)横濱は生糸市場の開始せられたる時とて、未だ世人はこれに手を染むることを躊躇してゐたれば、氏は奮然生糸及び甲斐絹等の取引に従事し、忽ちにして巨利を博し以て氏が今日の素因を造つたものである。

既にして明治十年となり、かの十年戦争の變起るや、機を見るに敏なる氏は、米價の暴騰を察し故岩崎彌太郎氏と謀りて清水港の一米商を訪ひ、巨額の購入を爲したが、果せるかな米價は豫想に違は

す暴騰し、氏等は之を米商會社に賣つて、一舉數萬の富を贏得した。後氏は國立第十銀行設立せらるるや推されて東京支店長となり深川に倉庫業を開始したが、更に明治二十年第九十五銀行に關係して其取締役支配人となり、後副頭取に進んで當時傾きかけた同行の衰運を能く挽回するに至つた。斯くて氏は明治二十六年東京割引銀行を起して、其頭取に推されたが、甲府間の交通機關の不備を豫て慨嘆する所あり、即ち甲信鐵道會社を起さんとして成らず、氏はこの悶々の情制し難く、恰も當時(明治二十九年)臺灣が我國有となりたるにより、同地に臺灣鐵道會社を起したるが、戦後の經濟不振の打撃を受けて解散の悲運に遭遇し、氏が事業熱は彌がよに蹂躪さるゝに至つたのである。斯くて氏は當時猶幾多の事業の畫策を企てたるも、一として之が順潮の發達を見ず、蹉跌顛倒、亦再び起ち能はざる如き逆境に沈淪したことは一度や二度ではなかつた。けれども氏は決して夫れ等の苦境に撓むが如き意志薄弱の徒ではなかつた。氏の精力は實に絶倫にして克くこの艱苦に堪へ、常住に不屈の精神を以てこの難關を突破した。斯くて現在に於ては遂に陶朱の富を重ね、本邦實業界の一異彩として、その雄名を斯界に轟かすに至つたのも又決して所以なきでない。今氏の關係せる事業を擧ぐれば次の如し。

東京商業會議所特別議員。小野鑛業合資會社無限責任社員。東京割引銀行頭取。富士水電株式會社。富士身延鐵道株式會社。輸出食品株式會社。日本煉炭株式會社。東洋製罐株式會社。東洋遊園地株式會社。日本觀光株式會社各取締役社長。朝鮮輕便鐵道株式會社。小倉鐵道株式會社。山梨輕便鐵道株式會社。日本電燈株式會社各取締役。帝國商業銀行監查役。

惟ふに戦後益々我經濟界は一層の緊張を要求せんとする時、氏の如き事業に熱心なる且つ經驗の深き人物を我國に有せることは、吾人の深く欣幸とする處でなければならぬ。氏は益々自重して以て我國斯業の爲めに盡瘁せんことを。

内藤久寛君

日本石油株式會社は其規模の大なる且つ設備の完備したる點より、嘗に日本一の稱あるのみならず、實に東洋一の名聲を博してゐる。而して今や其販賣店を東京、大阪、新潟、下關等の要地に設け鑛物出張所を西山、新津、東山、高田、七日市、遠州相良、秋田、北海道、臺灣等に有し、隅田川沼垂等に油糖所を、柏崎、直江津、秋田に、北海道に製油所を設くる等、其事業は駁々として旭日冲天の如き勢を示しつゝある、而して斯くの如く同社が今日の盛運を贏得したる所以のものは、一に同社の社長内藤久寛氏の賜と云はねばならぬ。

内藤久寛氏は石油の本場たる新潟縣刈羽郡石地町の人、安政六年七月を以て生る。家は郷閭の名族として由緒ある舊家であるが、氏は幼にして頗る勉學を好み、凡ゆる和漢の書を涉獵して造詣至つて深く。生來資性英邁にして而も膽氣あり、二十二才にして既に縣會議員に選ばれしと云へば、其非凡なる才能推して知る可きである。而して明治二十七年には早くも氏は衆議院議員の名譽ある椅子を贏ち得ることが出来たが、當時氏は未だ三十未滿の元氣旺盛たる青年で、現在の日本石油株式會社を同志と相謀り創設したるは明治二十一年であつた、斯くて氏はこの會社に渾身の精力を傾倒して之が經營の任に當つたのである。當時の資本金は僅に十五萬圓で、現在の四千萬圓と比較すれば當に霄壤の懸隔のみではない。而して其當然の事實として其規模は至つて小さく、又販路も至つて狹隘なものであつた。其經營の苦衷も察するに餘りあるものがあつたらう。

而して同氏の經營は着々として成功を占めて行つた。明治三十二年尼瀨の工場を柏崎に遷移するに及び、同社の事業は一躍して大進展を來した、そして晝夜の産油能力よく五千石を製造し、而して又規

模も漸次擴大されて行つたのである。斯くて其當時に於て早くも本邦無比の稱を獲得するに至つた。爾來同社の事業は年と共に目醒しき發展を告げて來たが、今や資本金四千萬圓を有する大會社となり、本邦空前の大噴油地たる秋田縣の黒川油田を其領域に占め、日産一萬石の新記録を示してゐる。斯くて同社所産蝙蝠油の聲名は、遠く世界の隅々迄も響き渡るに至つたのである。

思へば氏の同社に盡せし功績たるや實に特筆大書するに餘りある。又それのみならず現在吾國石油が西洋諸國の石油とよく對抗して、而して、優越することも決して劣らない成績を示すに至つたのも氏の力と云はねばならない。今や戦亂も終熄して石油の需用は日に驚くべき増大を告げつゝあるの時、氏の如き經綸の深遠なる、又卓越したる技量と識見とを有する人の、我國斯業界に在ることは、吾人の深く欣幸とする處である。

古賀三千人君

既往五ヶ年の長日月を費したる歐洲戦亂も終に獨乙の大敗に結末を告げ、今や刻々に平和の色彩濃厚ならんとし、經濟界は未曾有の緊縮を來して、茲に混沌たる過渡期を現出してゐる。世界改造の戰爭は武力的に解決を告げて經濟的に轉移し、現に鼎沸鳴轟の結果は果して如何の形體を鑄出すべき乎蓋し衆人の興味を以て見んとする處である。而かも此興味は單なる觀興的其物に非ずして、嚴正なる國民的立脚地より、眞摯、銳利なる觀察眼よりして吟味すべきである。如何となれば其結果の如何は常に事業家其人の利害盛衰に關するに止まらず、其影響する處普遍的に一般國民に及ぼし、國家の消長上容易ならざる打撃なしとせざればである。此意味に於て我國事業界の眼前の形象を世人は如何とを見る。休戰條約締結以來、大體に於て何れも戦後の反動による打撃は免れずとせんも、此間自ら

二大潮流の存するを否むるは出來まい、即ち一は急轉直下の勢にて倒産瓦解乃至閉鎖休止の奈落に陥落し、一は躍如勃然たる決河の勢を強いて緊縮して戦後の活舞臺に期を窺ふもの之れである。等しく同一事業界にして如此き雲泥の徑庭あるは何に依るべきか、开は勿論事業的性質其のものよりも寧ろ經營者其の人の人物如何に存するは争ふべからずである。

惟ふに戦後の經濟戦は事前の武力戦争に更に倍加せるの織烈を極むべく、我國は世界的市場に果して勝利者たり得べきか、此時に當り吾人の切に感せらるゝは我が實業界の人物にして、我國の世界的商勢のパロメーターは此人物如何に依りて支配さるものとも言へる。即ち茲に古賀三千人氏を抽出せるは、我國經濟界の今後氏に期待するの甚大なるを思へばである。

由來鎮西の野は古來英雄豪傑の淵藪地であるが、氏も亦福岡縣出身者たるに於て此の一人者と見るべきである。福岡縣は怪傑頭山滿を生み、鑛業家具島を生み、其の他實業界、官界に一種の異彩を以つて超脱せるもの尠しとせぬが、氏は佐賀縣出身の木下新三郎氏と并立し、臺灣に於ける南九州勢力の二代表の形に在る、即ち現に氏の關係せる會社事業を見るに臺灣に於ては臺灣興業株式會社社長、臺灣産業株式會社取締役を始め、臺灣煉瓦株式會社、臺灣肥料株式會社、臺灣鳳梨株式會社、臺灣爆竹煙火株式會社、臺南輕鐵株式會社、臺北輕鐵炭礦株式會社、嘉義電燈株式會社、臺南新報株式會社新高製氷株式會社、臺灣商工銀行、打狗土地株式會社各重役、打狗信用組合理事長等にして各事業界は勿論、金融界、操觚界に迄張翼し、更に臺灣實業協會打狗支部長、打狗内地人組合長、臺灣防疫組合長、打狗商工會長を兼ねて、是等公共事業に貢献する所深く、全く臺灣に於ては押しも押されぬ第一人者として勢望旭日の如き觀がある。若し夫れ内地に於ける關係會社を挙げんか、大正製藥株式會社、亞鉛電解鑛業株式會社、日本電氣興業株式會社、王子煉瓦株式會社、日本スレートアスファルト株式會社等の各重役を兼ね、又最近辭したるも曾ては臺灣赤糖株式會社、臺灣漁業株式會社、沖

臺製糖株式會社にも關係せるなど、其垂天の鵬翼や寔に偉なりと言ふべきであらう。而して以上の諸會社は世既に定評ある確實なる會社なるを以て今之れが嗚々するは暫らく避くることせんも、善惡何れにせよ未曾有の混亂を來せる這次時局に當りて、能く經營機宜を得、毎期好成绩を計上して敢えて危殆に瀕する無かりしは、全く此の如き非凡の人物の關與するありて始めて可能的なりと言ふべきである。元來人物には自ら才と智の人と腕と膽の人の二流ありと見られる。前者は平調秩序的なる時代に於ては能く圓滿なる事業の發展を爲し得べきも、時あつて變態的混亂時代に際會せんか、多くは周章狼狽して機宜を失し、遂に思はぬ處で蹉跌失敗の恐れ無しとせず、後者は徒らに猪突盲進して兎角熟考内省を缺き、今一呼吸と言ふ處で九仞の功を一簣に缺くの憾み無しとせぬ。所詮は此兩者を兼併するに於て始めて事業家として完璧と言ふべく、以つて能く難關突破の妙有りと言ふべきである。

氏は此兩刀使ひの代表人物にして、天稟大器備はり魂膽斗の如く、如何なるデレンヤに逢着するも泰然自若として局に當り、辣手一揮、能く快刀亂麻的解決を告ぐる處に氏の眞價を發揮する。即ち以上の諸會社の堂々たる陣容を張り、戦後の大活躍を觀望して滿を持して放たざるの雄姿を示せるも、這間氏の八面六臂の縦横なる活躍も窺はれて心自ら快然たるを禁じ難きものがある。

氏は福岡縣の人古賀彌作氏の二男にして明治二年八月九日生れと云へば僅かに知命を過ぎたるのみ今や才腕愈々老熟の域に入り。識慮益々綿密を加へ事業家としての眞の活動は之れよりして本舞臺に入るべきであるが、而かも今日既に我が實業界一方の旗頭たる成功を博せるは、全く氏の切磋琢磨の功に負ふ處大なりとする。由來成功兒の裏面には何等か或種のバックが漲られ、それに依りて其の人の成功を價値付くるの常とするが、関外に超然たる福岡縣人には比較的此色彩の無きは勿論氏の如きに至つては殊に何等の背景なく眞に赤裸一貫獨立獨歩、以つて今日に達成せる奮闘兒と見られる。

氏は夙に當時土木請負人にして相當勢力ありし有馬組々員として臺灣に渡航し、熱帶圈内に惡戰苦闘を續くる内、偶々有馬組は都合上臺灣を引上ぐる事となり、其事業を有馬組々下に在りし澤井市藏氏が繼承する事となつた。茲に於て古賀氏は更に澤井組に入り臺南支店主任となり明治三拾二年更に打狗支店主任に轉じ、専ら鐵道及其他土木業の請負に従事して當時未だ文化の遅々たる蠻地に活躍し成績大に見るべきものありしが、今日氏の臺灣に於ける絶大なる勢力は全く茲に原因せりと見るべきである。而かも氏の大器は一使用人に甘んずべきに非ず、壯志凜々として巨腕躍動し、遂に明治三拾五年澤井氏と協議の結果分立して獨立の旗旗を掲げ、即ち新たに古賀組を組織して從來の請負業を開始するに至つた。而かも世路險惡にして事業の消長又免れざりしも、百折撓ゆまず、千挫屈せざる英氣を以つて孤軍奮闘を續けたる結果は、臺灣統治の成績進歩と共に勢力漸く沉く、地盤益々強固を加ふるに至り、今や牢乎として抜くべからざる根底を築くに至つたのである。

氏は又此事業家としての成功の裏面には各種公共事業にも關與して熱心と努力とを傾向せられてゐるが更に特徴と見るべきは氏の個人的行爲の或一端である。氏の百鍊を経たる精鐵の氣、淡々洒然たる唐竹を割りしが如き男性的なる、更に其稜々たる俠骨は氏の天稟に先輩澤井氏の流れを着色せるかに見らるゝが、兎も角當代稀れなる快男兒なるは争ふべからずである。此性格は時ありて能く眞價を發揮し、曾ては琴平神社に數萬金を奉進せるを初め、神社佛閣に献納せる金額少からず、其他郷土の發展振興策に意を致せるなど英雄の裏面も窺はれて一種の床し味を感得せしめる。殊に氏は常に人物養成に意を注ぎ、有爲の材を抱くも資無く、窮境憾軻不遇を啣つ多くの青年を引き立て、氏の恩恵に浴して現に成功せるもの實に數十人に達せるなど單に、道樂としても國家的貢獻の放れざるは吾人の欽快とする處である。

惟ふに青年到る處青山あるも、能く其徹底的結實を得るものは千に一二あるなし、氏の如きは全く

艱苦に試練されて玉成せられたる立志傳中の異彩と言ふべきであらう。氏が既に嚴冬霜雪を経たる野生の梅樹たり。近く展開されんとする世界的商戦に當り、春陽暄暖の風に乗じ更に枝幹の參差を増し更に芳香の馥郁たるを加へるであらう。

田村正寛君

田村正寛氏は安政二年三月、滋賀縣蒲生郡西大路村に生る。嚴父を彌平治氏と云ひ、由緒正しき武士の家に生れ其嚴格なる家庭教育の下に成長したものである。天資聰明にして讀書を好み、八歳にして西大路藩校に入り漢籍を學びて夙に俊才の聞へ高かつた、雞群の一鶴たる氏は斯くて年齒僅かに十才にして拔擢せられ、同藩校の助教授に任せられたるなど、全く人物の偉器を表明して餘ある。然も氏の鬱勃たる青雲の氣は之に満足する事を得ず、遂に翌年同校を辭して京都に遊び、碩儒江馬天江、劉石秋等の門を叩きて、經史詩文を學ぶに至り、之れに着色されて氏の天稟の英資は益々躍如たるに至つた。

後年王政維新に際し氏は召還されて再び同藩校の教授たりしが、唐る事年餘にして時勢の趨運を達觀し、飄然漢籍を抛ち英書並に洋算の研究に没頭して新知識の吸收に努むる處があつた。氏の先見達識の非凡なるは即ち之れを以て知るべく、更に當時卒先して斬髮を斷行し嚴格なる嚴父の怒りを買ひ、小室に幽閉せらるゝこと月餘、伯父の仲裁によつて纔かに免るゝことを得たなどの逸話もあり、旁々ヨリ強くそれを裏書してゐる。

其後氏は屢々英書の研學を嚴父に請ひしも其聽許を得ず、遂に意を決して神戸に走り同地に於て自己の欲求する研學の満足を得んとせしも、當時未だ教育の機關不備にして、加ふるにこの出奔が再び

嚴父の怒りを招き、學資足らず衣食乏しく窮餘の發奮を以つて時に商店の手代となり、時に税關の吏員となり、或は一米人の日本語教師となりて糊口の資を得、傍ら専心英書英語を研學する等、艱苦辛酸實に名狀すべからざるものがあつた。然も窮途志を立つ之れ勇士で此間氏は又大いに自得する所あり、獨立自營の意志は彌が上に試練されて確固不拔なものに玉成された。

時恰も明治八年内務省に勸農寮なるもの設立せられ、各府縣に一名を限つて官費生を募集せらるゝや、氏は即ち之に應じて官費生となり、卒業後は滋賀縣勸業課に就職し、後數年を出でずして同課の課長に陞任した。氏の課長となるや銳意事業の畫策施設に意を用ひ、其功績に至つては極めて甚大なるものがあつた。明治四十一年同縣米穀改良組合が、其創設二十五年に際し、氏が創業盡力の功多大なるものあるを感謝し、感謝狀と共に一紀念品を贈呈せるの一事は、正に其一般を推知すべき好材料と言ふべきである。

斯くて氏は、官界に在りて親しく我國の事業、並に海外に於ける貿易の状態に眼を注ぐに及び、綿絲及び金申輸入が、如何に我國の經濟界及び事業界の爲めに、大なる打撃を與へつゝあるかを深く憂へ、紡績業急設の極めて緊急なるを痛感しむるが、明治二十年遂に大阪に金巾製織株式會社を創設して直接之が經營の任に當ることとなり、同社の専務取締役たること十二年、其間驚くべき手腕を發揮するに至つた。

而して一躍斯界の權威者となりたる氏は、當時恰も其經營の宜しきを得ず、事業益々不況に沈みせる浪花紡績會社、柴島紡績會社の經營を依託され餘儀なく之に應じ、數ヶ月を出でざるに忽ち之れが挽回を見るに至り、氏の名聲は躍然として擧り、次いで近江銀行、大阪生命保險社亦氏に依つて創立され、後日本絹糸、大和紡績、都賀濱麻布紡績、近江帆布等各會社を創設する等着々として地盤を築き、遂に押すも押されもせぬ本邦有數の實業家たるに至つた。斯くて明治三十年富士紡績會社經營

難に當りても氏は其懇望を受けて、専務取締役となり其整理に従事したるが、氏は快刀亂麻を斷つが如く同社の内外に大斧鉞を加へて事業の改善に努め、之亦數年を出でずして社運の隆盛を見るに至り、即ち同社を辭して歐米に渡航し、同地各國の工場經濟及労働問題を沿く視察研究して、大いに得る所深かつた。

明治三十四年歐米より歸朝するや氏は又當時不況に陥り東京製絨會社の整理を依託され、同社の常務取締役となりて其刷新に努め、又金巾製絨會社の悲境に陥るや之を救ひ、後下野紡績會社に入りて其常務取締役となり、拮据勉勵以て其經營に當つてゐる。

斯くて氏は多年私利を忘却して、幾多會社の悲境を救ひ、本邦實業の振作に貢献する所は、甚だ大なるものがある。されば先年大日本綿糸紡績聯合會は、其決議により、氏に銀銚子一對及び金盃を贈れるを始め、幾多の會社及び公共事業團は、氏に謝狀及び贈品を以てせし事枚舉に遑あらず、即ち世人は氏を目して工場掃除役の名稱を捧呈し、氏亦之を甘受して我國實業振作の爲めに半生を犠牲にして盡瘁してゐる。氏の手腕や偉なり、其功績や蓋し特筆するに餘りあるものがある。

大川平三郎君

大戦の影響を受けて、驚くべき發展を遂げた我國現在の工業界を見渡すに、一人にてよく數社の重役を兼ねてゐるもの其數決して乏しくはない。然れども是等の人物の中には、往々にして自ら直接其經營の任に當らず、唯だ空名をのみ列ねて得々たる人なきにしもあらず、是等の人は二期の配當及び賞與を思ふの外、稍もすれば現在吾が關與せる會社が、如何なる事業を爲しつゝあるやも辨へざる如き、至つて迂愚頑迷なる人々が多い、而もこれ等の人々に限つて、暗に其肩書の多きを誇り、以

て自己の社會的地位の優越を自負する等、其心事の甚だ陋劣なるものがある。此の現象たるや現在の如き産業の過渡時代には、又止むを得ざるものなりとは云へ、之甚だ憂慮すべき現象たるや勿論にて是等の自稱實業家達に依り、如何に我國の眞の産業の發達が阻害され行くか、思ひ半ばに過るものがある。而もこの感亂せる時代に當り、之等浮薄輕佻なる實業家中に、吾が大川平三郎氏の如き、眞の實業家らしき實業家あるを見出すは、吾等の等しく欣幸とする處でなければならぬ。

大川氏の關與せる事業は實に三十有餘に及んでゐる。其數のみを見れば、或は彼の自稱實業家と何等異なる所がないが、之を少しく仔細に觀察すれば、其處には自ら又混同すべからざるものあるを認められる。彼の事業選ばすの無思慮無定見の盲動に對して、この周到明敏なる秩序正しき行動は、又決して同一に考ふべきものではない。同氏が以て二大事業として其精力を傾倒せる製紙並に製鋼業及び其他硝子、護謄、鑛山業等の如き即ち之である、而して氏は自ら直接其經營の任に當つてゐる。

されば氏の關係する事業は、一つとして良好なる成績を上げ得ないものとはない。幾多新會社設立の發起人等は、氏を其重役の一人に得ることを、事業發展の確證を得たりと思惟する如き現状にある、氏は決して自己の眞の確信なく成算なき而して又、幾分我國産業界の發展に資するものならでは其事業に關與することを欲しない。斯くて氏の近時専ら力を傾倒し居れる製鋼、製鐵業の如きは、現在我國の工業界の死活問題が、一に自給自足にあることを痛感するの餘り、百事を犠牲にして其促進を圖らんとの大抱負、大決心に基因してゐることは、何人も認めてゐる所である。

氏は實に月給五圓の雇人より身を起して、今日の地位を贏得したりといふが其多年に亘る不撓不屈の奮闘努力は、想像するに餘りあるものがあるであらう。氏は師事して修學するの餘裕なく、専ら奮闘生活の寸暇を利用して獨學を續け其驚嘆すべき廣汎なる知識を獲得したものである。初めは物理化學より順次に其研究の歩を進め、遂には經濟學、測量學、水利學、社會學等實業家として必要なる凡

ゆる學問をひとして修めないものはなかつた。就中、現在縦横に使用せられる英語の如きも、其自修研學によりしものなりと聞いては、氏のこの深甚なる努力に對しては誰れしも感激し敬意を表さずには居られまい。蓋し同氏の今日あるは往時の不撓不屈なる精神と其精勵の資賜にして、又當然の報酬なりと云はねばならぬ。

同氏は東京府の人、大川修三氏の二男にして、東洋硝子株式會社の社長及び磐城採炭株式會社取締役會長たる田中榮八郎氏は氏の實兄である。文久元年十月一日を以て生れ、明治十年先代榮助氏の養子となり、十八年三月家督を相續し、幼時夙に和漢の學を修め造詣深かりしが、實業家たるの志望早くより氏の胸に萌し、令兄田中榮八郎氏と協力して、田中工場硝子製造所を設立したのがその實業界に入る始めであつた。後同所が東洋硝子株式會社となるに及び、氏は推されて常務取締役となり、尋で三十三年長富、守谷、田中、井上、藤本、木村、大西の諸氏と計り、資本金十萬圓を以て東洋護膜株式會社を組織し取締役に擧げられ。又三十五年には資本金三十萬圓を以て日本醋酸製造株式會社を起し其取締役となり、又別に龍東材木株式會社を設立して又同じく其取締役に推さる等、現在にては即ち其關係せる諸會社三十有餘に及び其社長のみにも、北海道興業株式會社、緑川電力株式會社、東海鋼業株式會社、大瀧鑛山株式會社、中央製紙株式會社、九州製紙株式會社、木曾興業株式會社、樺太興業株式會社、ミカドマツチ株式會社、株式會社大島製鋼所、樺太汽船株式會社等十一社に及んでゐる。其他會長として瀧東材木株式會社を執掌し、副社長として淺野スレート株式會社の經營に當つてゐる。

就中、製紙事業は氏の最も長とする處、我國に於て恐らく氏の右に出るものはないであらう。氏はこれ等の諸事業を視察せん爲めに歐洲諸國を巡遊すること實に七回に及んでゐる。又氏は夙に男爵澤榮一氏の知遇を受けること深く、氏の夫人たる子女史は男爵の四女に相當してゐる。

惟ふに戦後我が工業界は益々多事多端ならんとするの時、氏の如き智能才腕共に卓越したる眞の實業家を斯界に見出し得たるは、我が産業界の爲めに大いに祝福せなければならぬ處である。希くば氏よ國家の爲め自重奮勵せられんことを。

山内政良君

建築用として又裝飾用として、需用漸次に擴大しつゝありし白煉瓦は、戦争以來又一層其需用激増して、現在では我國の化學工業界に押しも押されぬ鞏固なる地位を形成するに至つた。けれども明治二十年頃迄この事業は、未だ其存在を世人に知られなかつた程至つて微弱且つ幼稚なもので、其需用も又至つて狹隘なものであつた。然かも斯業をして今日の如き隆運に向はしめたものは一つは時勢の然らしめしに依るとは云へ、又斯業の爲めに殆んど半生を捧げて之が完成に努めた山内政良氏の功績も認めねばならぬ。

山内氏は安政二年八月江戸下谷練堀小路に生る。幕臣旗本の山内榮良氏の長男で、幼にして父君の膝下に在り専ら武術を研磨したが常に拔群の成績を上げてゐた。而し維新後は家道大いに衰頹して同氏は急轉直下故西村勝三氏の經營にかゝる築地の伊勢勝製靴工場の生徒に迄淪落して行つた。然し氏の非凡の才は決して氏を永く生徒たるを許さなかつた。即ち三四年の後には一躍して同工場の監督となり、明治十六年には深川清住町白煉瓦製造所の支配人に轉じ、次いで同十九年には府下北品川、品川硝子製造所の支配人を囑託された。然し氏の終生の業として最も力を注いだのは矢張り白煉瓦の製造であつた、夙にこの煉瓦をして飽く迄も我國工業會の主要物産たらしめん事を切望して止まなかつた、斯くて氏は當時幼稚にして一人の教導を垂れるものなき斯界にありて、一大勇猛心を奮ひ起し、

十有餘年、傍目を振らず之が研究に没頭するに至つたのである。

斯の如くにして氏のこの不屈不撓の精神は遂に酬られる時が來た。即ち氏が原料の産地の實地踏査迄して研究に餘念なかつたので、我國に未だ製造したる事なき「ガニスターサンド」若くは瓦斯發生用「レトルト」の製造は遂に成功して非常の好結果を得るに至つたのである。この發見によりて我國斯業界が如何に裨益する所甚大であつたかは云ふ迄もない事であらう。かくて明治廿五年に至り、耐火煉瓦の販路漸次擴大發展したるを以て、同所は支工場を福島縣下小名濱町に設け、業務の大擴張を圖つた。而して氏の始終一貫したる奮闘努力は漸次其結果を現はし、本支工場は相俟つて次第に好調に向つて進んだのである。爰に於て同所は遂に當時合資會社の組織を變更し、株式會社と爲し、選ばれて氏は同社の取締役兼支配人となつた。蓋し、同氏がこれ迄同社の爲めに盡せし必然の報酬と云はねばならぬ。

かくて同社は益々盛運に向つて來た。即ち三十有餘年斯界の爲めに一身を捧げた同氏は其技術の點に於ても、其操業及び經營の點に於ても、何人にも決して退けを取らない最適任者であつたからである。加へて氏は其指揮統括の才に於ても又第一人者であつた。氏の苦しい幾年間の過去は克く氏をして職員並に職工の心を充分に汲み取らすべき温い同情ある心を附與した。かくして同工場は恰も一家庭の如く、和氣霽々たるものがある。品川白煉瓦株式會社の盛況も又宜なるかな。

譚つて思ふに交戦五年に涉れる歐州大戰も既に終熄して、今や眞の前途ある工業は新なる自由な力を獲得し、一日々々々光耀ある未來の爲めの準備に急ぎつゝあるが、同社の如きも實に亦其一人者である、而して斯くの如き健實なる基礎を有する同社に、又斯くの如き技量才腕共に優れたる氏を有することは、何者よりも多幸としなければならぬ。同社の前途期待して餘りあると共に、又同氏の前途も赫々たる光明に輝いてゐる。

正田 貞一 郎君

本邦製粉界の權威として世名内外に響く會社に、日清製粉株式會社がある。同社は元上州館林の僻地に呱呱の聲を擧げ、館林製粉會社と稱し資本金僅に三萬圓を以て、明治三十三年創立されたものであつたが、明治四十年十月横濱の日清製粉株式會社と合併し、更に四十三年三月大日本製粉株式會社と合併するに當り、社運は旭日昇天の勢をもつて進み、現在に於ては資本金四百萬圓を以てし、工場を館林、横濱、宇都宮、名古屋の四個所に有する大會社となるに至つたのである。而して斯くの如く同社をして驚くべき發展をなさしめたものは、時勢の力も勿論與つて效あるが、一面重役諸氏を始めとして社員職工一同の協心一致の結果に爲れる奮闘的經營の賜と云ふ可きである。就中、創立以來専心同社經營の任に當つた同社専務取締役正田貞一郎氏の功績は、又特筆するに餘りあるものがある。氏の嚴父は正田作次郎氏と云ひ上州館林の人なり、同氏郷里を出で、横濱に在りしを以て、貞一郎氏は明治三年同所に於て生れた。嚴父作次郎氏は東上州に隠れなき素封家正田文右衛門氏の二男にして、夙に商業に志し分家して横濱市北仲通に移住してゐたのである。氏が天資商才に富めるも蓋し嚴父の血脈を承けたる先天性と、周圍の事情に哺育せられたる後天性とに基けるものであらう。

不幸にして作次郎氏は同氏の二才の時に世を去つたので、氏は慈母に伴はれて郷里上州の館林に歸つたが、十六才の時志を抱き笈を負ふて東京に出で、明治二十年高等商業學校に入學した。かくて學術衆に勝れ、明治二十四年優等の成績を以て同校を卒業したが、同氏が歸郷の志あるを同校の校長矢野次郎氏は深く惜み、同氏をして東京に止まるやう再三の勸告を試みたが、氏は歸郷して一家を經營せざるべからざりし責任ありしにより、之を固辭して館林に歸つた。

斯くて氏は父祖累代の遺業たる醤油醸造業に従ひ、醤油の改善に没頭したが遂に熱心研究の結果遂

に風味佳良なる逸品を醸造し得、之を龜甲正と命名して廣く江湖の賞讃を博すに至つた。恰も當時製粉事業の氣運漸く動きて、世は濳かに之を要求すること切なるものありたるより、早くも之を看破したる氏は同窓長柄氏と謀りて、資本三萬圓を以て館林製粉會社を設立し、之が其專務取締役となりて、専ら經營の任に當つた。

果せるかな、同事業は逐年異數の勢を以て勃興し來り、同社又從來のまゝにては充分時流に添ふ事能はざる憾あり、即ち明治十九年遂に資本金を一躍六十萬圓となし、同地に一萬坪の大工場を設置して當時の人々をいたく驚かしたものである。後四十年熊谷の日清製粉を、四十三年大日本製粉を合同せしめたことは前記の通りである。而して亦一方醬油事業にも、同業者と相謀り、資本金二十萬圓を以て仁川に日本醬油株式會社を設立し、氏は其監査役を務めてゐる。

氏資性恬淡にして隔意なく、居常人に接して毫も街誇の風なく、又至つて謙讓温雅にして人をして自から推服せしむるがある。而も商機を逸せず、敏活明斷且つ周到を極むるは、之れ上州男子の眞面目とする所か。蓋し我國稀れに見る器才である。

中井新右衛門君

中井新右衛門氏は東京の人、播新中井家の家長にして、今は昔將軍家の御膝下、江戸の中心日本橋區金吹町の本邸に呱呱の聲を擧げた。同家は舊幕時代よりの名家にして、又資産家の聞へ高く祖先より各藩金御用達、新川酒大問屋を營んで、幾數代連綿として榮えて居る。

氏は先代中井新右衛門氏の長男にして、元治元年十二月十五日を以て生れ、舊名を喜三郎と呼んでゐたが、明治二十三年十月家督を相續して、先代の名を襲いたのである。氏は資性至つて着實温厚に

して君子の風あり、家系を繼承するに當てもよく舊慣を墨守して、徒らに一獲千金の夢に耽らず、輕舉盲動を慎んで、如何に些細なる事と雖も、決して忽諾に附するを許さない。この爲めに一部の人々は氏を以て、新時代を解せない固陋頑迷なる偏屈の徒とし、嘲笑惡罵を浴せて得々たるものがあつたが、然も氏は飽くまでもこの主義を貫徹して、聊も動搖する所はなかつたのである。

明治十六年六月、資本金十萬圓を以て株式組織とし、中井銀行を設立するに當つても、氏は徹頭徹尾この主義を採つて、其經營方針を定めた。されば、同行の業務は日と共に健實なる發展を遂げ同時に信用も亦大いに加はつて、明治二十六年七月には資本金を三十萬圓に増額し、又組織を合名會社に改め、同三十年七月には更に資本金を七十萬圓に増加し、三十五年又百萬圓となし、以て今日の如き隆盛に及んでゐるのである。之全く平素氏の着實健全なる經營法による賜にして、現在同行が其支店を日本橋坂本町(坂本支店)神田區表神保町(神田支店)埼玉縣北足立郡浦和町(浦和支店)同北埼玉郡忍町(忍支店)同南埼玉郡岩槻町(岩槻支店)同北葛飾郡松戸町(松戸支店)同南埼玉郡粕壁町(粕壁支店)同南足立郡千住町(千住支店)同北足立郡川口町(川口支店)同南埼玉縣越ヶ谷町(越ヶ谷各支店)東京日本橋區室町(室町支店)の十一ヶ所に有し、其基礎の深き、其信用の絶大なる、克く財界の巨擘岩崎、三井の兩銀行に比儔するも敢て遜色なしといはれてゐる。

惟ふに實業家成功者なるものを分類すれば、次の二種類に分つことが出来る。即ち一は一飛千里主義を信奉して一攫千金の奇利を博せんとするもの、他は寸進尺歩の經典を服膺して、涓滴の微細をだに苟しくもせざるもの、之れである。

換言すれば一は猛虎の走るが如く、一は蝸牛の歩むに似てゐる。されば前者は波瀾萬丈にして光彩に富んでゐるが、後者は至つて平々凡々にして一の變化なく、又光彩がない。故に前者の來歴は甚だ世に現はれ易く、從つて後者の來歴は稍もすれば世に埋れ勝である。然し之を仔細に觀察すれば最後

の勝利は何時も後者に存して、前者はかの成功の華々しきと同時に又失敗も極めて烈しい、般鑑遠からず戦時成金の末路にあり。中井氏の如きは實に後者の好典範と云へる人で、かの平時に於ける常住不斷の努力と、堅忍とはよく凡人の堪ゆる所ではない。氏は飽く迄も志氣堅貞なる江戸ッ兒である。

中川末吉君

古河と云へば我邦では、誰れ知らぬものなき銅山王である。初代市兵衛氏より現代虎之助氏に至る迄僅かに三代に過ぎないが、其富の増加は素晴らしきものにて、今日では鑛業家としては勿論、富豪としても我國では、押しも押されぬ位置となつた。之れ初代市兵衛氏の卓抜たる商才に基因するとは云へ、又之れを輔佐したる同家の柱石たる諸氏の功、與つて力ありと云はねばならぬ。

創業以來數十年初代市兵衛氏、未だ在世の頃は事業經營の形式、總て個人經營に屬してゐたが、時勢の進展するに伴はれて、事業も膨大となり、いつ迄も舊套を墨守する事が出来なくなつたので、其事業の全部は悉く會社組織に變更するに至つた、曰く古河合名會社、曰く古河鑛業會社、曰く古河商會社、曰く古河銀行之れである。

就中、古河銀行は創立後日尙ほ淺く、其開業は一昨年九月の頃に係り、斯界の新進に過ぎないけれども、古河と云ふ大いなる背景を有する事と、經營首腦者の畫策宜しきを得たる爲め、行運順に一躍し今日に至つては、東都の銀行界に於ても嶄然として頭角を現はすに至つた、之れ勿論古河の財界に有する大いなる信用に依るとは云へ、又經營者の手腕が如何に卓越してゐるか云ふ事をも、充分認める事が出来るのである。

此古河銀行の首腦者として、最近我國財界に擡頭し來りたるを、同行専務中川末吉氏と爲すのであ

る。同氏は古河家子飼ひの俊足であつて、多士濟々たる同家の人物中、頭腦頗る明敏にして最も春秋に富み、前途多望なりと一般より認識せられてゐるのである。

中川氏は、近江聖人と謳はれし、中江藤樹先生を出せし、近江國小川村より程遠からぬ、今津村の一隅に呱呱の聲をあげたのである、時は明治七年の頃であつた、父は武三氏と云つて、先代市兵衛と極く親密なる交際があつたので、氏も亦其關係から少年時代より古河家へ引取られ、同家で成長し學校へも通學する事になつたのである。

蛇は寸にして人を呑む氣慨ありとか、氏は少年の頃より其態度行爲を群童と異にしてゐた、深沈にして大度あり正に後年の大成を偲ばせるものがあつた。普通教育を卒えると早稻田大學の前身なる東京専門學校に學んだ、而して勉學幾年に及んだが、中途にして感ずる所あり同校を退學し、直に米國に渡りエール大學に入學し、孜孜として學に勉めた、専攻したる科目は政治經濟學であつた。

勉學幾年に及び、螢雪の効空しからず、明治四十一年には目出度く、エール大學を卒業してマスターオブアーツの學位を得る事が出来た、而して歸朝の途に上るや路を歐洲大陸にとり、文明先進の諸國を殆んど残り限なく歴遊し、政治界に經濟界に或は諸事業の施設より經營に至る迄、事巨細に渡りて視察研究し歸朝したのである。此旅行は氏の見聞を廣めし事一方ならず、事業經營の上に就き、參考の資となりし點は實に多大であつたと云ふ事である。

氏は歸朝するや否や、直に足尾銅山の會計課長に任せられた。足尾銅山は我國第一の銅山であるばかりでなく、古河家にとりては唯一無二の金庫である。同家の基礎は爰に定まり、今日の般盛も亦爰に根源を發してゐると云はれてゐる、斯の如く重要な山の而も一山の出納を司る會計課長の椅子に就いたのを見て、氏が如何に強大なる手腕と信用とを併有してゐるか云ふ事を知るに足るであらう、白面の一青年が一躍して此重要な位置に任せらる、氏の得意思ふ可しである。續いて電線部の

創設さるゝや又同時に之が部長に任せられたのである。

氏は青年時代より政治界にも、多大の抱負を有してゐた、志を得れば直に起つて政界に投じ議政壇上に上り滿腔の經綸を吐露してやらうと云ふ念慮は、造次顛沛も氏の頭腦を去らなかつたのである、而して時は來た、即ち明治四十五年五月第二次西園寺内閣の當時に於ける衆議院議員總選舉に際し、氏は年來の希望を貫徹せんが爲め、其郷里より立候補し、馬首を逐鹿場裡に進めたのである。

其當時に於ける氏の意氣込は凄まじきものにして大丈夫將に起つは此秋なり、一身を政界に投じて國家の重きに任せんにはと呼號したが、此事古河家最高幹部に於て不可なりと爲し、氏はそれに牽制せられて遂に立候補を断念するに至つたのである、由來政治家と實業家とは離る可からざる關係ありとは云へ、一商事會社の重役として自から政界の表面に立ちて活躍せんとするは、累を會社に及ぼす虞あり、之れを以て古河家に於ける多くの元老は氏の代議士たる事を不可なりと爲し、遂に半途にして挫折するに至つたのである。之れ氏にとりては年來の宿願を放擲したる譯にて其遺憾察するに難からないのである。

かくて政界を断念したる氏は、依然として古河家に於ける重要な位置に座し諸事業の經營に當るに至つたのである、則ち古河家の傍系事業なる横濱電線の常務取締役、又同じく傍系事業たる横濱護謨會社の創立に當り、今や古河合名會社の理事として、將た古河銀行専務取締役として、其聲望は隆々として斯界に輝き勢威並びなき今日の有様である。

氏が運動に興味を持つてゐる事は、誰れ知らぬものもない有名なる事實である、「健全なる精神は健全なる身體に宿る」この格言を信じて、體育の發達を奨励してゐるのである、例之如何に精透明敏なる頭腦を有するとも之に伴ふ健全なる身體なくんば前途を如何せんとは、氏が居常口にしてゐる所で氏は之れを口舌の上のみ獎勵するばかりでなく、自からも衆に先んじて盛んに實行するのである。

されば自から土俵に上りて力を角するが如きは、氏にとりては日常の茶飯事である、特に柔道を好み今尙青年を對手に妙技を振ふとか、二段の免狀を有するのも宜なりと云はねばならぬ、其横濱電線在勤當時は、構内に道場を設け大いに尙武の氣風を涵養せられたる等、以て其一般を知るに足るであらう、今日の所謂實業家なるものゝ殆んど總ては、折花攀柳の遊びより外に何の趣味もない、かゝる社會にありて氏のみ獨り、高尚なる餘技に耽ると云ふは全く推獎に値すと云はねばならぬ。

氏は又隠れたる旅行家にして、北米、歐洲は勿論、先年は視察の爲め南洋方面に向い、比律賓より爪哇、濠洲、印度の各地を遍歴し椰子の葉茂る南洋の孤島に雄圖を畫し、印度に遊びては釋尊の古跡を偲ぶなど餘裕綽々たるものがあつた、又對岸支那大陸に遊び、滿洲より轉じて西比利亞各地を視察し大陸發展を策する等、尋常事業家の徒にあらず、將に活動的快男子たる事を示した。

氏は本年四拾有六の壯齡にして、大事を爲すは將に今後に屬する、風采堂々として其體軀の偉大なる事恰も力士の如く、實に一世の巨人である、人と爲り性質恬淡にして天真爛漫、一度笑へば三尺の童子も親しむと云ふ、頭腦頗る明晰であつて又細心、決して業務の變理を認らないと云ふ事である、戦後我財界膨脹を重ね、古河家の事業も亦益々多事ならんとするに際し、同家の柱石を以て任する氏の自重を祈りて止まない次第である。

中山佐市君

中山佐市氏は千葉縣の人、元治元年九月同縣長生郡に生れ、嚴父を三九郎氏と稱してゐたが、同家は代々土地の豪農を以て鳴り、其名望は古くより至つて高かつた。同氏は幼にして夙に俊秀の聞へ高く、就學當時も常に其成績拔群の異彩を放つたものである。中學を卒業するや直に上京して、同郷の

先輩成川尙廣氏を訪ね、同家の食客となり更に英漢數學を修め、進んで高等中學に入り大いに爲す所、あらんとせしが、中途感ずる所あり更に英吉利法律學校に轉じて英法學を専攻することとなつた。斯くて同校を卒業するや、田尻稻次郎男の知遇を受け、其推薦によりて大藏省銀行局御用掛となり、日本銀行及び國立銀行の紙幣合同償却案を起草し、又鐵道法規及銀行諸條例改正案を起草して、敏腕の聞へ高かつたが、後官界を辭して實業界に投ずるや。大阪の富豪松本重太郎氏を私淑し、同氏に就きて具さに商業を實地に研究し、以て氏の本領を遺憾なく發揮し得る礎地を造り、現に辛辣なる才腕を縦横に揮ひつゝある。

氏の成功は官界よりも寧ろ實業界にあるや勿論で、其一度實業界の活舞臺に立つや名望共に噴々として揚り、即ち懇請されて氏は東京農工銀行支配人に擧げられたが、其の快腕は同行をして一躍同種銀行の模範たらしめ、當時僅々三十萬圓の資本金を有せしに過ぎざりし同行が、數年を経ずして五十萬圓に増資し、更に昔年ならずして百萬圓の大銀行となり、其昔東京府廳内の一室に經營を取りし同行は、忽ちにして日比谷原頭に牢乎たる石造の洋館を新築し、行務は彌が上に般賑を極むるに至つたのである。

後氏は自ら農工貯蓄銀行を創設して、其専務取締役に推されたが、氏の才腕はこゝにも縦横に其辛辣振りを發揮し現在の如き隆盛を齎した、更に氏は全國農工銀行同盟會幹事にも推され、其改良進歩に貢献すること頗る大なるものがあつた。而して之等は皆氏の本領の表現にして其修養練磨の與る所勿論なるも、亦天稟の實業家と認むる事が出来る。

氏は資性放膽を以て聞へ、財界の星亨と稱せられ、其傍若無人の投機的才腕は、世人をして屢々驚嘆せしめたものであつた。されば稍もすれば世人は氏の人格に就き幾多の誤解を抱き、讒罵を逞しふするの傾きあるも、之は偶々氏の才腕の如何に辛辣を極めるかを反證するに止まり、氏の人物觀其も

のとしては極めて淺薄なる謬見に過ぎぬ。氏はその放膽の中にも極めて細心なる處あり、かの一見傲慢と見ゆる中にも、又奥床しき謙讓の心の漲るあり、斷じて十把一束の成金者と類を異にせる稀れに見るの偉丈夫たるを失はぬ。

内藤彦一君

帝都三大呉服店の一として、其規模の廣大と、其信用の深甚と、品質の優良且つ價額の低廉とにより東邊西陲、兒童走卒に至る迄其名を知らざるなき松屋呉服店の支配人は吾内藤彦一氏である。

氏は同店の柱石を以て目され、其縦横なる才腕、周到なる畫策は、深く世人の感嘆する處なるが、現在同店が斯くの如き成功を收め、斯くの如き名聲を贏得するに至りしは、一に氏の拮据經營宜しきを得たるに依ること勿論で、氏の同店に盡瘁せし功績に至つては、今更喋々夫れを特筆大書する迄もないことである。

同氏は山梨縣の人、慶應元年七月を以て、同縣北巨摩郡圓野村に生る。嚴君を朝政氏と稱し、家は代々酒造業を營み、土地の素封家を以て鳴つてゐた、氏は其長男に生れ、幼にして青雲の志あり、郷費の業を卒へると共に東上して、同人社に入り、碩學中村敬宇翁の薰陶を受けた。

明治十八年氏は鴻圖を抱き一大決心を以て北米に渡航し、桑港に止まること四年、具さに大學教授アンダーソン氏に就いて商業及經濟の學を修め、進んで之を實地に試みんと紐育大日本商會に入らんとしたが、偶先考の訃に接し、滿腔の憾みを呑んで歸朝するの己むなきに至つた。

斯くて明治二十四年現松屋呉服店主古屋徳兵衛氏の當時横濱に鶴岡呉服店を營み、頻りに外人顧客を吸収せんと奔走するに際し、氏は同店に聘せられて専ら其經營の衝に當り、次いで明治二十八年同

店の東京今川橋に其分身たる松屋吳服店を設くるに及び、氏は之が支配人に選ばれて同店の樞機を握る事となつた。爾來拮据勉勵以つて經營を持続し、常に流行の魁を爲し、顧客に對するに丁寧親切を以つてし、一大奮闘を爲したる結果、遂に數年ならずして先輩同業者を凌駕して、同店の勢力旭日昇天のその如きものがあつた。而して現在に於ては、從來の店舗を宏壯雄麗なる建物に改築して顧客の雲集日に滋く、其信用と名聲とは内地は勿論遠く海外に迄響き渡るに至つたのである。之れ偏に氏の手腕の偉大に俟つ所多し。

是より先、故松尾儀助氏銀座街頭に店舗を開き外國製煙草を輸入し業務甚だ殷盛を極め居りしが、同氏の歿後、遺族等は此の業を廢せんとの意嚮あり、氏は痛く之を愛惜して其業を讓受け、明治三十五年來菊水の商號を用ひ、餘力を以て之が經營の任に當つてゐる。

氏は資性温厚篤實、其業務に熱心且つ眞摯にして、而も一店員を遇するや温情を以つて指導し、後進の向上に努むるなど寔に骨肉も管ならぬ如きものがある。氏の今日ある蓋し偶然ではない。神田今川橋畔巍然たる高廈、店前の美觀、店内の殷賑輻輳、并は皆氏の人物の反映である。人材拂底の方今氏の如き又我實業界の好典型と言ふべきである。

坂田 實君

創立未だ數年ならずして我國金融界の大立物となり、資本金一千萬圓を有して、東都第一流の安田三井、第一、十五等の大銀行に對抗し、隱然一勢力を成せるものに豊國銀行がある。

同行の創立は明治四十年十一月に屬せり、當時財界は日露戰役の後を受けて、風雲頗る險惡なるものあり、即ち年來の健實なる起業熱は、一轉して投機熱と化し、形勢は漸次凶惡なる亂調子を呈し遊

資拂底して資本缺乏の喚聲は至る所に漲り、又有價證券暴落して極端なる動機に入り、かくて其不安定な状態は、財界にも侵入して金融機關の破綻倒産は至る所に瀕出するに至つたのである。恰も其時に生れ出でたる同行の經營が、如何に困難なるものありしかは察知するに餘りある。而して當時同行の専務取締役として専ら其經營の任に當つた人は坂田實氏で、同行の今日あるは、一に氏の盡力に依るの大なりと言ふべきである。

同氏は岡山縣の人、安政四年四月同縣川上郡日里村に生る。坂田友次郎氏の五男にして、後分家して一家を創立するに至つた。明治五年上京して慶應義塾に學び、卒業後は國に歸つて岡山中學校及び師範學校の教頭として育英に従事した、後再び上京して時事新報社に入り、同社の業務監督として經營數年に亘つた。後慶應義塾に幼稚舎の設立せらるゝや同社を辭して其監督の任に就き、同舎に教鞭を執ること三年に及んだが、明治三十二年始めて實業界の人となり日本銀行に入ることゝなつた。斯くて同所本店に勤務すること二年、其才能の非凡なるを認められ、拔擢されて名古屋支店長に推さるゝに至つた、斯くて同支店長の椅子にあること五年、後本店重役に大移動ありたる時、本店計算局長に擬せられた、然れども當時恰も豊國銀行の設立計畫あり、即ち氏は之を辭して専ら同行設立に盡瘁するに至つたが、同行の創立を見るや衆望の歸する處遂に其専務取締役となり、以て現在に及んでゐるのである。

思へば同行の經營は實に困難なるものがあつた。彼の財界の暗澹たる、不安定な亂調子の難關を突破して、今日の隆盛を齎すに至つたのは、一に氏の卓越したる手腕に依ること深く、又同時に氏の温厚高雅なる人格の力に依るや明白である。氏は或時は教育家となり、又或時は新聞經營者となつたが、而も氏のこの人格の力は、如何なる境遇に身を置くとも、隨所に光彩自ら現はれて他人を心服させ、他人を善化し、着々事業の發展を促して來たのである。氏の徳望も亦偉大なるかな。

現在我實業界を鳥瞰するに、才幹縦横又當る可からざる人々は極めて多いが、この徳望をもつて人をなづけ、事業の發展を圖り得る人は實に寥々たるものである。云ふ迄もない事であるが根柢ある發展は決して才腕許りではなく、亦人格の力に俟つ處更に大なるものがある。この意味に於て氏の如き寛厚公正なる人格者を吾が實業界に有することは、獨り豊岡銀行の欣びのみならず、今後益々多端なるべき我實業界の爲め大いに人意を強うするに足るものがある。

吉田源次郎君

吉田源次郎氏は栃木縣栃木町の人、明治八年三月を以て、同地度量衡商望月磯平氏の二男として生る。明治二十六年叔父吉田親安氏の養嗣子となり、同地の縣立中學校を卒業すると同時に帝都に出で二十九年十月東海銀行に入り、同行に勤務の傍ら大いに勉學の必要を感じて明治大學に入り、三十五年同大學を卒業するや、三十三年同行本郷支店長に擧られ、三十九年九月に至り、遂に本店支配人に推され、爾來行内一切の事務を擔當し、以て拮据勉勵其經營に専心し、同行をして現在の進運に至らしめた人である。

斯くの如く其經歷の外皮を記せば、同氏の如きは實に平々凡々として一の波瀾なく又光彩なきの觀あれども、而も行路は決して爾く單調にして、又曲折に乏しいものではない。たゞ見れば何の苦もなき水鳥も、其處には又撓まなき努力と、幾多の苦難とがいつも連綿として續いてゐるのは勿論である。惟ふに氏の如きは實に銀行業に於ける非凡なる天才と云ふべく、往年氏が未だ郷里栃木町に在りて、中學校の一學生として勉學中、偶々栃木農工銀行の設立の計畫あるや、氏は其勉學の片手間を以つて定款の作成を爲し、創立より認可を得るに至る迄の一切の手續を處理し、約一年間自ら其經營に當つ

て百事緒に就くに及び、親戚某氏に同行の經營一切を引繼ぎたる一事に徴するも、其非凡なる才能の如何に驚嘆に價するか推知するにあまりあるであらう。

氏は資性至つて温厚なる人にして、斯界中に往々見受くる粗笨下品なる人々と、自から選を異にし其眞摯なる風格は斯界の異數とする所である。而して氏は一言一行苟しくもせず、斷じて輕舉盲動することなく、飽くまでも堅實且つ重厚なる態度を持續し宛として君子人の概がある。氏が東海銀行に入るや、早川取締役より懇々忍耐の必要を教訓され、之を一生の座右銘として、よくこの忍耐の二字を體し、如何なる困難艱苦に處するも、從容として之を甘受する勇氣に至つては、一面意志の強固と氣概の人たるを證すべく、斯界の權威としてよく萬人の龜鑑とするに足る。氏の今日の地位を大成したるや又所以なきではない。

村上定君

村上定氏は廣島縣の人、同縣下安藝の産である。年少にして俊才の聞へ高く文筆に親しみ、明治十三年慶應義塾を卒業するや、聘せられて熊本新聞社に入社し、其主筆となりて縦横の健筆を揮つたが、居る事四年にして再び帝都の地に志し黒岩周六氏と肝膽相照す所あり、即ち同氏と提携して同盟改進新聞に筆を執り、其翌年更に栃木新聞に優聘せられて主筆となつた、偶々時の縣知事三島通庸氏は山形福島の兩縣に振ひし、官僚專政的暴政を以て再び栃木縣下に見へんとしたるを、非官僚主義なる氏は之を聞き憤激措く能はず、事々に其非を鳴らして筆劒舌鋒頗る峻烈なるものがあつた。然も三島氏初め官僚は皆之を冷笑し、黄口の一青年記者何事か爲すと嘯いてゐたが、果然この一青年の所説は縣下の一大輿論を喚起し、流石の蠻勇硬骨を以て鳴らしたる三島氏も周章狼狽殆んど其爲す所を

知らず、爲めに同新聞は實に十六回の發賣停止を蒙つたのである。又以つて如何に其論鋒の峻烈を極めたか推知することが出來やう。

爾來縣下の衆望は翕然としてこの一青年に集つて來た。而して氏の一言一行は直ちに同縣下の輿論の素因を作し、其隱然たる潛勢力は實に執拗牢乎にして且つ熾烈を極めたものがあつた。當時氏の得意や又思ふ可しである。其後氏は何事か感ずる所あり、斷然同新聞を退いて神戸新聞の招聘に應じた時に當時の外務大臣大隈重信伯の條約改正問題起るや、氏は又それを慷慨するの餘り、之が反對の急先鋒となり、大いに其不合理、非理を滿天下に訴へたことがある。又當時の兵庫縣政は、幾多の因習纏綿として實に亂麻の夫れの如きものがあつたが、氏は之を慨嘆して縣知事及十六郡長を敵に廻し、獨得の忌憚なき筆鋒を以つて之れに痛撃を加へ、彼等をして完膚なからしめた。然も其筆鋒あまりに銳利に失し、爲めに彼等に乘せらるゝ所となり、官吏侮辱罪に問はれて重禁錮三ヶ月罰金三十圓に處せらるゝの不幸に會するに至つた。

斯くて氏は一片烈々たる憂國の丹心が禍して囹圄の人となり慘風虐雨に日を送つたが、後幾許も無く憲法發布の盛典に當り、特赦に遭ひて青天の身となりしかば、之を一期として斷然操觚界を脱する事となつた。其後氏は筆硯を棄て、實業界に投ずるに至つたが、先づ山陽鐵道會社に入り、後轉じて明治二十五年三井銀行に入り、前橋出張所主任となつた。時偶々有名なる第三十三銀行の破綻に際し氏は果斷なる整理を行ひ、屢々困難に遭遇したるも萬障を突破して漸く之を救ひ、其功績を認められ本店の調査部長に進み、次で長崎、神戸、名古屋等の各支店に支配人となり、又本店に復歸して秘書係長、調査係長を経て箱崎三井倉庫の支配人となり、更に明治三十九年三井家の後援によりて共同火災海上運送保險株式會社の發起人となり、之が設立と共に推されて専務取締役に擧げられ、専ら其經營に盡瘁したるが、大正二年六月、從來廣島に在りし國民生命保險株式會社が、名稱を共同生命保

險株式會社と改め、愈々東京に移轉し來りたるより、氏は之が専務取締役をも兼任するに至つたが、後氏は同社の取締役社長となり、専ら同社の事業發展の爲めに畫策し現在に及んでゐる。

想ふに文筆に堪能なるものは概ね實務に迂遠なりとの譏をよく受けるものであるが、氏の如きは其何れの方面に於ても、常に披群の手腕才能を示し、世人をして感嘆せしめるものがある。氏資性豪直摯實にして、公理の前には敢て自らの利益を犠牲にするのみならず、天下何者をも懼れざる氣概に至つては、往年操觚界に於ける獅子奮迅の勢を髣髴たらしむるものがある。蓋し氏の如きは吾が實業界の一異彩にして、衆人の尊敬の標的たるに聊かも恥する所なき人物と言ふべきである。

池田寅次郎君

豪放にして而も細心、激昂の裡にも決して常軌を逸せず、剛直にして自己の主張を飽く迄も貫徹せずんば止まざる態度は、一見人をして傲慢不遜なるかに思はしむるも、而もその中に靄々たる一片の温情漲るあり、其縦横なる才氣の中に又高潔なる人格の閃めきて、人をして轉た畏敬の念に堪へざらしむる人、之れを吾が池田寅次郎氏となす、寔に氏は現在我實業界の一異彩にして、嘗ては教育家として岡山中學、慶應義塾の兩校に教鞭を執り令名高く、又政界に入りては後藤象二郎伯の幕下に馳せて辯論縱横し、又操觚界に入りては其侃鏘の筆に、滿天下を心酔せしめたることあり、今亦實業界に雄飛して名聲噴々たり、實に氏の如く多方面に亘りて而も自由自在に自己を發揮し得るもの、蓋し當代の珍とすべきである。

氏は岡山縣の人元治元年四月二日を以て生れ、明治二十六年十二月分れて一家を創立す。かの有名なる池田勝三氏の弟に當り、幼時夙に其才氣凡ならざる人として舌を捲かしむるものがあつた。氏は

青雲の志を抱き、京都に出で同志社に入りしが、同社卒業後は上京して慶應義塾に入り、同校にて福澤諭吉翁の感化により、實利主義の信者となつた。氏が現在實業家としての素因は既に其時に萌芽し、楠風沐雨幾春秋の苦闘は能く鬱然たる繁茂、蟠屈磐の如き根幹を作すに至つた。然も氏は實業家と言ふも彼の凡俗野卑なる夫れと異り、其處に一見して高雅床しき人格の輝きを見るは、同志社時代の新島讓先生の感化とも云へやう。

氏は前に述べたる如く、數奇變轉の半生を送つた人であるが、政界の人たるを斷念するや雄圖を抱いて遠く南洋に渡航したるもある。歸朝後は山陽鐵道に入り、次いで村井煙草會社に入つた。當時恰も煙草業官營の實施となり、氏は專賣局の工場長に任せられて同所に勤めたが、東亞製粉株式會社の創立に當り、村井吉兵衛氏に懇望せられ、同局を辭して同社の常務取締役となり、専ら漢口支店の經營に努めたが、更に村井氏の推薦により、大日本實田石油株式會社の専務となりて同社に入つた。是れ實に其去就進退恰も電光石火の如きものあるは、實業的才幹の縦横八面なるものに非ずんば、決して之をよくする所ではない。

斯くて氏はいづれの事業に關與するも必ず稀有の成績を擧げて他會社をして羨望の標的たらしめてゐる。是れ氏の果斷にしてよく機先を制し、時勢を達觀して之に順應する聰明さは、蓋し他人の企及なし得ざる所にして、又氏は職工を遇すること恰も骨肉の如く、其親切叮嚀なるは、氏の人傑的特質の一面を雄辯に語るものである。

今や戦後吾國の産業は一大飛躍を爲さざる可らざる時に遭遇してゐる。かゝる時代に氏の如き果斷勇進飛躍の人物を我國實業界に有することは、亦以て吾等の心強しとする所である。氏が思途今いづこにあるや。氏の活躍を翹望するの情實に切なるものがある。

小野光景君

帝國海外貿易の正門たる横濱實業界の巨星として、市民の信望を一身に集むる、我が貴族院議員小野光景氏を紹介し、併せて其の事業の一端を述べんとす。蓋し歐洲戰亂既に收まり、方に國際商戰の展開を見る初頭に於て、開港場として意義深き本邦生絲の中心市場たる横濱實業界の盟首ともいふべき、氏の爲人と其の事業を、大衆に告ぐるは刻下の情勢に鑑み甚だ意義深きものあれば也。

君は信州伊那の人、弘化二年三月を以て長野縣伊那郡小池村に生る、慶應の初年時の幕府横濱を開きて開港場となすや、利を見るに敏き商人等の此の地に蝸集するもの多く、港内は帆檣林立して貨物頻りに輻輳し、交易般賑を極む、君や夙に商業に志し慶應二年甫めて東京に出てしが、大いに時勢に感ずる所あり、乃ち出で、横濱に生糸商を經營し、小野商會なるものを起して盛んに輸出貿易の業に従事し、之より氏の事業愈々繁賑を加ふるに至れり、以て項を分ちて之を述べん。

君は慶應年間、初めて貿易商のラインに立ちてより今日に至る迄、市百般の事業の一として、之に關與せざるものなく、實に横濱市功勞者の第一人者として推され、貴族院議員の榮位を冠するの又必然の果報たらすんばあらず、乃ち茲に市政より初めて言はんことす。

君の市政に關與せるは、明治初年、父兵助氏隱退後戸長に任せられたるに端を發し、十四年原善三郎、朝田又七の諸氏と共に横濱埠頭改築の建議を提出し、三十九年臨時横濱港設備委員に任せられ、大正六年十二月、横濱税關海陸連絡設備工事の完成に與つて功あり、又は明治六年學術頒布に基き卒業先的校舎を設立して、子弟の就學を慈惠し、横濱小學校建築の必要を唱導して區内を勧誘し、巨額の金圓を醸出して、横濱市に於ける小學教育の基礎を形成せる、更に明治十五年横濱商業學校の創設を提唱し、同市商業教育の根柢を固めたるが如き、功績實に絶大なり。

次に實業方面に於ける君の偉功は、之を讃するに適切な辭句を知らざる程極めて大なるものあり、明治十一年横濱貿易商總代人總理に擧げられ、十三年横濱正金銀行の創立を發起し畫策奔走する處鮮からず、設立の後推されて取締役となり、副支配人となり、頭取に歴任し、經營と執務の成績大に見るべきものあり、技倆早くも世の認識する所となり、信用愈々加はりしが、明治十六年時の大藏卿松方正義伯と意合はざるものあり、斷然職を抛ち去つて壯烈たる買人の生涯に入れり、於茲直に生糸の賣込問屋を開業し、十九年には蠶糸賣込業組合頭取、二十年洋糸織物取引商組合頭取、二十九年生糸検査所商議員、三十二年横濱蠶糸貿易商同業組合長に擧げられたり、特に横濱商業會議所は、明治十三年氏等の發起畫策せるに胚胎し、其の會頭の任にあること實に前後二十年の長きに及び、商工界に貢献せる所多大なる、他に好く匹儔するものを見ず、横濱火災保險會社、横濱生命保險會社、横濱船渠會社、横濱鐵道會社等の創立また氏の大努力に負ふ所多く、横濱火災保險には現に社長たり、然かも以上記したる所實業界に於ける大要に過ぎず。

市政、文政、商政凡ゆる方面に功績高き君は、明治四十一年選ばれて貴族院議員となり、現に其の位置にありて國政上の功勞も尠からず、仍ち大正四年特旨を以て從五位に叙し勳四等を授けらる、君亦慈善、救済に盡したる所極めて多く、近くは信州小野村に病院を建設し、一切の設備を整へて其地に寄附したるが如き、君が郷土を愛するの情濃やかなるは眞に特記すべき美談といふべし。

かく記述し來りて之を檢するに、君が多年の偉功勳業の甚大なる實に驚異に値すとや言はん、茲に君が現今關係せる、重職を列記せんか此は完く君の聲望信任を表白せる聖證といふべし。曰く貴族院議員、横濱蠶糸貿易商同業組合長、横濱商業會議所議員、横濱生命保險株式會社社長、横濱火災保險株式會社社長、株式會社第二銀行監査役、以上記したる所は凡て君が公的事業に屬するものなり、以下私的即ち個人事業の一二を紹介すれば先づ指を屈すべきは、合名會社小野商店なるべし。

小野商店は横濱市辨天通に在り、明治十六年、君が純買人として初めて開業したる店舗なり、爾來日を逐ふて益繁榮に赴き、同市屈指の大商店たり、また有數の老舗なり、其の後組織を改めて、一族の合名會社とし、光景社長となり、令息寛、敏郎、哲郎、愛婿俊藏の四氏重役たり、生絲賣込生絲輸出の各部を統率し、附屬製絲工場として、信州伊那郡小野村に小野製絲場を、又武州兒玉郡本庄町に橋館小野製絲場を設置經營し、斯界を益すること大なり、之を第一とし、第二を小野貿易株式會社とし第二を大日本ヴェニア製材株式會社なりとす。

小野貿易株式會社は横濱市山下町に置かれ、専ら貿易に従事し百般の商品を取扱へり、大正六年株數一萬株五十萬圓の資本金を以て創立せられ、逐年隆盛に赴き現在社長は光景氏、主宰として取締役に小野哲郎氏あり同俊藏、長藤太の三氏取締役に當り、監査役として小野寛、同敏郎の兩氏當れり、斯界に重きをなせるや今更暇々を要せざる所なり。

大日本ヴェニア製材株式會社は横濱市鶴尾町にあり、大正五年九月株式一千株十萬圓の資本金にて創立せられ取締役に敏郎、哲郎、西川安藏の三氏、寛、俊藏氏監査役たり、而して之が主宰を小野敏郎氏となす、合せ板を以て最も進歩せる木材加工業の先驅をなし、米國其他に社員を派して旺んに活動しつゝある等、能く一族の協力團結と上下の渾然たる融和を保持しつゝあれば、將來の發展や益々大なるものあるべし。

菅川 清君

菅川清氏は我國直輸出業貿易界の重鎮として、其名聲噴々たるものがある。目下は自己の經營にかゝる菅川商會を本陣として、其縦横なる才腕と、深奥なる蘊蓄とを遺憾なく發揮してゐるが、嘗ては

身を外交界に投じ、俊材雲の如き斯界に聲名を馳せ、轉じて商業教育に没頭したことがあつた。思へば氏の才器たるや實に八面玲瓏として、其行く處一として可ならざるはない。寔に美望に堪へざる次第である。

氏は岐阜の人、同縣下中津川町に文久二年九月を以て生れた。幼にして既に俊髦の聞へ高く、夙に平田塾に國學を修め、後上京して中村敬宇翁の同人社に學んだ。而して更に氏は進んで高等商業學校に入學したが、當時の商業教育は至つて不振幼稚にして氏の満足を贏ち得る事が出来ず、竟に氏は同志を糾合して其總代となり商業大學の緊急設立を建議して、大いに當局者の反省と奮起を促したことがあつた。當時にして既にこの卓見あり、その非凡なる才幹は推して知る可きである。

同校卒業後は、同校長矢野次郎氏の推薦により、外務省に出仕することになり、珍田捨己、藤田四郎氏等と共に、縦横の機才を揮つて當時省中の異彩であつた。後香港領事館に赴任し、通信視察に従事したが、歸朝後は山口、名古屋、神戸の各商業學校長に歴任し、幾多の俊秀を養成し、職にあること六年、其間我國商業道德の頹廢をいたく慷慨して、其鼓吹に努めた、斯くて後市俄古萬國博覽會の開設せらるゝや職を辭して米國に渡り、其商況を視察して後、紐育メーソン商會に入り、本邦商品の販路を攻究し、歸朝の後同商會横濱支店長として、大いにその辣腕を揮つた。

而して明治卅二年之を辭し、獨立以て菅川商會を設立し、絹織物、刺繡レース、綿布、屑絲、繭、花莖、麻真田、刷子、卸類及其他の加工品等の直輸出を開始し、多年の素養と幾多の經驗とを傾倒し忽ちにして輸出界の覇を握るに至つた。明治三十七年聖路博覽會の擧あるや、氏は選ばれて日本出品博覽會の理事として渡來し、同博覽會の爲め専心努力せし功により、同會總裁より特種の感謝狀迄受くるに至つた。爾來業務は益々隆盛に趣き、販路も又逐日大いに擴張され、氏亦商況視察の爲め歐米に渡航すること數回、今や營業の區域世界全局に跨り、紐育及び倫敦には支店を置き、濠洲、加奈陀

南米等には代理店を設置し、内地には東海北越其他の原産地に各出張所を設け、其勢恰も旭日昇天の如きものがある。

惟ふに大戰既に終熄せし今日、平和の經濟戰は再び開始されて、自由貿易は彌が上に般賑を極むる日は決して遠くはあるまい。其時にあたり、學殖、經驗、信用、基礎、氏の如く深く廣く堅きものあるは我國斯業界の爲め、寔に欣幸としなければならぬ。氏の活躍や又期して待つ可きである。

鈴木幸作君

俗語に名物に甘いもの無しと言ふ。而かも吾人尙濱納豆を得るに於て斯言を肯定する事は出来ない一夜作りの俗悪成金者流は暫く問はずとして、單に濱納豆と言ふの既に風韻がある。若し夫れ朝食晚餐の卓上、此一椀あらんか、一種の哲學を感ぜざるを得ぬ。濱納豆は實に貴賤貧富を不問、下戸も上戸も口に合ふは勿論、所謂食通に至つては三度の食膳之れ無くしては味覺無きの逸品である。

濱納豆の名聲や既に全國に普ねく、殊に東海道の名物として、濱松の特産として著聞せられてゐるが、此本家本元は實に濱松の溜屋とする。同家は十一代連綿として傳はりたる舊家で、舊幕時代井上河内守の領民として濱松の近郷に在りしが、前代より濱松に移住して現に家業繁榮を極めてゐる。

同家は現に醤油醸造業を主とし、赤味噌、麴味噌及有名なる濱納豆は其副業として營まれ、醤油の製造高年額五千石以上、味噌は千餘石、而して濱納豆は四五百石、此販路は近く東海道一圓より、東京及び甲府方面に延びてゐる。而も其主要業なる醤油の純良にして佳味なるに名聲布かず、獨り其副業の濱納豆の著聞せるは奇なりと云ふべきである。

同家は既に由緒ある舊家にして、濱納豆の起原も亦之れと其軌を一にしてゐる。頃は豊太閤征唐に當り、遠州濱名郡福永村大福寺の住僧某が始めて納豆を製して太閤に献上した。納豆の語は即ち唐を納むるとの意味にて初め「納唐」と書し、大福寺僧の命名する處であつた。而して太閤甚だ之れを嘉みし同寺に七十石の朱印を賜へ、徳川時代に於ても亦朱印寺を以つて終始するの恩典に浴したなど、其因や歴史的ローマンに着色せられてゐる。此故事を有する納豆は後、溜屋に依つて製造方法を改善せられ、現に著名なる濱納豆の名を冠するに至つたのである。

同家の溜屋の稱號を冠せるは安政年間前代當時に始まり、即ち現在營業の開始に因してゐる、而して同家は今や大醸造家として繁昌を極むると雖も、其名聲四隣を出でず、濱納豆の名聲と比すべくも無きは其の歴史的事實に起因せるや勿論である。左るにても曾て征唐軍の前途を祝福せる軍用食糧の兵馬控勿裡より平和の食卓に轉じ、一寺僧の創製溜屋に依りて盛名益々高きなど、又一種の感慨無き能はずである。

溜屋の現主鈴木幸作氏は當年耳順を超ゆる僅かに三、資性摯實にして圓滿壁の如き人、宛然長者の面影を有してゐる。而して氏は單に名奔利走を能事とする庸俗を抜き、稜乎たる義氣と温乎たる情熱を有し、常に徳望家として地方敬仰の標的となつてゐる。氏の事に當るや最も親切丁寧にして、献身の態度を以てし、明治二十四年以來濱松町會より市會となる迄始終議員として町市政に貢献する處あり、尙商業會議所議員としても初期よりの功勞として今日及び、其市政壇上に於て、將た、商工業界に於て何れも令名を博してゐる。更に氏の事業界に於ける勢力を見るに明治三十七年氏自ら發起人となりて濱松電燈株式會社を創立して同地の市況に明星を投じ、其社長となりて銳意劃策大いに社會の發展を期して着々効を奏し、一面該事業の應用に依りて同市の產業界に一新紀元を劃さんとするに當り、偶々日英水力電氣株式會社に買収されて、氏の期待は一時頓挫の已む無きに至つた。然し當時

既に氏の努力に依りて相當の基礎を形成せる以上、買収されたりと雖、現に盛大を極めつゝある日英水力電氣の今日あるは、又氏の力に負ふ處尠しとせざるや勿論である。

其他氏の現に關係する事業は日本樂器株式會社、日本形染株式會社、濱松紡績株式會社各監査役、濱松鐵道株式會社、資産銀行、濱松委託株式會社、濱松貯蓄銀行各取締役等十指を屈するに垂んとし以上各社の機務に參與して氏一流の八面玲瓏の應對を爲しつゝあるは當に偉とすべきである。如此氏の勢望隆々たるは必ずしも氏の野心其物の反映にあらずして、寧ろその高雅にして圓滿なる人格と、其陰れたる偉器は自ら世人をして氏を認識せしめ、即ち其重役に懇請さるゝ所以である。

氏は其家を相續して四十三年能く先代の遺業を捨てず、以つて舊家の面目を存して濱納豆の聲價を高め、更に醬油味噌の醸造に發展を致し、而して現に以上の諸事業に關與して公私何れも成功してゐる、蓋し之れ以上氏の人物の細叙を望むは寧ろ迂愚に近く、既に全約をトするを得べきである。只濱納豆の名聲や高し、氏の名聲又益々然るを思はざるを得ぬ。

木俣千代八君

商工業國としての日本は、其の歴史餘りに長からず、一は幕府の久しき鎖國に幽閉され、一は時人の泰西の學術文化に目覺るに餘りに遅かりしが爲なり。然れ共、織物の工業に至りては、元來日本の重要特産にして、絹布の精巧なるより、木綿織の素質耐久なるに至るまで、其の生産事業は往昔より開かれ居たりき、されどこの時代に在りては、只各自の必要に依りて造られたるものにして海外地との交渉絶えてなかりし爲、國家生産上には、毫も意を用ひられざる有様なりしが、偶々幕末尊王攘夷論の喚發より明治維新の大業を完成するに至り、以來駸々乎として産業發達を來し遂には莫大なる國

產品として海外に輸出さるゝの今日に達せり。而して其の進歩發達の徑路を見るに頗る急速にして到底維新前の其れと同日の論に非ず。殊に日清日露の大戦は島國的逸眠を覺醒せしめ、爲めに經濟上の新世界を建設するに至り産業の發達極めて顯著なるものありたり。而して此の經過を、現在より回顧追想せんか、其の事業の如何にも平易に行なはれ、其の進展の頗る順調なりしを思はしむるも、未だ國民の自覺や甚だ微弱にして且つ、日本製品の痛く其の素質を排せられし當時にありては、當業者の其の改善の辛苦に至りては必ずしも尠少なりと言ふべからず。

吾人は現在我國の世界列強に伍して、敢て遜色なき國産の發達を欣喜祝福するの日、亦維新當初より功勞者に對して、轉た感謝の念禁する能はざるものあり。

此意味に於て吾人は國産の進歩發達上斯く顯著なる功勞をなしたる有志の、長久と其堅忍不拔の精神を讃するの餘り、茲に其の一人たる木俣千代八氏に就き少しく記さんとす。吾人は今木俣氏の功績に就きて記するに先だち、同氏の境涯の少しく他の短期速成的事業家と、其の趣を異にせる點に付き少しく筆を呵せん。

それ、人に創業の偉才あり、又守成の大器ありて、一言に其の優劣を速断し得ずと雖も、世に往々創業の才ある割合に、守成の大器に乏しき者あり。其の父祖が粒々辛苦能く數百萬の財を積み、後世に誇るに足る可き事業も、多く三代目は、父祖の事業成功の眞髓を解せず、金の有るに任せて濫費浪消し、事業を顧みずして遂には、折角の資財も瞬時の中に傾盡するもの少からず。然れば即ち守成の業實に容易ならずと雖も、實は否らず、是は其の人材の如何に依りて決するのみ、今吾人の云ふ木俣氏は、實に此の守成の大器を完備せる人にして、氏は實に歴代の祖先の業を繼ぎ、更に時勢の推移に順應して、専ら營業方針を改善し、産を増し富を加え、以つて家運の盛大を示しつゝ、ある現代に於ける創業の偉才なりとす。

吾人は今氏の經歷手腕を記する前に少しく同家の既往に遡り見んに、元來木俣家は土地の舊家にして、世々綿花商を營み、又は繰綿原料を近隣の農民に貸與して、白木綿を紡織せしめ、之れを一手に引き受けて他國の商人に卸すを業とせしが、享保年間の當主千代八氏は、機才に富み、亦經世の志ありて、紡織業に改良を加え、單に白木綿に限らず、縞物をも製出せんとて自ら産地として著名なる伊勢、尾張等の諸國を歴訪し、親しく斯業を視察して大いに得る處あり、後ち、其の術を地方農民に授導して機業の一大革新を起し、以つて今日の國産品遠州縞の端緒を開きたる人なり。

由來靜岡縣濱名郡は天流川の流域に沿ふたる平野にして、土地豊沃、一般作物を産出せる外に、綿花の栽培に適し、其の産額も尠少ならざるが故に、自然と紡織の途も開かれたるが、地方農民は専心一意、舊慣に依りて働くのみ苟も之れを改良し發達せしめて、國産を擴大するを知らざりき、此の時に當りて、祖主千代八氏は、意を茲に致して自ら奮發して各地を遊歴し、能く遠州縞の端緒を開き得たるは實に敬服に價するのみならず、我國産業界の大恩人と謂はすんばあらず。而して更に敬服すべきは、常に木綿織に付いて功勞ありしのみならず、其の販賣法等に至りても良く周到綿密なる意を注ぎ、之を市場に出して、恰く他國に遠州縞の販路を振張せるが如き、内外の事蹟共に正に偉績と稱せざる可らず。

木俣物産會社と木俣家とは、歴史的關係の下に之を經營しつゝあるが、吾人は更らに再び、木俣家と此の遠州國産との特殊の事實に付きて記さざるを得ず。即ち、木俣家の居住する所は、濱名郡北濱村にして、此處に木綿を有せるも、時代の推移に伴ひ、其地理的利便の見る處あり、日清戦後本社を濱松市鍛冶町に設置するに至れり。而して斯の如く遠州縞と密接至大の關係ある木俣家は、歴代の主人悉く此の木綿織の賣買を業となし、維新前、即ち安政年間に在りては、遠州は勿論、駿、甲、信の各地にまで、其の盛名を謳歌され、遠州縞の販路は實に數ヶ國に亘りて擴大され、殆んど獨占無比の

觀ありたるは、今より想見するも豈誇る可き壯觀ならずや。然も吾人は、今日迄同家の貢獻せる功績の如何に甚大なりしかを想到する時、國民的立脚地よりして、之れに對し多大の謝意無き能はず。更に明治維新の交を見よ。當時は百事悉く更新したるを以つて、我が木俣家に於ても、前代千代八氏は之れに適應すべく夫れく經營組織を變更し、殊に交通發達の便開けて遠州物産の販路、需要逐日多きを加ふるを見るや、之が適應として舊慣に拘泥せず、大いに外國綿糸を輸入し、盛に紡織を奨勵し、又は水車紡織事業の勃興に依りて、能く木綿織原料の供給を受くる事となせる如きは、實に時勢を遠視するの明識ありと嘆賞せずんばあらず。猶ほ、前代は、明治十六年、附近笠井町に笠井物産株式會社を創設し、自ら其の社長となりて、廣く東京より近畿東北地方まで其の販路を擴張し、多大の經費と勞力を費して更らに屈する處なく遂に之が成果を收め得たるが如き又大事業と稱すべし、而して會社の後年不幸にして解散の止むなきに至れるや木俣家之が全部を承繼し、木俣商店物産課と稱するに至れり、之れ現在の木俣物産會社なりとす。

吾人は前文に於て同家の國家的偉業を推賞する餘り遂に多言を其の祖業に費したるが、最後に當主木俣千代八氏の事蹟を見んに、同氏は慶應三年の生れ、當年五十三歳の老練家にして、幼時より専ら父君の業を助けて事業の擴張に努力し、其の性温健にして且つ義氣あるは遠近に德望高く、又其湧然たる才智、其敏活熟達せる經濟的手腕は克く父祖の遺訓を遵守し以つて今日の大器を成すに至れり、而して事業の熱誠なるに至りては當代稀に見るの士にして、嘗て、高松府縣聯合共進會、關西府縣聯合共進會第四回内國勸業博覽會、第五回内國勸業博覽會等の審査員に推舉され、更らに事業關係としては同家物産株式會社の經營の外現に東洋酸酢資料株式會社專務取締役、日本形染株式會社永世銀行の各取締役を勤め、東海道は勿論、關西關東に通じて有力家たり、殊に公共事業に對し多くの趣味を有せるが故に、屢次戰時中大藏省監督の下に滿鮮地方を視察し、自己の營業たる綿布輸出貿易に付いて得る處あり、

しのみならず、一般の福利を圖る爲め有志と提携し、永福公司を起し、現に經營の衝に當りあるが如き、片々たる俗惡成金者流と其趣を異にするは欽すべし。今や國產獎勵の聲大にして經濟界更に多事ならんとする時、氏の一大活躍に俟つ處大也、氏や自重加餐して吾人をして満足せしめよ。

鳴瀧 幸 恭君

明治革命の事あるや永く昌平に馴致されたる公卿華胄の人は、一朝遽かに職を解かれて、多くは處世の策に乏しく失敗の悲運に遭遇したる人々が多かつた、又よし其難關を突破して擡頭した人々があつたとしても、多くは政治的及び其他の方面にして、實業界に身を投じて、華々しく斯界を乗り切る事の出來た人は、至つて少いのである。吾が鳴瀧幸恭氏の如きは、其異例に屬する人で、氏の斯界に有する卓拔なる識見と手腕とは吾人の等しく讚嘆する處である。

氏の祖先は、長くも人皇六十七代三條院天皇の皇子、小一條院敦明親王より出でられ、親王の四代を行謙と云ひ、初めて姓を鳴瀧と稱せられたと聞く。而して吾が幸恭氏は其四十幾代かの孫男にして代々御室仁和寺宮に任へ、氏も又維新の際には故小松大將の宮に屬して居たのである。氏は初少より漢籍に親しむ事深く従つて其造詣も深く、御室漢學校の設立さるるや即ち氏は之が助教授に擧げられ傍ら武術の訓練を受けて居たが、慶應四年小松宮が還俗の後は兵部卿となられ越後路の總督として出征せらるるや、兵部卿附屬の多田隊、高野隊、甲賀隊の郷士之れに従ひ、氏は尾崎三郎男の兄、故村上直達氏と共に之を率いて越羽の間に赴き、莊内の城主酒井左衛門尉の兵と、激戦三回、遂に之を降伏せしめて大功を顯したことがあつた。

尋いで氏は宮を奉じて江戸に入り、後京都に還りて専ら三隊の訓練に従事したが之を軍務官に引き

繼ぐに方り、氏を更めて分隊長として命せんとの内旨ありしも、氏は之は屑しとせずして辭し、明治三年頃東京に在りしが、時に富岡八幡の別當永代寺住職某の推薦に係る宮川なるもの、小松宮の家老職となり、權を弄して奸譎言語に絶するものがあつた。されば氏は大いに憤慨して正義の士と謀り、之を退けて君側を清め、復故あつて京都に戻り、明治六年京都御所に於て始めて博覽會の開設せらるや、舊田中嶋隣氏が兵庫典事として入洛するに遭ひ、偶々同氏の勸誘によりて同地に至り小學校員を職とした事があつた。而して明治七年には兵庫縣警視課に這入り、明治十四年刑法治罪法の施行準備と共に一時檢事補となり、再び縣官に復して治罪概則なる一書を著し、之を一般に頒布して其適用を知らしめたる等我國司法制度草創の際には其貢獻する所尠くなかつた。されば當時に於ては京都の勸業、大阪の土木、兵庫の警察と稱せられ、我國斯界の重きを爲してゐたのである、然し内海忠勝氏の知事たるに及び庶務課長に進み、明治二十年神戸區長兼八郡郡長に任せられ、同二十二年四月市制實施と共に、満場一致を以て市長に擧げられ、同二十八年夏再選同三十四年迄在職すると實に十二年、其間に同市の爲めに貢獻したることは、道路の開鑿、學校の建設、水道の敷設、築港の必要を唱導する等へ數立つれば違はない。寔に神戸市の今日あるを得たるは氏の功績與つて力あるのである。

而して爰に市の事業一段落を告るや、氏は自ら退ひて須磨に寓居し、悠々として閑日月を樂まんとしたが、世間は氏をして永久閑地に在るを許さなかつた。由來氏は神戸市の長父にして神戸に起る難問題と云へば氏の胸襟を惱まなきなかつたものは稀であつた。而して氏も亦よく此等の問題の解決に此上もなき満足と興味を有して居たが、殊に氏の得意とする處は兩者の中間に立つて、紛糾せる事件の調停を執る事であつた。茲に於て偶々神戸貿易倉庫會社が、社長廣瀬滿正氏の後任たるべき懇請已み難く始て實業界の人となり、又同氏の關係せる貿易銀行に於て、重役間に或る軋轢を來し其場合にも氏を起して貿易銀行の頭取として之を解決せしめたのである。

爾來氏は同市の實業界に盡瘁すること多く、即ち明治三十六年縣農工銀行が大失態を演ずるや之を救ひ、又縣下の大問題たりし神戸貯蓄銀行の破綻の如きも氏の力を俟つて始めて徹底的救済を見、現在に於ては神戸信託株式會社の社長及東洋輸出木材株式會社の取締役等を兼任して、其信望名聲當に全市の實業界に於てのみならず、全國斯業界に錚々たるものがある。

氏は道がに名門に生育せられたるだけ、其氣品と云ひ人格と云ひ、常人の到底及ばない高雅な優美な高尚な風格を有して居る、其人に對するや懇篤にして寛容、常に對者をして一種の温味を感せしめ而も一面には又凜として冒す可からざる權威あり。親しむべくして狎る可からざる眞の君子人の影を存し人をして思はず敬虔の念を禁せしめないものがある。以て夫れ後進の士にいたく温情と愛撫と親切と同情とは、氏の高邁なる人格の自らなる發露にして、氏のこの温い胸の中で哺育された人々が幾百人の多數に上つてゐるのである。吾人は事業家としての氏、公人としての氏を讃嘆すると共に、人格者としての氏、眞の教育家としての氏の方面に、更に甚大なる讚賞の念を禁じ得ないのである。大戰一度終熄して國家は今經濟界、思想界、教育界、事業界等凡ゆる方面に於て多事ならんとする時、吾人は同氏の如き人士が神戸市にあることを深く心底より欣賀とするものである。

小曾根喜一郎君

時局以來神戸に於ける商工業の進展は、實に吾人をして驚異の眼を睜らしめらる、其生氣潑瀾たる氣勢の横溢せる點は、先進地たる大阪及東京を遙かに凌ぎ、貿易港としては五港の首位たりし横濱を突破して其勢定に旭日昇天に比すべきものがある。之を十年前の同地に對比して見ると、其變轉の著しき殆んど隔世の感あらしめて居るが、五港中この繁賑並なき神戸の實業界に、光彩陸離たる代表的

人物として我小曾根喜一郎氏を擧ぐるに何人も躊躇せぬであらう。

今試みに氏の關係して居る事業を擧げて見れば、日本羽二重株式會社の社長を初めとして、神戸海上運送火災保險會社、兵庫電氣軌道株式會社、富士身延鐵道株式會社、神戸醋酸工業株式會社等の各監査役、阪神電氣鐵道株式會社、九州電氣株式會社、日本毛織株式會社、日本酒造株式會社、長崎電氣軌道株式會社、阪神土地信託株式會社、東洋捕鯨會社等の各取締役を兼任して居る。

されば同氏が神戸の實業界に如何に多大なる貢獻を爲せしかば茲に贅言を述べる迄もないであらう而し同氏の神戸市に盡瘁せるは實に實業界のみではない。今其代表的を實例を擧ぐれば、氏が心血を傾倒して爲せる湊川改修工事の如きは其最も好適例であらねばならぬ。

氏は安政三年を以て兵庫に生れ、幼少の頃小曾根氏の養嗣子となつた。氏の先代喜一郎氏は始め櫛屋を業としてゐたが拮据黽勉の結果、多くの資産を造り、晩年に至つては貸家貸金を業として居たのである。

然るに明治十八年先代の歿後家督を襲ぐや、英敏なる氏は私に世の趨勢を看破し單に先人の舊規に則り消極的方針を以て僅かに其遺財を死守し、迷妄陋劣なる蓄財主義を執ることの不可なるを悟り、當時因循姑息なる兵庫市民の惰眠を驚醒して、殖産工業の大策を行はんと種々熟考の結果、爰に先代の遺風を放擲して嘗て放出したりし貸金を漸次に回収し、貸家を賣却して一部を地所に代へ、又其大部を新事業に放資するに至つた。是れ即ち氏が今日の大を爲したる所以である。

爾來氏は勇邁猛進果斷決行、一度決すれば飽くまでも初一念を貫徹せざれば止まざるの概を以て新事業を畫策し、又之に参加した、されば往々にして世人はこのあまりに一徹なる氏の性格を、自我に固執するものなりとして批貶するものがあつたが、これは要するに一つの偏見にして、若しも氏にこの一徹なる強い性格がなかつたら、今日の成功を贏得することは蓋し難かつたであらう。就中氏の過

去の生涯の間に最も光彩を添へたものは前述したる湊川改修事業の完成である。元來この工事は曩に藤田傳三郎氏が一度先敗に終りし難工事であつたが、氏は進んで自ら其衝に當り、田中市兵衛、大倉喜八郎、及藤田傳三郎氏等と提携して明治二十九年頃湊川改修會社を組織し、拮据經營の結果、終にこの一大工事を竣工するに至つたのである。抑々同工事の完成たるや、神戸市民に取つては實に一大福音で、即ち同市民が常に水害毎に侵されて居た慘狀を免れしのみならず、今や同地は般盛繁華の街衢となり、不夜城裏を現出して市の發達を助成し、延いては國富を増進する莫大なる貢獻を成すに至りしものである。亦氏が生涯の光彩であると共に、神戸市民の齊しく感謝欣喜する處でなければならぬ、氏は最近其關係事業を殆ど息貞松氏に譲り、舞子の別邸に老後の安靜を保ちつゝありと雖も、事業界は意氣壯者を凌ぐ氏の明智に俟つものあるを以て容易に隱退を許さず、依然として事業界の明星として瞻仰せられつゝあり。

中村忠七君

時局の勃發以來、我が國經濟界に與へたる其影響は實に顯著深甚なるものあり、海運、鐵鋼、織布、藥品を分たす凡ゆる生産に於て稀有の伸展發達をなしたり。而も此現象たるや表面喜ぶべきが如くして、實は然る所以無き也。此の潮勢の一度我國に流漫さるゝや、國內の全生産業は勃然として擡頭し忽にして凡百實業界の盛觀を呈せるが如きも、此急劇なる進化は其永久にして健實なる根源的なる國家生産事業に思慮せずして、只黄金萬能の淺薄にして單純なる時代思潮に支配されたるもの多く、隨つて此粗製濫造の事業勃興を劃し、豪奢成金の時代とは化し了せり。而して只一時の時勢に驅られ不備不調の資本の上に建設されたる生産の焉んぞ長久に持續發展するを得んや、果然一度び西歐の天地

休戰條約の調印せらるゝや、急轉直下世界經濟界の一大變轉機は造られ、之が反響の來すところ我國製品の輸出停滯となり、佛國の名邑ベルサイユの會議如何の手控への偏見となり、一時彗星の如く現れたる我國生産業者の、此の直接一大痛棒を受けて、俄に匆忙として其の兩翼を收めたるが如き更に之が爲には各地に幾多の失職者を生せしめたるに非ずや。斯く内に外に混沌せる状態を抱持しつゝある我國現在の經濟を如何に處理し擁護し、前途更らに發展の餘地を見出す可きかに就きては、論議を別に存すとして、吾人は先づ此に、經濟界の消長は一に實業家其人の如何にあるに想到し、元來我國事業者の、國家社會の根本たり、永久に健實ならざるべからざるに、却つて之れに反對して生産起業の爲め、斯く百万無策、爲す處を知らざる醜狀に鑑みて、泥中の間、尙誠實にして愛國の俠氣ある、健實なる、事業者を紹介するを以つて最も有意義と爲さずんばあらず。之れ專恣横暴且つ浮華輕擧なる現時斯界に在りて正に白蓮薰香の感あるべく、以つて斯界の好刺戟たり好注射劑たれば也。

静岡縣人中村忠七氏は、熱して誤らず而して又冷靜にして温雅なる、愛國の實業家なり、其の一片の俠氣の郷土を愛するや又頗る深遠にして、且つ斷行的なるものあり、古來より善隣は愛國の發露なりと、中村氏の如き又この名訓を唯一の信條として、愛を近隣に施しつゝある人にして、其の義心たるや一郷より一國と普及し、今や其の德望頗る高し。噫それ尊きは愛郷心なるかな、郷を愛する者は即ち國を愛すと、吾人も亦愛郷心の乏しき者を好まざると同時に、之れ有るの甚だしき人を大いに尊敬す。殊に現代斯の如き人あるを見るに及んで、吾人は一種の欣快を禁じ能はざるなり。

君の郷土濱松を愛するや、特に熱烈にして、如何なる場合と時期とを問はず、又事の善惡を論せずして、郷土の爲には、專念一意之れに當りて屈する處なく、他郷人の蜚語の如きは、毫も耳を藉さざる處正しく尋常の企及し能はざる所なり、然れば即ち、濱松の市政、教育、起業等に衝りては、何れも同氏の交渉せざるはなく、市民も亦痛く氏の誠實に服してか、悉く氏の意見に聽き、兩々相俟

つて、市の公益を成就しつゝあるは、現代稀に見る所なりとす。而も氏の愛郷心たるや、必ずしも偏執的なるに非ず、世人偶々氏の餘りに愛郷的觀念の厚きを見て、或は偏執なるやに誤解するなきを保せずと雖、其の誤解蜚語に依りて或は躊躇逡巡するが如き凡人と趣を異にし、如何なる誤解を受け蜚言を蒙るも、更に顧慮せず斷々乎として自己の信する處を執行す、豈又一傑物たるを失はず。

吾人は以上に於て中村氏の如何に愛國心の厚きこと且つ其の抱持する主義主張の如何に透徹せるかを述べたり。而して更らに氏の事業的手腕と其の雄大なる精神と、奇智縦横の能才を記さんに、氏は遠州濱松の生れ中村惣七氏の二男にして本年六十三の老練家たり、明治七年分れて一家を創立す。其の間前後して臺灣の役及び西南戦争あり、世上騒然として、社會の状態混沌たるものありしが、氏は此の圈内に在りて徐ろに時勢を洞察し孜孜として一家の經營をなす、其の辛酸たるや、吾人の秃筆を以つて盡し能はずと雖も、飽く迄堅忍不拔の大野心は、此の圈内にありて聊かも屈する所無く奮闘努力を續けたり、惟ふに氏の今日あるは概ね壯年の辛苦より得たる苦き經驗の資賜たりとせん乎。

而して爾來孜々として數十年、明治四十年日露戦役を中心として、當時の濱松地方の産業著しく勃興し來りしに着眼し、同市の實業家鈴木仁一郎、宮本甚七、中山、竹内、津倉、池谷、山葉、田畑の諸氏と相謀りて、濱松倉庫株式會社を設立し、入りて監査役の榮職に就き、更らに之れと前後して、濱松輕便鐵道株式會社を起し、現に同社の専務取締役たり、其他、日本樂器株式會社、大日本軌道株式會社、帝國製帽株式會社、遠江煙草製造株式會社、大正信託株式會社其他數種の重要會社の重役又は關係者として、彼地實業界の一中樞たり、又專賣局煙草元賣捌人にして、其の營業者たるや地方に於て大資産を有し併せて信望高き者を詮衡指名するものなれば、以つて氏の如何に重要な地位に立てるかを知るを得べし。

吾人は常に、公平無私を標榜し、常に左右に曖昧にして自から士君子を氣取る者を、蛇蝎の如く嫌

忌す、何んとなれば、斯の如きもの世に在るに於ては恰も人體に盲腸の存するに似て、在りて何等の益を爲さざるのみか、偶々病魔の媒介を爲す恐れある如く、之を國家に取りても社會に取りても何等の裨益する處なく、屢々進運發達を阻害するものあれば也。茲を以つて吾人は、我中村氏の如く假りに偏狹と見られせよ、我執と誤らるゝも、一定の確固たる目的を樹立し、而して屈する處なく勇猛躍進する人士を最も尊重する所以にして、中村氏の郷土を思ふ事、至誠熱烈なるは既に前述の如く、亦其の實務的手腕に於ても、明敏と一種老成されたる熟達は、既に一般斯界の認むる處にして、氏の市參事會員たり濱松商業會議所會頭たるは蓋し當然の事由而已。而して之等の公職は氏に取りて、只市の公益を圖り福利を増進する機關にすぎず、若し夫れ、多數者に見る如く、公職を帯びて單に名譽とするが如き者とは斷じて類を異にし、其の公職の公職たることは氏の如き眞摯の人に依りて始めて其の眞價を發揮するものと謂はざるべからず。

吾人は氏の滿腔の誠實と白熱燃ゆるが如き愛郷心を悦ぶものなり、氏や更らに奮勵努力一步を進めて、此の熱誠を我邦家の爲に傾倒されん事を切望し、併せて氏の精神の斯界の範たらんことを祈念せずんばあらず。

田邊貫一君

富山市に於ける富豪の第一人者として、又同地開發の實業家として、名聲噴々たる人に田邊貫一氏がある。氏の現在關係せる事業は株式會社十二銀行を初めとして、富山電氣株式會社、寶田石油株式會社、福島合名會社、東洋鐵合資會社、朝鮮皮革株式會社、奥山ビルブローカー等の諸會社にして、氏はよく財界の大勢に通じ、其機微を捉ふるの敏捷なることは世人の深く感嘆してゐる所である。

れば一度氏の關係したる事業にして一として失敗の悲運に遭遇したるものは曾てない。氏は實に同地方に於ける實業家の好典型として、人も許し又自らも任じてゐる又所以ある哉である。

富山市星井町に一見してそれとわかる宏壯雄麗なる邸宅は氏の住居である。氏の乃父は田邊甚三郎氏と云つて、嘉永三年中野町に生れた。この子にしてこの父あり、氏の父君も又決して凡々たる人ではなかつた。壯年の頃青雲の志を抱いて單身上京し、某店に入りしも、新に兵營の金澤に設けられるや、機を見るに敏なる同氏は直に赴きて其炊事一切を引受けた。之即ち同氏の成功の階梯を造つたものである。

斯くて甚三郎氏は再び上京して大倉組に入つた。そして氏は同組に於て大いに商才を發揮し、社運の發展に努めた。爲めに社長は其非凡なる才能を認め、拔擢して大阪の支店長に赴任させたが、氏は同店に於ても一意専心よく社運の隆盛に努め、爲めに數萬金の賞與を受けた事があつた。然し氏の器は決して一使用人に甘んずる如き小なるものではなかつた。即ち獨力以て事業の經營に當らんと志し大倉組を辭して自ら沼島組を起すや、氏の才能は益々發揮されて、其名斯界に謳はるゝに至つた。かくて北清事變及び日露戰役に際しては軍需品の調達を命せられ、一舉にして莫大なる利益を獲得した。しかも氏は決して單なる事業家ではなかつた。愛國の情至つて深く、慈善の心至つて厚かつた。氏が神社佛閣の爲めに献金したる額は莫大なもので、又幾多同地方の公共團體の爲めに進んで寄附したる額も決して尠くはなかつた。斯くて氏は明治四十年、其華々しい奮闘の歴史と、美しい愛國の至情とを遺して、大阪の地にあへなく病歿したのである。

吾が貫一氏は即ち同氏の長子である。氏はこの父君の美しい血と、強い意志の力を與へられて明治十二年に生れた。而して二十八年慶應義塾の幼稚舎を出で普通科に入り更に大學に進んだ、三十三年一年志願兵として入隊し、歩兵少尉に任せられ、正八位、勳七等を受けられた。資性至つて温厚篤

實にして苟めにも傲慢の風なく、何時も謙虚なる態度を以つて人に接してゐる。而して公共事業の爲めと云へば、巨萬の額と雖も、何等逡巡する所なく抛つて吝まざる風は、實に父君に酷似して床しい美點と言ふべきである。されば赤十字社、軍人後援會、育英社、武徳會を始めとして、學生養成、或は學校新築、神社佛閣等の爲め醸出せる金は、實に縷指するに違はない。

又氏は現在同地の商業會議所の會頭を務めてゐる。大正六年之が任に推されたものであるが、而も同氏が其衝に當るに及び、銳意商工業の發展に盡瘁し、同地の事業をして顯著なる發達を成さしめた就中昨年、年來の大問題たりし飛越鐵道問題を、他の有力者と圖り、一舉にして之が解決を爲したるは、未だ世人の記憶に新なる處、之れ偏に氏の熱誠なる努力の賜と云はねばならない。斯かる絶好の適任者たる會頭を得たることは、獨り同會議所の爲め喜ぶべきことのみならず、又實に同地の爲め、祝福して餘りあることである。

氏や未だ春秋に富む。我國各種の工業漸く眞の發達を遂げんとする時、氏の如き人材を吾國實業界に有することは、吾人の深く欣幸とする處である。

野口 遵君

人間に取りて鹽、砂糖、水其他のものが必要な如く、又農作物に取りても、窒素、硫酸アンモニア其他のものが必要である。

就中窒素は、常に農作物に必要缺くべからざる主要素であるのみならず、又吾人の日常生活上に取りつても、最も必須なる主要素である。さればかゝる重要な必須素が、農作物に多量に包含されてゐると否とは、人體保健の上より、實に大なる問題で、吾人はこの窒素が尠しくても多量に農作物の中に包

含されんことを切望して止まないものである。

然りと雖も、土地の窒素を含有する分量には、既に限りがある。同時に農作物にも、其包含の分量に一定の局限がある。然し吾々はこの局限された窒素の包含分量によりては、到底満足することは出來ない。加之、其含有する分量は、農作物の數度の栽培により、漸次其分量を低下し來るに於てをやである。

茲に於て吾々は、何等か之を人為的な方法によりて、補填しなければならぬ。こゝに人造肥料の必要な所以が起る。翻つて現今肥料として用ひられる須要品を數へて見ると、其主要なるものは智利硝石、硫酸、アンモニア、及び石灰窒素等の數種である。而し智利硝石は、其供給地に既に限りがあり而も年々歳々多量のもの其處から掘出されてゐるから、早晚之はいつかは掘り盡される運命に到達すべきである。又硫酸アンモニアは、石炭コークス等より成出する副産物なれば、又其石炭掘出にも限りあると共に、現在に於ても産出額大凡一定して、俄かに多量を供給することは素より不可能である。然らば窒素肥料は何うか。吾々の最も必要とする肥料は之であると共に、後に残された唯一のものも又この肥料の運命である。

而し、吾人は決して落膽しなくともよい。化學思想の發達せる今日に於ては、この窒素を未來永劫に無盡なる空氣中より採出することが可能になつたからである。よし智利硝石は掘り盡され、硫酸アンモニアの製造は終熄を告げやうとも、この石灰窒素の供給は、永久に滅盡することはないのである。斯くの如く窒素肥料は吾人に必要であるのみならず、又肥料中最も未來ある肥料である。而して現在に於ては幾多の其需用も又最も廣汎で、線鐵、石油と相並んで、盛に需要せられる必須品である。

最近この窒素を直接人間の食料品として用ひられる研究さへも發表せられてゐる。若しもその研究の完成を俟つた曉には、其需用は實に無限なるものがあるであらう。かくて窒素の需要は日に増し其傾

域を擴大してゐる。

而も我國に於ては、近年に至る迄、この窒素の供給を外國に仰いでゐたのである。フランクと云へる獨逸の學者が、カーバイトと空氣との結合分解によつて、空中より石灰窒素を採取して肥料と爲すの一大發明を完成したのは、實に十九世紀の末葉であつたが、當時化學思想の至つて幼稚な我國にあつては、此の大發見に着目して之が製造に着手しやう等とは勿論唯一人の先覺者も見出さなかつたのである。而して之が輸入率は年々非常の増加を告げ、其額は年々五千萬乃至六千萬の多額を算したのである。けれども、一人の先覺者が生れた。この現象を早くより遺憾に思ひ、之が製造に早くより着目し、我國の國富を擁護して、之が輸入防遏を企圖した一人がある。之即ち吾が野口遵氏其人である。

野口遵氏は石川縣の人、明治六年七月二十六日、野口之布氏の長男として東京に呱呱の聲を擧げた。夙に氏は電氣學の前途に思ひを潜め、之が研究に没頭してゐたが、明治二十九年帝大を出ると共に當時恰も我國に於ては、アセチレン瓦斯の需用盛となり、米國より輸入せるカーバイトの價格一封度に付き、二十五錢乃至三十錢の高價を示せる有様なれば、早くも爰に着目したる氏はこの研究に没頭するに至つたのである。

而して氏はこの研究の結果により、身は仙臺の電氣會社にありながら、其餘れる水力を利用して、カーバイト事業を試みてゐたが、其成績極めて良好なるものあり、即ち福島縣郡山に同じくこの事業を計畫せるものの依頼を受け、之が設計を擔當し、更に越後長岡に分工場を設置して盛に之が製出に従事したるが、世運は益々之を要求すること切なるものあり。遂にこの三者を合併して日本カーバイト會社を創立するに至つた、而してこの會社を設立すると共に、氏は多年の宿望であつた、石灰窒素を製出しやうと具體的畫策を立てたるは其卓見、其敏捷、其企畫は寔に氏に非ずんば之をよくする處

ではない。

かくて氏は同窓の人たる藤山常一氏と共に、伊太利に渡り、當時石灰窒素發見に對して、世界の特權を把握してゐた某會社に親しく交渉の結果、日本に於けるこの特權を讓受けることとなり、歸朝後直ちに創立したのが彼の日本窒素株式會社である。これより先同氏は既に、鹿兒島縣各嶺山に電力を供給すべく、曾木電氣會社なるものを經營し、前記日本カーバイト會社の分工場をも、熊本縣水俣町に設けてゐたが、この事業を開始するに當り、これ等の凡てを一丸となし、爰に日本窒素株式會社なるものを設立したのである。時に明治三十九年一月、後ち事業の急速なる發達につれて、熊本縣鏡町に其分工場を設置し、其創立當時僅かに資本金四十萬圓の會社は、幾何も經たずして百萬圓となり尙進んで二百萬圓に倍加され、更に一躍四百萬圓に、而して現在にては其資本金一千萬圓を擁する大會社として、我國化學工業界の偉觀たるのみならず、世界各國に其名聲を馳せるに至つたのは、實に本邦工業界の誇と言ふべきである。加ふるに同社の今日の盛觀を極むる僅かに十一年の歲月に過ぎざりしを知らば、誰か其經營に當れる野口遵氏の天才的靈腕に驚愕せざるものあるであらうか。

かく氏の經歷を略記し、其非凡なる才腕を窺へば、吾人は爰に一個の威風堂々たる才氣潑瀾精力絶倫の偉丈夫を髣髴する事が出来る。而も吾人は、親しく氏に面接し、氏の口吻を耳する時其風姿一寒の書生を見るが如く、其溫良柔和恰も婦女子と語る如き印象に、吾人は更に一驚を喫せざるを得ないのである。然り氏は實に些の衒氣なく、些の粉飾なき、誠實且つ眞摯なる好個の君子人である。其事業を語るや熱心に又苟も誇飾なく、諄々と語り、坦々と陳べて聽者をして何等の倦怠を感せしめない而して一面眞面目なる學究的態度と、時に電光の如く閃く才氣とは、對者に限りなき親しみを與へ、言ひ知れぬ崇敬の念を感せしめる。實に氏の如きこそ人格、才腕兼備の好個の理想的事業家と言ふべきであらう。洵に氏の如き人を我國に有するとは、實に日本窒素の爲めのみならず廣く國家の爲め吾

人の深く欣幸とする所である。

惟ふに現在本邦に於ける事業の種類甚だ多く、會社の數も亦決して尠くないけれども、其の性質の國家的にして、而も新に展開される新時代の要求に適應するものを嚴査すれば、其數忽ちにして半減されるであらう、此時に當り、吾が野口遵氏の經營に係る日本窒素株式會社の如きは、前述の如く凡ての條件に適合せる理想的國家事業とも見るべく、其發達は同時に國富の基因を造り、新時代に適應する日本の可能性を、明瞭に語るものである。

然り、實に現代は化學工業の世界である。近き將來に於て開始される猛烈なる經濟戰に、最も飛躍すべきものは各國の化學工業である。從來に於ては、我國の化學工業なるものは實に幼稚なるものがあつた。而し戰時の影響によつて勃興した我國の化學工業は、舊套を脱して偉大なる發現を齎らした。由來我國の如く國土狹隘にして、耕土少なく到底農業國として存立し得ない國は、必然工業國として國運開發の道を講じなければならぬ、而も同じく工業國としても、其國情、其地理、或は其他種々の事情よりして最も適したるものは化學工業である。戰時中の影響で勃發したる我國の斯業が、果して健實なる發達であるか否かは別問題として、兎に角、吾人はこの意味に於て、化學工業の發達を祝福せねばならぬ、この時に當り其事業の基礎の鞏固、其發達の堅實なる日本窒素の如きを見ることは吾人の甚だ愉快に思ふ所である。日本窒素の使命や亦重大であると共に、それを代表してゐる野口遵氏の奮闘努力は吾人の刮目して見んとする所である。

磯野良吉君

日本に於ける黄金の府と云はれたる大阪は、北濱株式取引所の庭前に、英姿堂々として天の一角を

倪視し、當年の面影を偲ばしむる者は、問はずと知れた大阪實業界の快男子、磯野小右衛門氏の銅像である。

小右衛門氏は長州の生れで、黄金雨降る浪花津の地で松本重太郎、藤田傳三郎、田中市兵衛等と譽を並べて實業界に活動した人である。然し生れ乍らの商人ではない。青年の頃には藤田傳三郎氏等と維新の騒動に参加し奇兵隊の荒武者に伍し、血腥い砲烟彈雨の中を往來した事もある、それが商人に成つたのだから堪らない、元來膽の大なる鬻の如き人物であるから、一躍して天下の大相場師となり堂島や北濱に其盛名を謳はれ、大阪切つての名物男となつた。

我が磯野良吉氏は明治二年三月、此の小右衛門氏を父として大阪の一角に呱呱の聲を上げたのである。富豪磯野家の嗣子として、生れ乍らにして幸運に満ちてゐた。俚諺に曰く名門に二代なしとか、然り富豪の子弟に豚兒多きが如きも、氏に至つては然らず、幼少の頃より英氣煥發、一を聞いて十を覺るの才氣あり、確かに此父にして、此子ありと世人は云ひ囃した。

長するに及んで、所謂富豪子弟の行く可き道に進んだ。柳暗花明の巷に沈湎し、折花攀柳の樂しみに寧日も無かつた。然し元來聰明な氏は我れ過てりと悟るや、大悟徹底復び昔日の磯野氏に返つた。斯の如き行爲は常人の爲し能はざる所にして、氏の面目躍如として見るが如き感がある。

當時大阪には幾多の新進實業家があつた。又富豪の子弟にして、馬首を商戰の陣頭に進めんとする若武者も可なりあつた。曰く外山修造氏の息捨造氏、松本重太郎氏の養嗣子松藏氏、田中市兵衛氏の孫市之助氏の如きは其錚々たる者で、我れこそ斯界の先頭者なりと、互に勇んで功を争ふた。

此間に介在して氏は、勇戰奮闘、北濱株式取引所堂島米穀取引所等の理事の職に就いた、勿論其就任については、乃父の餘光與つて力ある事は吾人の言を俟つ迄もない事であるが、決してそれのみではない、由來理事の職たるや決して閑職ではない。實力なくして就任し得べき位置ではない。一般經

濟界の事情に通曉せざる可からざるは勿論、特に取引所に關する事項は事大小なく知悉して居らねばならぬ。而して變化最も甚だしき場所なれば、裁斷流るゝが如く此の滯滞をも許さぬ、故に爰に任に就く人は、頭腦明敏にして果斷の人たるを要するのである。

氏はどこ迄も早熟早成の人にして、又一面大器晩成の人たるを失はぬ、幼にして英明、長じても尙俊秀である。其日本含密、大阪製紙會社の社長となり、浪速紡績、井笠鐵道の重役となり、伊豆繩地金山、福井竹田銅山、日立諏訪銅山等を經營するに至つて其手腕は鮮かに現はれた。其經營振りの奔放の如くにして其實極めて着實に、其他自己經營事業の前途に關する見解の如きは、殆んど一としての的中しないものはない。

氏は名門の出たるに拘はらず、毫も安居遊逸を好まず、他迄も勇奮し、劃策努力至らざるなるは、將に實業家の模範とするに足る可く、流石に先考小右衛門氏の豪快なる血脈を繼承したるだけあつて、尋常富豪の家庭に生育したる若紳士連とは其選を異にするのである、一世の俠商たりし小右衛門氏將に其嗣ありと云はねばならぬ。

氏が實業家として確固たる地歩を斯界に占有しつゝある事は、吾人の贅言を要しない所であるが、其關係會社及諸事業は、頗る廣汎に涉り其數のみにても吾人の十指を屈するも足らざる可く、一々枚舉するの繁に堪えざるのである。

氏は資性高潔にして、稀れに見るの人格者である、生來宏量にして同情心深く、部下能く悅服すと云ふ、年齒將に五十一頗る春秋に富み、身心共に壯なり、願くは今後倦む事なく我邦實業界の爲めに力を致され、嚴父の遺志を全ふされん事を切望して已まぬ次第である。

林 平 造君

青丹よし奈良の都に程近き字智郡五條町の素封家、林平造君及び其の事業の概略を記述して、世の心ある人に紹介せん、その古より歴史の匂高き大和國の事業界に於て、その驍將と仰がれて誰知らぬ人なき君は、奈良縣の人、山田純精氏の弟にして慶應二年十二月二十二日呱呱の聲をあげ、長ずるに隨ひ秀才人を驚かすものあり、二十二年八月林文平氏の養子となり、二十五年十二月一家を成せり。

君は早稻田大學出身の英才にして、人となり温厚篤實、其の事業界に立つや、自己を利する一方に於て他人に利せしむる事を忘れず、自己を治むるに嚴にして他人に俟つ處寛なるの態度は常に衆人をして人格を稱へしむる所なり、實にや君は、人格高潔にして一面新人の風あり、部下の人に對して愛撫の心厚きは常に人の感激して畏敬する所。またその自由奔放なる手腕と、果斷決裁の才に長け、事に當るや快刀一閃亂麻を截つが如くして然も多く過たず。

また頭腦緻密にして業務に銳意努力する所、宛然先天的に經營の人たるを首肯さる。而して之等を綜合せんかまた以て君が精神の流露、人格の體現を想察するに餘りあらん。

君は祖先以來の業たる鑛山事業に従事し、現に大和吉野郡下市の大杉鑛山、金屋淵鑛山、播州の入角、金阪兩鑛山其の他各地に鑛脈豊富なる鑛區十數個所を所有し、然も毎に附近住民の利害を深く考慮し、夫の射利一方に偏して他を顧みざるが如き、一般鑛山業者の悖德的態度を學ばざるを以つし、氏の事業は到る處好感を以て迎へられ、斯くて着々成功發展しつゝあるは世の所謂形式的なる温情主義者輩に學ばし度き所なり。

今回氏の所有に係る和歌山縣海草郡の鑛區と、大阪某氏所有の鑛區と合併の契約なり、多分は備宜

山鐵山株式會社と命名創立を見るに至るべしと傳へらる、聞くが如くんば資本金二十五萬圓、鑛區の地質は概ね結晶岩片にして、彼の伊豫の別子と相似たるものにして、鑛床は東西約一里に亘り、其有望なるは今より期待するに充分なりと云ふ、而してその代表は實に我が林君なるべしと稱せらる。地方民の輿望を一身に荷ひし君の徳や窺ふべく、其重任に揮ふ君の辣腕や思ふべし、仍ち關係地方と圓滿を保つは勿論、地方人士の爲めに利益の増進を圖るを怠らず、彼の厭ふべき鑛毒問題など末前に解決されんは、君が當れる他の例に徴して明かなり。

君は尙此の他に二、三の鑛山を大規模の設備を以て經營するの計畫ありと傳へらる、惟ふに今は未だ夫を具體的に發表するの期に非すと雖も、聽て之れが實現と同時に他日改めて報告の機會あるべきを信するなり、君が現在關係參與せる會社事業に吉野銀行あり、大和電氣あり、直接經營に當れるものに大和索道、凍豆腐、大和酒造の三株式會社ありて何れも社長の任にありて、信賴仰望一身に聚るの感を深くせしむるものあり。即ち左に君が直接經營に係る三社の概略を記せんか。

大和索道株式會社は、明治四十四年の創立、資本金二十三萬圓、五條町より紀州伊都郡富貴村に至る、五哩十六鎖の架空索道を有し、一日の運搬力百六十噸、實に我國索道業の嚆矢たり。

凍豆腐株式會社は、明治二十九年の創立にして、資本金四萬圓、吉野郡野追川に於て精製せる凍豆腐七萬二千箱の半數を取扱ひつゝあり、其の盛大を思ふべし。

大和酒造株式會社は、明治二十九年の創立にして資本金十萬圓、中途一時悲境に陥りしも、君の社長たるに及びて銳意改善に努め、今日の盛況を見るに至り、前期に於て二割五分の配當を爲せり、また良好の成績と云はざるを得ず。

以上數千字記述したる所、未だ吾がペンの幼稚にして君を紹介するに足らざるものあるは遺憾とするも、其梗概を捕捉するあらんか又記者の幸甚とせん而已。

荒井泰治君

其半世を徹頭徹尾奮闘の二字を以て彩り、其果斷、其勇氣を以て世人を壓倒し、今や東北出身の實業界として聲名世に布く人に、我が荒井泰治氏がある。

氏は仙臺の人、文久元年を以て同地に生る、嘗ては中江兆民居士の門下に入りて才名を謳はれ、政論家として毎日新聞に筆を執り、其侃諤の筆に滿天下を醉しめたことがあつた、當時氏は富田鐵之助翁及び勝海舟翁に私淑せしと云へば、其風格も自からにして明らかなるものがある。

明治十五年十月日本銀行創立に際しては富田鐵之助氏を助けて同氏も同行の人となりたるが、其輔翼劃策至らざるなく、氏の奮闘と義氣とは漸く實業界にも知らるゝに至つた。後氏は朝吹英二氏の推選により轉じて鐘淵紡績會社の支配人となつたが、居る事五年、ブルス論の勃興するや四實業團體に推されて商品取引所を創立し、又富士紡績會社に聘せられて其創立の難關に處し、大いに其才腕を揮つたことがあつた。

明治二十年氏はサミュエル商會の懇請に應じて同商會に入り臺灣支店長となり同地に赴いたが、之れ氏が實業界に活躍する登龍門の第一歩にして、彼地に於て始めて兒玉總督の知遇を受け、又後藤新平男と結ぶに至つたのである。サミュエル商會に氏が入るの動機には一美談がある。それは同氏が未だ鐘紡にゐるの時、サミュエル商會より機械を購入するに當り、氏は歐米人の以て常習とするコンミツションを峻拒して、之と相當する金額を賣買價格より低減せしめ、以て私利を擲つて、社の爲めを圖つたことである。この清心はいたく同商會の賞讃する所となり、幾何もなくして氏に同商會の人とならんことを切に懇望する所あり、竟に氏も意を決して同會に入つたのである。

當時の臺灣は草創の際として百事殆ど緒に就かず、天惠頗る有利なるものあれども、之が開發に従ふもの實に寥寥たるものであつた。氏は奮然として在臺邦人の無氣力なるを慨嘆し、挺身以て事業の開發に従事したのである。時恰も兒玉總督が殖民政策として産業の奨励に意を注ぎたりし際して、氏は同氏の政策に従ひ、事業を畫策しその開發に努め、以て兒玉總督及び後藤男の寵を受けるに至つたのである。斯くて氏はサミュエル商會に籍を置くこと九年にして同商會を辭したが、明治四十年鹽水港製糖會社の増資するや、衆望集つて氏は其社長に推され、爾來同社の事業發展に盡瘁すること多年、更に別に六個の銀行會社の頭取及社長を兼ね、臺灣實業界の一偉材として其聲望隆々たるものがある。又近年氏自らの創設にかゝるものに東拓殖會社、打狗整地會社及び臺灣肥料會社等がある。又其後鹽水港製糖會社の拓殖會社と合併後、功成り名遂げて同社を辭し、新たに滿洲の新天地開拓を策し、大正五年南滿洲製糖株式會社を創設して其社長となり、今日に及んでゐる。氏は資性磊落不羈、曠世の膽あり、氣宇又宏濶にして統括の才に至つては實に驚異に價するものがある。而して氏は新知識を獲得せん爲めに再度歐米諸國を視察したることあり、其廣汎なる新知識と深甚なる經驗とは相俟つて氏の前途を彌が上に光彩陸離たらしめてゐる。亦氏は内地に於ては仙北輕便鐵道株式會社社長、仙臺商業會議所特別員を務め、又貴族院議員の榮職に列してゐる。

觀じ來れば氏は常に臺灣實業界の巨頭たるに止まらず、今や中央的に其勢望隆々として天下に稱へられつゝある。而して氏の潛勢力は到る處に分布され、氏の一舉一動は直ちに我事業界を風靡するの概がある。氏や前途尙春秋に富む、青葉城下の俊髦、藩祖獨眼龍の鴻圖を實現するも敢て遠からずであらう。

伊藤傳七君

我國紡績業者の權威者として斯界に其名を謳はれ、今や資本金九百六十萬圓の大會社たる三重紡績の社長として、一身の榮譽を其兩肩に荷ふ人に我が伊藤傳七氏がある、思へば伊藤氏の吾斯業界の爲めに盡せし功績は、如何なる言辭を以てするもそれを云ひ盡すことは出来ない。即ち現在の我斯業が斯くの如き般盛を告げて來たのも、畢竟するに氏のこの献身的努力に俟つ所大なるものがあつた。されば明治四十年宮内省より藍綬褒章を下賜され、以て其功を表彰されしは全く氏が努力の當然の應報と云ふべく、又其名譽や赫々として永く氏の偉大なる人物を物語つてゐる。

氏は三重縣三重郡四郷村の人、嘉永五年六月同地の名望家伊藤家の第十世に生れ、幼名を傳一郎と云つた。幼時は家にありて主に算術筆書等を修めたが、弱冠にして先代傳七氏の意を受けて綿糸紡績等の調査に従事し、東奔西走曾ては自ら堺勸農局の紡績所に一職工とまでなつたことがあつた。而して一意調査に従事し種々の研鑽を積んだ結果、水力を以て紡績所を建設するの緊急なるを會得し、之を先づ父君に圖り、親族故舊等四五人の有志を糾合して明治十五年九月、三重縣川島村に面積千四百餘坪、外に四百坪の附屬舎屋の大建築を起し、綿糸紡績業を開始することになつた。即ちこれぞ後年に於ける三重紡績株式會社の前身で、又吾國斯業が外糸の輸入防止に奮起した先驅であつた。

明治十六年五月先代逝去せるにより、氏はその遺志を繼いで専ら綿糸紡績業に一身を委ねる事となつたが、新たに二千鍾の紡績業を起し拮据勉勵其經營に當つた結果、十九年に至り更に其規模を擴大するの機運に達し、當時三重縣知事たりし石井邦猷氏及澁澤男爵に謀り、其援助を得て資本金二十萬圓の株式會社となし、四日市に工場を設け紡績一萬四百四十鍾を据付くるに至つた。斯くて同氏の

企畫はトン／＼拍子に功を收め著しい実績を印して進んで行つた。

次で明治二十二年には第二工場を設置し、同二十六年には名古屋に、三十年には津市に各分工場を増設した。猶明治三十四年には伊勢紡績會社を買収し、三十八年には名古屋なる關西紡績會社と合併成り、三十九年には津島紡績會社を買収し、四十年には桑名、知多の兩紡績會社をも合併するに至つた。斯くて同社は破竹の勢を以て更に幾多の分工場を増設して策戦悉く功を奏し、今や遂に資本金九百六十萬圓、鍾數實に二十五萬餘數の龐大なる大會社となつた。之れ蓋し氏が献身的努力に依るは勿論で、氏が此間に於ける活動振りに至つては全く快刀一振無人の境を行くが如き觀があつた。

尙氏は同社の外趾邸鐵器株式會社の取締役社長、及び四日市商業會議所副會長其他幾多の諸會社の重役をも兼務して令名高く、又銘酒八島釀造元として氏の家業は令弟傳平氏によつて經營せられてゐるが、氏も又これを援助して其醇良無比を期せるの結果、聲價彌が上にも高く現に畏くも皇族御用命を仰付らるゝの光榮に浴してゐる。斯くて氏が前途は益々光耀赫々として多幸に滿されてゐる、氏の現に貴族院議員たるは錦上更に花を飾るの趣ありて氏の人物個性をより有力に表明してゐる。

伊丹彌太郎君

西に近く長崎、東に福岡門司を控へた佐賀市は、明治維新當時より政治方面の大渦卷の一中心であつた如く、現在に於てまた當に北九州の財界を指導すべき一方の要位にあること勿論である。其對外貿易に於て長崎に一籌を輸し、其の製造工業に於て福岡に一部分の勢力を奪はると雖も、一般商工業に於て其の大勢は明に我が佐賀市の支配する所とならざるなきやを想見せしむるものなり、現に近時の目覺ましき企業界の活動は眞に驚嘆すべきものあり、我財界の識者深く思を致すものは夙にこの地の

將來に就き多大の矚目を放ちつゝあるは、何人ぞ雖も否定し難きところであらう。

併し凡そ一地方が特に際立ちてある大渦卷の中心となり活動の源泉地となるは、一は所謂天の時あり二に地の利あらんも、其のある勢力となりて外部に表はるゝに至るは、こゝに偉大なる奮闘の士の蹶起を俟ちて初めて得らるべき結果ではないか。

我が佐賀市が近時北九州一帯に於ける財界の中心地たり波瀾の原動地たらんとしつゝあるは、其の裏面に於て何人か異常なる巨腕を弄しつゝあることを想像するに難くあるまい。伊丹彌太郎氏は即ち實に佐賀市に於けるこの渦卷の中心に動きつゝある一大勢力である。

吾人は今氏が同地の財界否大九州の財界に如何に重きをなしつゝあるかを紹介する前に、先づ氏の生立より始むるを最も適當なりと思惟するものである。

氏の家は古くより久留米の大藪と共に同地方の二大富豪として並び稱せらるゝ程の大家であつて、士族伊丹文右衛門を父とし、慶應二年十二月十五日其の長子として生れたのである。

明治二十六年三月父君の逝去と共に其の家督を相續し、身三十に達せざる一青年にして既に八方實業界の怒濤狂瀾と戦ひ、天稟の英質と卓抜なる識見、非凡の靈腕はよくあらゆる盤根錯節に處して機を誤らず、其の駿足は傳來の地位と相俟つて早くも佐賀一帯の財界の認むるところとなり、衆望忽ちにして氏の上に集つた。時の先輩古老連をして其の識腕實に端倪すべからずと驚嘆せしめたのを見ても大方は推知することが出来るだらう。

斯くて氏の力量は其の頭に霜を見、風丰漸く圓滿を加ふるに及んで益々其の本領を縦横無碍に發揮し戦へば勝ち、攻むれば取る底の精進を以て飛躍亦飛躍、半睡の財界を切り廻つて忽ち其一大重鎮となつて終つた。隠れたる孔明を迎ふるに三顧を以てす、況んや現はれたる財界の覇者をや、事業は求めずまた招かずして八方より降り灑がれ、九州電氣製銅株式會社の創立さるゝや擧げられて其の取締役と

なり、次で久留米電燈株式會社成るやまた推されて其の取締役となる。斯くて氏が行くとして可ならざるなき才能は株式會社松尾工場を創めて之が監査役となり、當時の萎微せる金融界の爲め榮銀行を設立して自らその頭取となり、以つて斯界の空氣を一新し、續いて佐賀縣農工銀行取締役、九州電化工業株式會社取締役、九州電燈株式會社取締役等に其の巨腕を振ひつゝあるや、農學博士恒藤規隆氏は氏の逸材に悦服し、即ち同博士が計劃せるウサ島燐礦株式會社の創立に際し氏を迎へて其の協力を乞ふた。現に其の取締役たるは實に我が伊丹氏の功績を證するものである。其他氏が現に關係せる諸事業枚擧に遑あらざるも、築紫電氣軌道株式會社、帝國水産株式會社、唐津築港株式會社等は實に其の重なるものであつて、氏は何れも之が取締役に推されてゐる。

氏齡既に五十四、血色よき童顔と頑丈なる體軀とは猶活力の勃然として内部に躍動しつゝあるを思はしむる、其の温健なる容貌は直ちに氏の爲人である、事業愈々發展して衆望益々集る所以のもの、晉に其の俊敏なる材能によるのみではあるまい。

再び云ふ佐賀の地は製造工業に於て、金融に於て將來北九州に冠たる素質を有してゐる。然りそは將來である、尠くとも現在に於て決して萬全なりとして晏如たるを許さぬ状況にある。不備なる財界の施設を見よ、眼光常に内部にのみ限られ勝ちの因循なる實業家連を見よ、交通施設を見よ、煙突の數を見よ、未だ改善發展せしむべきもの一にして足らずである。然して此の運動は勿論一般佐賀人の戮力に俟たねばならぬが、その運動の指揮者鞭撻者たる者の一人は尠くとも當然氏であらねばならぬ、吾人は九州の實業界が向後急速に開展されんことを信じ且つそれを祈ると同時に、滿腔の期待を我が伊丹彌太郎氏其人に向くるものである。

林 千 八 君

肥後米によつて象徴されてゐる熊本縣は、云ふ迄もなく豊饒なる農業國である、玉名郡、鹿本郡、菊地郡、飽託郡及び八代郡の一部に亘つて、渺茫として盡さざる所謂肥後平野なるものを眺めたるものは、誰しも同縣が如何に農業地として天與の美質を備へてゐるかを痛感せずにはゐられないであらう。然り、熊本縣は實に土地豊饒にして、しかも氣候至つて温和なる農業國としては本邦に於ても稀に見る好適地である。されば同縣より産出する肥後米は其品質優良の點に於て本邦唯一を以つて稱せられてゐる。

然れども、時運の大勢は譬て云へば流水のやうなものである。如何に堅固なる堤防ありと雖も、之が氾濫を防止することは不可能である。即ち文化が漸次進轉して行くにつれて、凡ゆる國が、凡ゆる都市が、徐々と農業國より工業國へと推移して行くことは否むことは出来ない、茲に於て熊本縣も又時々刻々この氣運に襲はれた、而してこの氣運をよく善導し、よく之に乗托して以て將來の畫策怠りなかつた同縣は、恰も春風に帆を上げたる船の如く、漸を逐ふて發展伸張して行つた。恰も九州に於ける福岡縣のその如く、しかし福岡縣と熊本縣とを其の工業國たる可き素質に於て比較すれば、其處には雲泥の差異があることは何人も否めまい、即ち福岡縣の交通が海陸共に至便なるに比し熊本縣の四面殆んど山を以て圍繞されたる、又博多港の良港たるに比して、八代灣、三角港の貧弱狭少なる、而して工業の隆運を齎す最も重大なる其背域に至つては、既に比較を絶してゐるではないか。茲に於て考ゆれば熊本縣の現在の沈滯は、蓋し理の當然なるものかも知れない、然れども猶爰に一考の餘地が餘されてゐる。然らば工業の發展伸張にはこれ等の天惠的要素のみが爾く絶對的に權威あるもので

あるか、換言すれば何等人爲的な力、工業を促進せしめる爲の凡ゆる奮闘努力勇猛邁進、これらのものは一顧の價だにないであらうか。吾人はさうは思はない。思はない處か否なそれこそは最も重要な最大要件であることを高唱したい。天恵の豊富はこの活動を力あらしめ、助成するに役立つ迄である、こゝに問題が起つて来る。然らば熊本縣はそれらの活動を爲すべき勇氣と力と果斷に缺如してゐるか、と。吾人をして短刀直入に云はしむれば、然り、と答へずにはゐられないであらう。當然起る可くして起らざる、伸ぶべくして伸ばざる事業一切はこの爲めではないか。十分の天恵が六分迄しか利用されず、而も得々として之に甘する如き態度を支持するはこの爲めではないか。熊本が現在に於ても漸く九州の都市の内、いくらかでも勢力を持続してゐるのは、要するにそれは舊幕時代の大藩の惰力にあらずにして何ぞ。同縣が現在獲得してゐる力は、積極的に築き上げた勢力でなく、消極的に保存した勢力である。而して折角創設した事業も、其保守的退嬰的な經營法により遂にその經營を他縣人に讓渡し、以て其利益を壟斷されつゝある現狀ではないか。製紙事業、紡績事業、交通機關事業、窒素肥料事業、セメント事業其他一切の事業悉く然らざるはない、如斯く退嬰的人物の多き同縣人の中に、吾が林千八氏の如き卓越したる人物を有することは、吾人の奇異とする處である。

林千八氏は安政六年三月を以つて熊本縣上益城郡御船町に生れた。父祖世々公共の事業及び教育等に盡瘁して、夙に郷黨の推重を受けた名門である。氏は幼少にして東京に出て、岡松養谷氏に師事して漢學を學び、長するに及んで法學院專修學院を卒業し、直ちに官府の人となつた。而して埼玉縣、大藏省、愛媛縣、熊本縣等に歴任して令聞あり、明治二十八年には熊本縣宇土郡の郡長に任せられ七位に叙せられた。當時同郡の教育委微として甚だ振はざるものあり、氏は親しく巡廻して之を視察し、教育の甚だ必要な所以を諄々として説く所ありたれば後其成績見るべきものがあつた。氏は又特に理財の技倆に長じ、明治二十八年日本赤十字社熊本支部會計事務の整理に盡力する所あり、其功

によつて特別社員に擧げられた。後感する所あり官海を辭して實業界に轉じたが、恰も當時株式會社第五十一銀行の解散に際し、先づ之が清算人として整理の卓越せる手腕を認められ、氏の名聲頓に實業界に擧り、明治三十一年には懸望されるまゝに肥後農工銀行の支配人となり、引續き同行にあつて縦横の手腕を揮ひ、現在に於ては専務取締役を勤めて其の名聲斯界を風靡してゐる、明治三十四年は、かの怖る可き熊本縣下經濟界の大恐慌時代であつた、さればこの惡雲に襲はれたる諸會社諸銀行は將基倒しの災厄に遭遇し、事態實に容易ならざるものがあつた。氏は之を觀るや挺身以て其の善後策に専心し大に貢献する所あり、破綻の悲運を打破して、以前と同じき營業及事業を續くるを得たる會社銀行は決して一二に止まらなかつた、されば爾來、破綻倒産に傾きたる諸事業は競つて氏の門を敲き、殆んど整理引受所の威を呈した、氏は又事業に意を用ゆる事多く、前記の外、東肥鐵道株式會社取締役、日韓殖産株式會社、九州製紙株式會社、肥後石鹼株式會社等の各監査役を兼任し、又熊本商業會議所の會長として偉大なる貢献を重ねつゝある。

由來官海から實業界に轉じ成功したる人々は至つて多い、東京の澁澤男、大阪の小山健三氏等の如き其最も好典範である。然し官海の人とし云へば、融通の利かない頑迷な従つて實業家としては至つて不向な人といふ因襲的觀念が未だ社會一般人の頭腦を支配してゐる、蓋しそれは或一面の眞理であらう。しかし時には又之に例外も存する。前記二人の大偉材を見ても明らかである、而して吾が林千八氏も熊本縣に於ける殆んど唯一人の例外的偉才である、熊本縣の經濟界の發展が氏の力を與つて必要としたことは既知の事實である、今後と雖も又大いに必要とするのであらう。而して氏はこの熊本縣にあつて、天性の世話好きと、非を見て助力せずにはゐられない義侠的精神によつて好んで波瀾の中に投じ、難關に處して聊かも倦むことなく、快刀亂麻の如き手腕を揮つて其完成を期せずには止まない。かゝる氏なれば單にそれが經濟界及私的事業界のみならず、公共的博愛的事業にも大いに盡瘁す

る處が深い、されば罹災救恤等の斡旋に依り、公賞を受けたることも一度や二度ではない。ともすれば我利々々亡者の多い本邦實業界に、氏の如き高潔なる人物を有することは、獨り熊本縣のみの誇ではない。

今や大戦一度終熄して列國は競つて經濟戰に勝者とならんことを期して大に活躍しつゝある、而して今後の趨勢は、又彌が上に世界の工業的進運をして、更に更にそれを強要すべき大勢に向ふであらう、この時に際し、熊本縣もいつ迄も惰眠を貪つてゐる時ではない、氏の如き實業家先覺者の使命は至つて重大である。

貝島太市君

現代は鐵と石炭の時代である、然るに我國に於ける鐵の生産の極めて貧弱なるは吾人の甚だ遺憾とする處であるが、然し石炭は決して豊富迄は行かぬも、多少の産出高を見るのは、吾人の幸福と言ふべきである、而も其大部は九州より産出するのであるが、常に其覇を把握してゐるのは同じく九州の中でも福岡縣である。

而して同縣の炭素地の中で、最も重要な地方は田川、嘉穂、鞍手、遠賀の四郡である、就中、三井家の三池、田川の兩坑、貝島家の大ノ浦坑、製鐵所所屬の二瀬坑、明治鑛業の明治、豊國の各坑等最も世に知られてゐる。

同縣に於ける石炭發見の時代は詳かならずと雖も、口碑の傳ふる所に依ると、寶曆の頃遠賀川、洞の海——今の堀川——開鑿の際、吉田村の切抜工事中黒色の石塊を發見し燃料に適するを知り、村民隨意に採掘して、自家の燃料に用ゆるに始まると云つてゐる。而し多少大仕掛けの規模をもつて之が

採掘に従事したのは、明治八年片山逸太氏が蒸氣汽關の使用を企て、排水機及捲揚機を購入し自己所有の糸目炭坑に据付けて掘出したのを嚆矢とする。

されば今でこそ一ヶ年採炭量約一千四百噸、價格約四千八九百萬圓の産出高を見てゐるが、其發達は至つて近年に屬し、従つて所謂同地の炭山富豪なるものも、一大富限の形態を爲してゐるのは怪しむに足らない。殊に最も資本の薄弱を以て、眞に自己の血と汗とで築き上げた安川氏と貝島氏は、其中で最も一代富豪の富豪たる人々で、而も兩家が今其勢ひ實に殷盛を極め、炭山成功者中各々異彩を放つてゐるのは面白いコントラストと見るべきである。

殊に安川氏は士族の出にして其後援者としては幾人かの有力家を有するは否まれぬが、貝島氏に至つては、眞に裸一貫、揮一つで晝の間は一家族全體眞黒になつて石炭を掘り、夕方からは同じく一家全體で、之を遙々若松迄運んで今日の盛運を得たといふ、實に美談に相應しい思出深い過去をもつてゐる。蓋し今日の富こそ、一家和協して家運の隆起に努めた、血と汗との貴重なる結晶である。

貝島家が率先して採炭を開始したのは、現在貝島鑛業株式會社長、福岡縣多額納稅者貝島太助翁である。翁は福岡縣の人、貝島永四郎氏の長男にして弘化元年正月十一日を以て生れた。幼時家計困難にして父を扶けて石炭運搬の業に従ひ稍長じて緇門に入りしも、後感する所あり、明治元年始めて採炭業を營むに至つた。時に年齒僅かに二十一歳、未だ弱年にして經營意の如くならざりしも、刻苦勉勵すること實に二十有餘年、漸くにして多少の鑛業的知識を會得し、又、侯爵井上馨氏の知遇を受けて事業漸く其緒に就きし觀があつた。當時恰も日清戰爭勃發して炭價頗る暴騰したる爲め、氏は一擧にして巨利を博し、爾來着々と事業は伸展し現在では同地有數の成功家として、其莫大な富と共に雄名噴々たるものがある。

翁の長男に榮三郎といふ人があつた。世人は稍もすれば遊蕩の中に家財を蕩盡した暴君といふ、有

難くもない言葉のもとに葬り去らんとしてゐるが、此の人は實は中々の傑物で、遊蕩の中に耽溺する半面には、凡夫凡人には逆も出来ない鮮かな手腕と才氣とが、其明敏な頭腦から迸出してゐた、流石に聰明な太助翁が、其耽溺荒廢の狀を睹るに拘はらず、依然として貝島鑛業の支配人を彼れに委ねて居た一事を見ても、其人物たることが明瞭に理解される。斯くて具眼者は、氏の前途に就き充分なる矚目と希望を抱いてゐたのであつた。が、惜しい事には氏は中途にして夭折して仕舞つた、若し此人に天壽を借さしめば今頃は押すも押されもせぬ斯界の大立物たる事は勿論であるが、實に惜しむべき事であつた。

次男榮四郎氏は、又全然長兄と色彩を異にする人物である、寡言沈着、萬事慎重なる態度を保持して容易に熱せず、柳暗花明に鞭を揚ぐるの風流も自ら淺い、拵て其奔放不羈な榮三郎氏と、溫良莊重な榮四郎氏の、性格と其長所とを具備して生れたものが、之れ即ち吾が貝島太市氏である。

氏は一橋の高商を出ただけあつて、最近の新しい思潮にも觸れ、又殊に經濟學には其造詣が深い、そして趣味は至つて廣く、現代の問題である社會問題就中勞働問題等にも意を用ゆる事甚大である。而して今や同氏は同地の實業界の中でも、最も思慮ある最も時代に適應した新進氣鋭の人として異彩を放つてゐる。

先般の炭價問題等については、かの麻生太吉氏と共に盡瘁大いに努むる處があり、未だ三十有餘歳の若手なるに拘はらず、炭界の恩人として普く一般の崇敬を受けた程である。氏はこの問題について或人に語つて云つた。『吾人が採炭を制限しやうとするのは決して私利私慾に出たることではない。由來石炭需用の諸會社は、多くは價格の標準を最低限に置くもので、採炭多量に過ぎて炭價暴落に暴落を告げる時は、諸社の標準次第に低下して、一朝或る事の爲めに之が暴騰を見る際には、爲めに破産の餘儀なきに至る諸會社を見るであらう。かゝる結果は吾國産業の安定の大勢から見るときは、甚

だ憂慮すべき現象で、是等の會社の安定を確保するには何うしても、採掘額に或る制限を設けて之が標準價格を一定せしむるにある、戦前獨逸に於ては既に國家がこの事に關與して、シンデケートなるものを設立して、常に一般の標準價格の平衡を保つてゐた。而し我國には未だ夫等の設備がない、身苟くも社會の事業と密接なる採炭業に従事する以上、單に一身一家の榮達のみを以て念とすべきに非ず、宜しく思ひを國家の前途に注ぎ事業の健實なる發達を企圖すべきである。吾人の採炭制限を主張するや偶々爰に出でたるものに外ならない』と、以て氏が如何に其眼察大なるかを推知すべきである。而して氏の國家的事業觀念を證するものは、實にこの一主張許りではない。凡ての言行が之と遺憾なく一致してゐる、就中その最も代表的なる一挿話を記せば、氏は嘗つて北海炭山の視察に出掛けたことがあつた、處が氏は未だ自分の事業を視察する前に先ち鐵道院の缺陷的施設に眼を觸れ、遂に自家の事業視察を抛つて詳細に此の缺陷を調査し、歸來鐵道院の深い反省を促したといふ事もある。

氏は資性至つて溫厚篤實、人に接しては苟しくも謙讓の徳を失はないが、而も其一見溫篤の中に渾身燃ゆるが如き霸氣を失はず、自ら對者をして敬服せしむるものがある、而して今や氏は、貝島鑛業株式會社の常務取締役を管掌し、其縦横なる手腕と卓越せる識見とを以つて、彼の隆々たる社運を彌が上に隆盛たらしめてゐる。

惟ふに大戰一度終熄して、列強は競ふて東洋の天地に激甚なる經濟戰を試み、以て既往五ヶ年に亘る創痍の恢復に努めんとしてゐる、此の時に當り我帝國も亦此の間に介在して未曾有の大活躍を爲す可く準備に怠らないのである、其の大活躍の殆んど原動力を把握してゐる採炭事業に、従事する各會社の大使命や亦重大なるかなである。かゝる時に際し、貝島氏の如く世界各國の事情に通じ、又國家觀念に富みし、才幹識見共に優越したる人を斯業界に有することは吾人の深く欣幸とする處である、氏よ、自重加餐して以つて吾人の期待に辜負する勿れ。

田中德次郎君

工業對動力の關係は寔に密接なるものにして、其の如何に他の條件に優越すと雖も、此の動力の供給が不充分なるに於ては到底其地の工業は克く圓滿なる發展を遂げ得ることは不可能である、茲に於て或人は言ふ、福岡縣に於ける工業の發達は石炭の賜である、この意味に於て吾人も亦其の見解には等しく同意を表するものである。然りと雖も、又こゝに一つの新たな問題の提供を見る、若し福岡縣にして石炭が現在の如くに採掘無からんか、其工業的勢力や果して如何、然り縱令其他の事情が如何に有利なりしと雖も今日の如き工業の隆盛を見ざりしや勿論である、即ち前述の如き工業發展の原則に従ひ、吾人と雖も同地に於て石炭の多量なる採掘が、同地の工業を如何に殷賑ならしめたかといふことは是認せずにはゐられない事實である、然り然らば石炭の豊富といふことは、或土地に於ける工業發展の唯一の原因かと或人から問はれたとすれば、吾人は言下に否といふことを敢て躊躇するものではない。

これを實例によつて見んか、若し石炭の豊富だけに依りて、工業の發達が可能なるものなりとせば九州七縣の内、福岡に次ぐ工業地は佐賀にして次いで長崎熊本の順序に推すべきである、實際の事實は決してそれを裏書きせず、既に世人周知の如く第三位に屬すべき長崎が其第二位にあり、熊本が第三位で、大分が第四位、佐賀は漸く第五位を保ち得るに過ぎぬ、之れ等の點を考察せんか、蓋し福岡縣の工業の發達は、勿論石炭の豊富にも依ると雖も、唯だ此の事實が福岡縣の今日を齎した最大理由とすることは不合理と言ふべきである。思ふに同縣をして今日たらしめたる理由としては、猶幾多

の重要な諸要素があるべく、殊に今日に於ては動力を石炭のみに俟つ如く思惟するは、尙當らざる事遠しと言はねばならぬ、如何とならば動力は必ずしも今日石炭のみに限られてゐる譯ではない、所謂自炭として唱へられる、水力の利用によつても優に之を爲し得るの事實を知るであらう。現に大日本窒素肥料株式會社の如きは、この水力電氣を以て鹿児島並熊本に於て盛に操業しつゝあるのである而して今やこの電氣動力なるものは、九州工業の全部に渡つて利用され、又益々此利用範圍を擴大せんとしつゝある、この時に當り九州電氣界の先驅として、福岡縣博多を不動の根據地とし、今や其羽翼を縦横に擴げやうとする大會社に、九州電燈鐵道株式會社がある。而して同社をして今日の盛運を齎せしめたるものは、熱誠その經營に盡瘁し曾て倦むことを知らざりし同社重役諸氏の功績に俟つ所多い。就中、三常務取締役の一人として、着實機敏なる手腕を發揮し居れる田中德次郎氏の力や、又多大なりと言ふべきである。

氏は愛知縣の人、田中嘉七氏の二男にして、明治九年五月十五日を以て生れ、夙に上京して慶應義塾に學び、所謂三田出の俊秀として聞へ高き人である。同校を卒業するや直ちに當時秀才の定相場であつた中上川系統の三井に聘せられ、銀行部に奉職して財政、經濟の實務を掌り、同行に居ること多年にして克く金融界の實際を會得したが、氏の才器は決して一銀行員に止まることをゆるさず、辭して電氣事業界に身を投じ、茲に氏が天稟の眞價を發揮する場所を見出したのである、斯くて氏は當時恰も九州電氣會社の大合同の計畫あるに際し、氏も之に參與して大いに盡瘁する處あり、其結果、九州電燈鐵道株式會社の設立さるるや、氏は推舉されて同社の常務取締役の一人となつた。

氏は資性恪勤温厚の士、而も其風采は頗る堂々として、寛厚の威儀見る人をして當代稀に見る好紳士たるを思はしむ、殊に人に接するや謙讓にして、苟しくも傲慢の風なく、爛漫たる春氣流露して、對者をよく欣慕措く能はざらしむる處がある。氏敢て酒色に親しまず只管自己の業務に専心して以て

世人の期待に努めつゝある、同社が逐日異数の盛運に向ひ居れるも又宜なるかな。惟ふに、大戦一度終熄して今や將に恒久的なる經濟戦が開始されつゝある。この時に當り、我國に於ても殊に福岡縣の使命は重大なるものがある、逐年世界化さんとする福岡、我國の大規模なる且つ必須なる諸工業を網羅したる如き觀ある福岡に於て、わけても其中の最も有望なる會社たる九州電鐵の常務取締役田中氏の如き、亦其責任の更に更に重大なるものがある、氏よ、自重して、奉國の爲めに盡瘁せられんことを。

松本健次郎君

近時の趨勢がそれを雄辯に語つてゐる通り、日本は將來商工國たる可き運命にあることは勿論である、就中九州は地勢上其中心たる可き運命と其能力とを有してゐることは識者の共に認むる所であるが、この中心的商工地を代表して内外に飛躍せんとする港灣としての長崎は、已に狹隘を感じてゐるのみならず且つ餘りに偏したる地理にあるので、到底將來に於ける完全なる良港たる可き資格はない、然らば門司港はどうかといふと、同じく狹隘で而も激烈な惡潮流を有する同港は又更に其資格に乏しい、茲に福岡港が體て其地位を襲ふ可きは、既に識者間の定論である。

諷つて考ふるに、日本の商工地の中心たる可き九州の、其の又中心たるべき素質を有するは、勿論福岡縣である、さればこの意味に於て福岡縣は、將來の國是を荷負つて立つべき地で、殊に近く開始される世界經濟戦の舞臺が、東洋殊に支那を中心だとすれば、其感は更らに適切なるものがあるのである。そして將來は前述せし如き港灣推移の理由により、更に更にそれが適確になつて來ることは、又世人の等しく是認する所である。かくして福岡縣の運命は日本的に且つ世界的に華々しく展開されるのである。

るのである。

この重大なる運命を有する福岡縣にあつて同縣の輿論を左右し、事業の發達を誘導するの地位にある人は安川敬一郎氏である、實に吾人は福岡縣を思ふ時、必然に腦裡に浮ぶものは安川氏の名である。安川氏の勢力と地位と名望と富とは寔に福岡縣に取つて偉大なる或力を有するものである、現代は何といつても資本主義の世の中である、氏が一度或る理由の爲めに氏の關與する凡ゆる事業から手を引いて仕舞つたら、立所に破産する同地の會社銀行は二三にして決して止まらないであらう、かゝる潛勢力を有する安川敬一郎氏の長男として生れ、姓名こそ安川氏の舊名を繼いで松本と名乗つてゐるが、其實權の凡てを繼承してゐる人に我が松本健次郎氏がある。こゝ迄述べて來たら吾松本健次郎氏が、如何に福岡縣の爲めに其中堅を構成する人物であるか、今や開始されつゝある世界經濟戦の上に如何なる重要な使命を有する人であるかは想像することが出来るであらう、大福岡の發展、大福岡の建設は實に氏の兩肩にかゝつてゐると云つても敢て過言ではあるまい。

松本健次郎氏は、明治三年十月四日を以て福岡縣若松に生れ、今年丁度五十歳の男盛りである、明治廿四年三月先代潛氏の養子となり、同廿六年十月家督を相續したが、氏は父敬一郎氏の血を享けて覇氣滿々、才氣横溢して其識見、其手腕は同地實業界の異彩である、而も頗る平民的にして洒々落落たる態度は、恰も父敬一郎氏を髣髴せしむるものあり、對者をして一見氏が社交家として遺憾なき素質を有せるを肯かしむるものがある。

氏が現在關係してゐる主なる事業は、明治紡績合資會社代表社員、明治鑛業株式會社副社長、株式會社若松貯蓄銀行取締役、若松築港株式會社取締役等にして、其周到明敏行く所可ならざるなき手腕は八面縦横に發揮されて、更に大福岡の工業的光彩を添加せしめてゐる、斯くの如き基礎と、斯くの如き實力を有する氏が未來の活躍は、蓋し矚目して餘りあるものがあるであらう。

松本 泰藏君

九州の北部地方一帯に於ける、工業の殷盛を極めつつある現況は、一度此間を横ざりし人は何人とも一驚を喫せざる者はあらざるべし、其の盛んなる事我國に於いても第一と稱されつつある大阪附近に比して敢て遜色なしと云ふも過言にはあらざるなり、否な實質に於いては彼れ此れを凌駕せりと稱されつつあるにあらざるや、之れ一に天の時と地の利とを併有せし賜物にあらざるして何んぞや、地底に天然無限の石炭を藏し、海岸線の延長は天下に比なく、港灣の設備又完全にして舟楫の通せざる無く、陸路を貫通するに汽車、電車あり、交通の四通八達せる稀れに見る所なり、工業の發達を助成するものは、第一石炭にして第二を交通の利便なりとす、如何に巨多の原料ありとするも石炭無くんば原動力を如何にせん、又如何に多額の製品を産出すればとて、之れを運搬す可き交通の利便なくんば如何にせん、之れ工業と交通の密接なる關係を有する因由なりとす。

北九州の地工業の旺盛なると共に、又交通の利便他に比なし、則ち鐵路は院線九鐵幹線の筑豊の平野を縫ふて、遠く末端鹿兒島に走るあり、尙其他に電車あり、之れ實に九州電氣軌道株式會社の事業にして之れを主裁する人を松本泰藏君と爲す、九州電氣軌道會社は本社を小倉市に置き資本金六百萬圓を投下し、大會社なり、而して其線路は洞海岸より、遠く筑豊の平野を交錯す、依つて地方一帯の利便を蒙る事多大なり。

氏は大阪府の人井上保次郎氏の弟にして、明治三年の春まだ淺き二月の初め呱呱の聲を、其生地に上げたる也、長じて二十歲當時關西の財界を把握せし松本重太郎氏に養はれて其嗣子と爲る。之れ實に氏が今日の地位を獲得する事を得し遠因なりとす、吾人は氏を品臨する前に、先づ乃父重太郎翁を

想起せずんばあらざる也、翁は實に近年財界に於ける巨人なりき、其丹後の一寒村より起りて關西の財界を主裁せし、或る意味に於ける偉人と云ふも不可なし、然れども一朝其牙城たる百三十銀行の破綻するや、盛衰掌を返すより速に、將に孤城落日の觀ありき、之れ松本家にとりては不幸の極みなりしかど、彼れ松藏氏に取りては將に天の下せる試金石とも稱す可く將た人生の一大試鍊に遭遇したる也、吾人をして忌憚なく氏を評せしむれば、氏も父重太郎翁在世中は實に世間知らずの富豪の子弟に過ぎざりき、彼等の通癖たる、折花攀柳、遊蕩耽溺の生活に沈湎せし事も少なからざりき、然れども怖る可きはタイムの流れなり、一度乃父の失敗に會ふや、又昔日の觀なく、身を持する事謹嚴に遂に今日の如き人格の士となりぬ。

卒然として父の遠逝に遭遇せしは、氏が三十歳を越ゆる幾何の齡にもあらざりき、孔子の所謂而立の歳にして人生の花なりき、此の轉變に會ひてより氏は心機將に一轉し、一は先考の遺業を嗣ぎ一は以て乃父の聲望を辱しめざる可く、奮然として事業界に進進し、自から斯界の覇者たらん事を期せり則ち我國紡績界の巨頭たる、武藤山治の知遇を得て、鐘ヶ淵紡績會社の財務を執掌するや、爛眼なる氏は外資輸入の有利なるを觀破し、之れを献策し、自ら此の任に當れり、依つて直に佛國に渡航し畫策大いに勉め遂に外債募集に成功する事を得たり、當時白面なる一青年の事業として將に特筆大書に値ひす可く、其手腕の非凡なる之れに依りても知る事を得べし。

氏は歐洲より歸來するや直に鐘紡を辭し、松方幸次郎氏を社長とせる九州電氣軌道株式會社に入り支配人の位置に就けり、當時九州の電氣事業は草創の際とて、經營困難を極めしが氏の畫策宜しきを得て、遂に今日の盛大をきたせし也。

氏は軀幹長大、風丰堂々たる偉丈夫也、其風姿態度は將に大人物を想到する事を得べし、頭腦明敏にして裁斷流るるが如く些の滯滯を見ず、加ふるに膽は大にして、包容力あり、部下の悅服する宜な

りと云ふべし、先天的大器の人物とは氏の如きを目して稱する事を得べし。氏の人を爲りを見るに、豪放不羈なる性格は乃父重太郎翁より享け、然して爛熳馥郁句ふが如き人格と、恬淡雅懷魅するが如き資性とは、實に氏が先天的に有せし性格なるべし、氏は事業の外に趣味として讀書の樂みあり、一步足を氏の書齋に投すれば、萬卷の藏書は書架に山積され、各手汚を存す之れ氏が尋常一様の藏書家愛書家の徒と同一ならざる眞の讀書家たる事を證するもの也。更に一佳話として得ふべきは、往年重太郎翁一朝の蹉跎に會するや、「我は空拳を以て起ちたる者、素の裸一貫に復する又何か悔みんや」と叫び、多年心血と巨資を傾けて蒐集せる天下の珍器名寶と其の私有財産の全部を擧げて、之が處分に投じ以て贅六輩をして愧死せしめき、然れども孝心深き松藏氏は深く之を憾みとし、私かに之が買戻しに苦心し多大の努力巨財を投じ漸く亡父の年回忌に際し、悉く之を蒐集し以て些か翁の英靈を慰めたる一事なりとす、以て君の爲人を窺ひ知るべし。起てよ、松本松藏氏、君の如き天成の資質を有する者にして、天下の事一として成らざる事あらんや、杳遠なる前途と、進境とを有する君の爲めに切に自重自愛を祈るもの也。

田中丸善藏君

外國貿易の消長盛衰は、同時に國運の其れと一致する、されば國運の消長をトせんとするには、其國に於ける外國貿易の状態を委細に觀察すれば自からにして明白となる、五十年前未だ世界に於て存在すらも認められざりし、蕞爾たる小島國の我國は、三百年來因襲し來れる鎖國の政策を放棄して、開國進取の國是を確立し、世界に向つて通商貿易を開始してより、爾來世界各國のレコードを作つて稀有なる發展伸張を爲し、其間に日清、日露、北清事變及び、近くは日獨戰爭を通過したる我國は爲

めに新に數ヶ所の領土を加へて更に更に大發展を遂げ、現在に於ては海外諸國人の驚異の的となりつつある、殊に這般の歐洲大戰は、我國海外貿易をして未曾有の大發展の機縁を造り戰時の影響により輸入杜絶せる各國即ち印度、濠洲、南洋支那等に向つて、盛に輸出貿易を開始し、既に昨年度に於ては其の年額實に七億圓にも及んでゐる、以て其如何に殷賑を極め居れるかは推知することが出來やう然れども大戰一度終熄せる現在に於て、稍もすれば既に開始せられたる激烈なる世界貿易戰の結果に付き杞憂するものあれど、交戰諸國が戰時中に負ひたる深甚なる創痍に伴ふ國力の疲弊は一二年の間は到底能く克復し得べき所ではない、加へて列國は戰後諸般の經費を支辨する爲めに、非常なる重税を賦課せられ、其の結果勢ひ其製造に係る生産品は價格の騰貴を來すこと止むを得ないから、勞銀の低廉に加ふるに、市場に近接して運賃の低率なる我國とは、其期間(一、二年間)到底互角の競争をなし得ることは、蓋し困難なるものがあるであらう、斯くて其期間こそ我國に取つては、絶好の機會である、乾坤一擲勇邁進して、以て我市場の開拓に努め、堅き根據を同所に獲得して、再び競争國をして手を染めせしむるの餘地なからしめる千載一遇の好機である、されば現在程我國各種の貿易業者に取つて、重大なる時機はない、この機によく乗じ、よく棹し、以て現在に於ける一時反動期たる特殊の停滞期を突破して邁進する者こそ、遂には最後の勝利者たる月桂冠を獲得することが出来るのである。

田中丸善藏氏は、世人の皆知悉する通り、資本金三百萬圓を有する南洋貿易株式會社の社長である未だ年齢四十歳にも充たない至つて若々しい人であるが、其手腕其識見、其智略は既に時流を抜き本邦貿易業者の一異彩として噴々の名聲がある、氏は佐賀縣の人、先代善藏氏の長男として明治十四年一月同縣に於て生れたが、家は代々同地一流の素封家にして、吳服商を業としてゐた。氏も家督を相續するや直ちに家業に従事したが、氏の雄心勃勃たる覇氣は忽ち家業をして大發展を爲さしめ、九州

北半部の目星しい都會といふ都會に、同家の支店を見出さないことは殆んど稀れである、或る一部の人々は、この餘りに小氣味のいゝ發展振りに、内心多少の嫉妬を抱き、其の經營方針の不確實を嗤ふものがあるが、氏は超然としてこの俗見を退け、飽く迄も自己の信ずる道に邁進しつゝある、然し氏は決して狭小なる一地方に、跼踏たる生活を送る人ではなかつた、氏の積極的且つ進取的氣魄は、何うしてもそれを許容しないのである、斯くて今次の歐洲大戰は、氏のこの鬱勃たる氣魄に絶好なる機會を投げた、忽ち日獨戰爭の結果により、獨領の表南洋群島が我國の占領する處となるや、此時疾く氏の頭に閃いたものは、裏南洋三大事業の一なる磷礦採掘の事業であつた、即ち氏は率先して之が採掘に着手し、姑息因循なる我國の金融界及び資本家を呆然たらしめたのである、かくて今や君は南洋貿易株式會社の社長として其手腕を縦横に揮ふてゐる。

寔に氏の如きは、我國實業界の稍もすれば退嬰消極に流れんとする惡傾向に華々しく逆行する一偉才である。所謂健實の惡風に囚はれたる人々より見れば、氏のこの華々しき飛躍は或は危險千萬に見ゆるであらう。しかし燕雀何ぞ鴻鵠の志を知らんや、善藏氏の胸中には、豫めの確周到なる企畫既に圓熟してゐるのである、吾人は、外國貿易の爾後益々多端ならんとする時、氏の如き飛躍的人物の斯界に存在することを甚だ心強しとする處である、蓋し刮目して見る可きは氏の前途であらう。

長野善五郎君

舊幕時代に於ける小藩割據の弊は、各地方の脈絡交渉を不便ならしめ、文化に對して非常なる損失を與へた、由來分割と綜合の妙用、地方と中央との有無相通する交通の便あつて、初めて一地方は圓滿なる發展を爲すものである、然るに大分縣は獨り分割行はれて綜合を缺き、又交通の便極めて不便

なりしを以て文化は自然遅れ、九州の内でも宮崎縣に次ぐの不開發地として、明治年代に残されたものである。

然れども時代の趨勢は駸々乎として稚移し、隨つて交通の便は段段と開けて來た、而して大分縣が有する發達の可能性は年と共に現はれ、而して其確證を印して來た、近き將來に於て日向線が東海岸に開通し、豊肥線が熊本との連絡を保ち、果ては久大線が横方より、福岡縣を介して長崎との通商を開始する時、大分縣は異狀の發達を遂げ、其勢福岡縣に次ぐの殷盛を齎すであらう。

就中、同縣の中で最も有望なるは、云ふ迄もなく大分市である、別府が近年如何に繁榮を來したと雖も、温泉地は要するに温泉地である。遊覽地は要するに遊覽地以上を望むことは出来ない、これに比すると大分市の將來こそ、其背域、其地理的關係よりしても、同縣の中心地として、將來同縣の活躍を代表する一都市として、將又九州の名都市、日本有數の一都市として、吾人が深く矚目する必然の運命の下にあるのである。而して、同市の斯る將來ある實業界を代表する人に、吾が長野善五郎氏がある。

長野善五郎氏は大分市の人、生野藤一郎氏の長男にして、安政四年六月を以つて生る、夙に漢籍を澤田君平氏に就きて學び、次いで廣瀬旭窓の漢學塾に入つた、明治五年氏が十九才に及んで、先代長野家の養子となり、同家の家業たる醬油釀造業に従事した、當時同家は家業大いに衰運を來し、家産も稍々傾きかけた折であつたから、氏は奮發一番大いに家業の挽回に努め、艱苦を積むこと數年に亘つたが、氏は感ずる所あり、即ち意を決して池田伊丹の釀造地に至り、身を倉男に扮して親しく同地の釀造法を研究すること三星霜に及んだ。

既に漢學の素養を充分に有し、而して庄屋の家に生れた氏が、身に襤褸を纏ひ、日夜過勞なる作業に従事して、以て三年の星霜を一介の雇人として過したといふことは、氏の面目蓋し躍如たるものが

あるではないか、實に氏は決して、所謂輕浮な才子の部には屬しなかつたけれども、意志堅固にして着實な當代稀れに見る好青年であつた。かゝる青年にあらずんば如何にして、この長い勞苦に満ちた隱忍を凌ぎ通すことが出来やう。かくて氏は、三年の後漸くにして、其目的たる醸造法の秘法を握ることが出来た、而して氏は、歸來直ちに新なる醬油の醸造に従事し、新なる工場を新築して長大なる煙筒を立てるに至つた、之即ち大分市に於ける最初の煙筒で、而して醸造された醬油の聲價は忽ち四方に擴大されて至る所に好評を博し、事業は一躍大發展を遂げて、家運を挽回するに至つた。之一に氏の獻身的努力の賜である。

「産なければ功立ち、功立てば利自ら集る」この諺は蓋し眞理であらう、己に稀有の隱忍により、一業を爲し、功を立てた氏は、明治十年各地に銀行の起るを見て、率先し自らも一銀行を設くるに至つた、之即ち第二十三銀行である、現在に於ては、資本金二百四十萬圓を有し、縣下各地に出張所及支店を七ヶ所も設置し、遠く縣外にまで其翼を擴げ、大阪及門司に其支店を有する大銀行となつてゐる氏は現在に於ても同行の頭取として、其堅實機敏なる營業振りに他を抜いでゐる、又氏は明治二十八年更に大資本金三十萬圓を以て大分市に大分貯蓄銀行を設立し、其頭取となつたが、現在では實に資本金三百萬圓を算し、縣下は云ふに及ばず、他縣に迄其營業區域を擴張して大飛躍を爲してゐる、偶々明治四十三年、南洋に於ける護謨栽培の有望なるを聞きし氏は、直ちに人を派して同地に於ける同事業の詳細を調査せしめ、遂に二十萬圓の資を投じて、大分市に南洋護謨株式會社を創設するに至つた。

是より先、氏は別府に同地の事情を達觀して、豊後電氣鐵道株式會社を創立して其社長となり、又更に大分市に大分紡績會社を設置して同じく其社長になり、其雙翼を自在に伸す等、同地事業の創立に携はり、又同地の事業振作に盡瘁したること殆んど枚擧に遑なき程で、其名聲は嘖々として同地の

實業界を風靡してゐる。

氏は資性温厚着實にして、事を爲すに當つても、よく慎重なる思慮を巡らして輕舉盲動せず、而も一度起れば宛ら疾風迅雷の如き觀がある、世には往々にして自らの天性を過信し才氣横溢、才華喚發を以て、自己の業務に當らんとするものがある、此種の人は實に其行く處可ならざるなき感を世人に抱かしめ、痛く其才能を感嘆するものあれど、而も往々にして之等の人々は、過失を生じ、失敗を免れない、蓋し餘りに縦横なる才氣によつて、慎重なる思慮反省を怠るからである、けれども幸にして氏は決して之等の才人の仲間ではない。嘗ては餘りに慎重着實なるが故に、其慎重を優柔不斷と誤られ、着實を鈍重と蔑まれたことがあつた。けれども大器は晩成する、見よ氏の現在の名聲隆々たるを勢威赫々たるを、今こそは氏の長い堅忍が光を放つ時である。

氏は又至つて高雅なる人格の人で、現時諸般の事業に干與する傍ら、市の公共事業にも深く意を用ひ、之れに貢獻すること至つて強い、而して氏は又現代稀れに見る孝順の人にして、養父母に仕ふること懇切を極め、毎朝その前に跪座して禮を終るに非ざれば、食膳に向はぬといふ程である、その床しき人と爲りも忍ばれて、轉た人をして感慨に堪へざらしめる。

惟ふに大戦既に終熄し、今正に其の序幕を開きたる世界經濟戰は、この東洋の天地を中心として行はれつゝある時、九州各地に於て、福岡市に次ぐ未來ある大分市に、氏の如き人物の在るは、國家の爲め甚だ慶事とすべきである、氏は年齢漸く耳順に近からんとすれど、其識見、手腕、精氣壯者を凌ぐの概あり、自重して以て同地の爲めに盡瘁せよ、そは當に獨り同地の爲めのみならんやである。

吉田芳太郎君

歐洲大戰の影響を受けて、殆んど吾國に於ける諸般の工業は驚くべき膨脹發展を遂げたるが、獨り吾が織物業のみは、依然として戦前と大差なく、我國各種工業界の大勢より、遠く其埒外に驅逐され居れるの觀あるは、吾人の甚だ遺憾とする處である。

其の主要なる原因としては、吾國の織物なるものが、其の歴史の古きに於ては、他工業に比し百年の長あるに拘らず、未だ何等の海外的發展を爲さず、依然として跼蹐たる家内の工業範圍を脱せざるに起因するものにして、一方斯業者の胸中を察せんか、其苦衷同情するに餘りあるものがある、奈何となれば、由來我國の織物なるものは、其販路を殆んど國內のみに局限され、一步海外に足を踏み出せば、其處は風俗習慣嗜好を異にし、之に適合せんせは種々なる困難生じ、到底一朝一夕の努力を以つて能くする所でないからである、然し之も大局より見れば、依然として未來の我が織物界の發展は海外にあるや勿論にして其處に如何なる困難、幾多の障礙が横ると雖それを突破せざるに於ては我國の斯業は依然として跼蹐たる家内工業の範圍を脱し得難い、即ち他の諸般の工業の大勢より常に除外されて、遅々として漸く現状に甘するの萎微不振を極むる特種的工業に過ぎないのである、大勢は既に我が織物界をして、到底現状維持の境遇に甘んずることを許容せず、今や漸を遂ふて我が織物界も海外發展の氣運が成熟しつつある、この時に當り、吉田芳太郎氏の如き我機業界の先覺者を斯界に有することは、吾人の甚だ心強しとする處である、氏よ自重して以て我國斯界の爲め楫舵の勞を厭ふなかれである。

吉田燃糸織物工場の主、吉田芳太郎氏は福岡縣の人、夙に博多機業に志し、明治十八年八月博多織

業を開始せるが、二十三年に到り本場博多織の聲價頓に不振となり、随つて、販路は逐日縮少の止むなきに至るや、氏は奮然起つて博多織物の内、袋織なるものを製織して斯界に新機軸を出し、更に風通機を案出し、極力販路の擴張と品質の改革に努めたる結果、竟に其努力空しからず、需用大いに増加して今日の如き聲價を贏得するに至つた、蓋し福岡市機業界の權威として、今日盛大を極めつゝあるも決して偶然ではない、明治二十七年博多織同業組合の取締に任せられ、同年五月博多織同業組合代表員となり、猶後福岡市博多財産區會議員、縣重要物産工藝品々評會審査員、博多織同業組合長全國生産品博覽會を始めとして、其他著名の博覽會及品評會等に於て、氏の名を其審査員の中に見出さないことは稀であらう、以て氏の信望如何を推知すべきである、而して氏は自家の製品を各品評會博覽會等に出品し、其都度金銀牌有功賞等を受けざることなく其數枚擧に違なしである、其外宮内省より御用を命せられ、陸軍特別大演習に際して特に福岡市より獻上品の織立を命せられ、又各種織物に對して畏くも天覽の光榮に浴する等此の名譽は實に限りなきものがある、されば曩に本工場にては佛國より輸入したる最新式燃糸機械を率先輸入し、更に數種の力織機をも工場に据付けて、益々時勢の進運に對應せんと企畫し、其潑瀾たる生氣は當に衝天の概ありとも言へる、又氏は自家の事業の傍市會議員及び市參事會員として市政に參與し、市の改善進歩の爲めに盡瘁すると共に、現に博多商業會議所の議員として、同市の實業界に飛躍してゐる。

惟ふに現在の織物業なるものが、稍もすれば消極的且つ退嬰的に流れんとするの時、氏の如き時運に通じたる、而も活潑々地の精進の氣に満ちたる人物を、斯界に見出すことは吾人の大に欣幸する所である。

大戰一度終熄して、世界は平和裡の經濟戰に再び其雌雄を争はんとす、この時に當り目醒めかゝりたる我織物業の爲めに、世界飛躍の先覺者となり、之が羅針盤となるは、蓋し氏の如き人に於てのみ

望み得べきことであらう、我織物界の前途洋々たるに等しく、氏の前途も又渺茫として盡きない。

田中豊輔君

實業界の俊髦雲の如き中に、又能く名を成すもの決して尠しと謂ふべからず、而も君の如く努力に依つて贏ち得られたる地位、名望、資産を有する者あるは確に斯界の異彩たらずんばあらざる也。由來薩南の地たる英雄俊髦甚だ多く宛然明治年代に於ける人物の淵藪の觀あり、氏も亦鹿兒島縣の士族田中七之丞氏の長男として萬延元年十月七日に生れ、夙に漢學を修めて人物修鍊の要素を作り、其成長するに及んで家督を繼ぎ大に成す處あらんとし、人間到る所青山あり、五尺の男子須らく大事業を成さんにはと奮然故郷を去つて大倉組に投せり、茲に於て氏は實業界の呼吸を會得するに從ひ、大倉土木組大阪支店長に累進し幾多の紆餘曲折を経たるも馬觸るれば馬を切り人を觸るれば人を切る底の奮闘生活は其先天性に加ふるに後天的の修養を以てし、性格愈圓熟し、手腕益々辛辣を加へ、殊に君が態度の沈着は著しく現時の斯界に頭角を露はすに至れるものにして、今や發動機株式會社監査役を始め株式會社大倉土木組取締役其他の諸會社にも關係して參劃する所頗る甚大なるものあり、而して實業界の元老として君が聲望の高きは君に仁俠、慈悲、忍耐、信義、果斷の凛々として侵し難き風格を備ふるものあるが爲にして、又僞りなき君の實力を表象せるものたらずんばあらず。是れその偉大なる成功の半面を語るものにして等閑視すべからざる處なりとす。

而も君が偉大なる成功の裏面には賢貞なるさく子夫人のあるを看過すべからず、夫人は漸く四十過ぎの年配なれども、性極めて質素にして些の輕浮の風無く、隨つて家庭も亦常に地味に彩られ俗氣紛々たる成金の臭味無きは實に當代實業家中稀に見るところなり。而して夫人は摯實にして驕らず、必

要に應じてよく慈善事業に力を致さるる事尠からざるは、單に粉色を事とせる放逸なる婦人界にありて燦然たる光りを放てるは蓋し賢婦の性を露はせる處にして、氏や又好配を得たりと言ふべし、其内助の功の如きは今更暇々するの愚なるを信せずんばあらず、今や新に展開されんとしつゝある經濟戰場に果して如何なる新人物が現すべきか、开は未だ逆睹し得べからずと雖も、今や僥倖的時代去りて愈々秩序的爭覇戦に入らんとするに當り、必ずや圓熟老巧の士の盡力を要するや明白なり、氏の如きは其過去に於て總有る試鍊を経、幾度か嚴冬酷暑を迎ひて操色益々鮮かなる老幹の概あるに於て、來るべき經濟界の風雪雨露の襲來は何等禍する處なかるべきは勿論、其亭々たる巨幹其參差たる枝葉は更に其大を加ふるものあるべし。

橋本辰二郎君

歐州の戦亂は我國諸般の工業界に甚大なる影響を及ぼせるは周知の事實であるが、就中工業國、云はれてゐる九州に及ぼせる其影響は、更に更に甚大なるものがあつた、今や九州は決して日本の九州ではなく世界の九州である、其勢は實に旭日昇天に比すべきものがあり、其未來も亦洋々として盡る所を知らない、而も今や開始されたる世界の經濟戦が、我國の對岸たる支那に於て行はるゝに於ては之と最も距離を近くする九州の如きは、我國の産業を代表して其爭覇戦を開始するに最も適したる所である、以て九州の工業的地位が我國に於てのみならず、世界に於ても如何に優秀なる地點にあるか吾人は之を喋々する迄もない。

然りと雖も貿易の勝敗は運送の如何に由つて定まると云つた學者がある、九州に於て其貿易を管掌するものは、今のところ門司と長崎である、然らばこの門司と長崎と其何れが良港として世界の通商

戦に適應するであらうか、斯く考へ來ると、吾人は矢張指を長崎に屈せなければならぬ。云ふ迄もなく長崎は、吾國通商貿易の開始された最初の地である、灣内水深く天然の防波堤に護られ東洋交通の要路としては、亦こない良港であつた。然し時代の推移によつて横濱と神戸とは漸次異数の發達を遂げ、商工業の中心が兩港に變轉移すると共に、其中心に遠かつた長崎は、漸次衰退に傾ひて行つた、しかし、九州の生産業が漸次世界の氣運に胚まれて異狀なる發達を爲すに至りて、長崎港も段々と復活して來た、而して一時は門司と其雌雄を争ふが如き慘めな同港も、現在では矢張九州の首港として其存立を保持してゐる。かくて今や、隣邦支那に於ける經濟戰を前に控ゆる同港は、更に一段の生氣と光彩を添へて飛躍活動せんと準備に汲々として怠りない、而して同港が然る以上之と終始運命を共にする長崎の實業界も亦、近き將來大なる飛躍を爲すべきは、蓋し當然のことではなればならない。この時に當り、同地の實業家を代表して活躍縱横輿望を雙肩に荷ふ人に、吾橋本辰二郎氏がある。

氏は元大分縣の人、橋本建平の二男にして、明治三年五月に生れたと言へば今年は恰度五十歳の分別盛りである。十歳の時長崎に來つて勉學中、恰も同地の富豪橋本雄造氏の囑目する處となり、明治十八年三月同氏の養子となつた。其後東京に出て、勉學に努め、二十五歳の時或法律學校を卒業して歸郷し、親しく實業界の人となり、明治四十四年橋本家を繼承して、同家の家業を嗣ぐに至つたのである。

元來同家は洋鐵商及び一般輸入品の取扱ひをやつてゐたが、同氏は同地方の産業振作に深く思ひを潜めし結果、同地方に存在する目星しい會社といふ會社、産業といふ産業に凡て密接なる關係を結び特に長崎自由倉庫株式會社、長崎電燈株式會社にあつては共に其取締役を勤めてゐる、而して又長崎紡績の創立に當つては率先に之が畫策に努め、大正元年一月同社が設立すると共に長崎實業界の驍將

となつた氏は、半面に於て高雅なる情操に富み、長崎の凡ゆる公共事業の爲めに熱烈なる努力を爲しつゝありし結果、明治四十一年三月衆望を一身に聚めて市會議員に當選したるを手初めに、更に大正二年に再選し、又明治四十一年一月商業會議所會頭に推薦せられ、大正二年又之に再選せられて現在に及んで居る。

元來進取的氣魄に富んだ氏は、長崎市の實業界と自家の諸事業より集ひ來る、種々錯綜したる夥多の事務を物ともせず、片端から裁決流るゝが如き敏腕を振ひ、其餘力を以つて政治界にも活躍せんとし、明治四十五年商工派より推されて衆議院議員の總選舉に起つたが、不幸にして破れ、却つてこの偶然なる結果が世人の同情を蒐むることとなつた、而して大正三年二月には遂に氏は、貴族院の多額納税議員の補缺選舉に當つて、多數の推す所となり、貴族院議員の榮冠を荷ひ、氏の歴史に一段の光彩を添へた。

氏や資性温厚にして謹嚴、一たび自己の主張を立つるや、容易に之を枉けず、飽く迄も之を貫徹せずんば止まぬ性格の強きは、往々にして人の誤解を招き、傲岸不遜の譏を受くることあるが、而し氏は是等の誹謗の前に立つて些かも怯む所なく、斷乎として自己の所信を奉ずる態度は、附和と雷同と妥協との浮薄なる現代に、吾人の珍とする所である。

惟ふに近き將來に於ける長崎の實業界は、前述の理由に依つて更に一段の飛躍を前に控へて居ることとは、争はれない事實であらう、此時に當り氏の如き才腕の卓越したる、頭腦の明晰なる、且つ精力絶倫なる人を同縣の實業界に有することは、亦等しく吾人の欣幸とする所である、氏よ、自重して以て未來の飛躍に資せよ。

原 六 郎 君

我國經濟界の先覺者として、將又我が國實業界の元勳として澁澤男爵と並び五指の中に屈せらるゝは我が原六郎君である、願ふに維新前後、生命を捨て、國事に盡し而して我が實業界に巍然として頭角を現し社會に雄飛せるもの其人尠しとせざるも、君の如く學識修養ありて品性高く、萬人の等しく尊敬する底の富豪たり實業家たるものは極めて鮮少なりと云はざるを得ぬ、此點に於て原君の如きは明治實業界に一大異彩を放てるものと云ふべく、其活躍振りの如何に花々しかりしかは、大正年代に移れる今日、其牢乎たる磐石の根底にも徴すべきである。

王道の衰微、鎖國主義、壓制政治の永き桎梏より離脱せんとする熱情は、遂にベルリの渡來を一轉機とし轟然として勤王攘夷論を喚發し、激論轟々として天下騷然たるの有様なりしが、幾多の紆餘曲折を経たる結果は遂に維新の大業を完成し、即ち今日世界列強の一に列するの源泉を成した、而かも廻りて仔細に當時の世態を見んか、實に血と肉、涙と汗の悲劇、慘劇の其れにして、此間幾多有爲の志士仁人が皇國の犠牲となれるは否むべからずである、原君も亦少壯身を挺し維新の志士として國事に奔走せる一人にして、君の歴史には實に悲風蕭々として易水を渡るの悽愴なる、或は東奔西走寧日無き活躍史が含まれてゐる。而かも當時の同志は不幸にして志成らず横死せる者、又は流離轉變して窮巷に世を終れるもの多きが中に、君は夙に時勢を達觀して巧みに范蠡の古智を學び、現に或意味に於ける陶朱たるの格にあるは賢なりとすべきである、即ち當時君は自ら期する處ありて海外に留學し世界進歩の狀勢を目撃して歸來盛に實業を奨励すると共に自ら實業界に投じて其先驅者となり、幼稚なりし當時の社會を指導して我邦發達史上に少なからざる貢獻を齎らしたものである、此意味に於て

君が現今實業界の元老として、先覺者として敬仰せらるゝ又當然と云ふべきである。

君は兵庫縣朝來郡山口村の名族進藤丈右衛門氏の六男に生れた、進藤氏の祖先は藤原氏にして義氏と稱し義經に従ひて赤間の戰に軍功あり、後裔小源太敦影氏居を佐中に占め、累代此處に住すること七百有餘年、連綿として所領も廣く隠然として領主を凌ぐの概があつた、當主は長次氏にして其家の如きも鎌倉時代の建築に係り、古代建築物の標本とせられて居る、嚴父丈右衛門氏は曾て幕府直轄の大里正をつとめ、清廉義俠にして、忠君愛國の志厚く、夙に王室の衰微を嘆き、深く勤王の士を愛せられ維新前愛國の志士の但馬に遊ぶものは多くは同家に寄つたものである。

君は幼名を俊三郎と云ひしも、文久三年の交幕府の嫌疑を避けんが爲め、藤原の原を取り原と云ひ名を六郎と偽名せしが、脱走後各藩同志の知己は原六郎を知りて進藤俊三郎氏を知るものなく爲めに頗る不便を感じたるを以て、維新後其假名を現姓に改むるに至つたのである。

君は幼時陽明學派池田草菴の門に入りて漢學を修むること二三年、時恰もベルリ提督の來りて修交條約を求めんとせる時にして、吉田松蔭、佐久間象山等を始め水戸志士の建白となり、天下は將に亂麻の如く適歸する所を知らずといふ危機であつた、於茲乎、君は之等の志士の舉に感激し、身を挺して國事に奔走するに至つたが、時に年齒僅かに十七歳と言ふに至つては、其氣魄の大なる、既に凡俗と毛色を異にしてゐる、後幾何もなくして同郷の北垣國道氏と共に勤王を唱へ四方に活動し、次で文久三年大和に於ける義舉を應援せんが爲、勤王家平野國臣の來但するや之れと刎頸の交を結び、遂に生野に乗り込み、代官所に據りて布告を發し旺んに農兵を募集して幕府に向ひ、反旗をかかげしが機未だ熟せざりしを以て利あらず、幕府の追捕に遭ひ各地に潜伏するの悲運に遭遇し、東奔西走又流離轉變、幾多の辛酸を嘗めて長崎に入るに及び小倉の戰爭に加はり、滯留二年克く長藩の諸名士と交はり共に尊王討幕の事を圖り、傍ら大村益次郎に師事して泰西の戰術をも學んだ。

斯くて他郷に放浪せる君は間も無く但馬に歸りしが北垣男と共に因州に入り、故河田景興子、故松田道之等と相謀つて國事に盡す處ありしが、後山國兵隊を率ひて鳥取藩と共に野州安塚に戦いて偉功を奏し、或ひは大村、西郷兩將の下に上野に彰義隊と戦ひ、宇都宮に流賊を追ひて雷名を轟かし、凱旋後大尉に任せられ専ら親兵の訓練につとめたのである。

明治四年伊藤公が米國より歸朝するや人材を西洋に派遣して文物を視察せしめ文明智識を輸入せんとの意見を唱へたるにより、政府は全國十五大藩に命じて各二名宛派遣し一ケ年を期して海外を視察せしめんと議成るや、君は鳥取藩より援擢せられしも一ケ年位の視察研究にては効なきことを主張して一度之を辭去したが政府は一年以後の經費は藩費を以て支給すること、して之を許す事となり、遂に明治四年五月米國に向ひ留學の途に上つた。斯くて壯志凜々として焔ゆるが如き希望を抱いて萬里の波濤も無事に異域の客となりニウヘン大學に入りて經濟學の研修に就きしが同年廢藩置縣の結果は氏が留學の財源を失ひ、中途廢學歸朝するの餘義なきに至らんとした、茲に於て炯眼なる君は當時米國は南北戦争の後を享け、紙幣低落の極に達せるに着目し、遠からず回復の期あるを前知し囊底を叩きて之を買収したるが果して幾何もなく紙幣價格回復して意外なる巨利を得、一舉にして數年の學費を得るに至つた、斯くて「ボストン」「ニューヘブン」大學に留る事二年、次いで英國に渡り留學する事二年餘經濟學の蘊蓄を極めて歐洲大陸を視察し、明治十年に至りて歸朝したのである。時恰も西南戦争最中のこと、て君に劍を以て立たん事を慫慂する者多かりしが、野に下りて實業を指導せんと決心せる君は固辭して受けず、鳥取士族の有せる公債を資本として銀行を設立せん事の懇請せらるゝに任せ第百銀行を設立し、本店を東京に支店を鳥取縣に置き自ら頭取となり拮据經營の結果は久からずして社會の信用を博し、其當時は本邦唯一の模範銀行と稱せらるゝに至りしも全く君の監視督勵の結果である、尙此場合逸すべからざるは當時同銀行の經營に附隨して東京貯藏銀行を創始せる事にし

て之れ又貯蓄思想を喚起して多大の貢獻を齎らした、之れ實に本邦に於ける貯蓄銀行の嚆矢である。

其後明治十三年外國貿易機關銀行として横濱正金銀行の設立を見しも、未だ我國人中外國取引の途を知るもの少く、従つて銀行經營の目的を誤り幾何ならざるに資本金の三分の二に垂んとせる缺損を見るに至つた、斯くて對外信用上又國家經濟上一大改革を行はざるべからざる悲運に達着したるを以て、當時の大藏大臣松方侯は君を頭取に薦め之れが改革を圖らんとし、君亦之を快諾して第百銀行は後任に託し、自ら正金銀行頭取となりて之が整理に着手したるに、三百萬圓の資本に對し前記缺損の結果九十五萬圓を殘せるに過ぎず、殊に從來は日本人を限り多くは融通手形にして、外國人と取引無かりし爲め、斯くては對外金融機關の本義を没却し、且貿易發達の道に非ずとなし後、外國人との爲替取組を開始して大いに業務の擴張を計つた、當時日本人のみの經營を以て外國人との間に爲替の取組を行ふこと不可能なりとし之を危ぶむものありしにも拘らず、而も外國商人の信用状態を仔細に調査して取引せる結果は些の損失をも見ず、夫より業務の繁忙を來し初めて貿易機關銀行の任務を全ふるに至つたのである、斯くの如きは君の手腕によりて始めて之を遂行せられたるものにして、到底他人のよく企及し得べきではなかつた、尙同行は從來正貨資本の制度にして、當時紙幣相場の暴落は銀一圓に對し、紙幣一圓七八十錢内外なりしを以て、臨時株主總會を開きて從來の銀貨資本を紙幣資本に改め、損失せし殘餘少額の銀貨を賣りて紙幣に替へ、其紙幣を以て重ねて百圓の額面七十圓に暴落せる公債を買収せしが、幾何もなくして紙幣及び公債の價格暴騰して多大の利益を得、僅か一年ならずして次期の決算期には從來の缺損二百十萬圓を償却して若干の積立金をさへなすに至つた、明治十九年支店設置其他の要件を帯びて歐米に航し、歸朝後増資を企てしが、額面百圓の新株は二百圓の應募となり、之によりて三百萬圓の利益を得て積立金となした、君の入社當時株券の價格僅に四十圓に暴落せしものが明治廿三年病を得て辭職するの際には二百十萬圓の缺損を償却し更に七百萬圓の積

立金を有し、價格は一株四百圓を以て賣買せらるゝに至つた、而して其基礎を確立して今日あるを得せしめたるは全く君の力によるものにして、爾來我國貿易が今日の如く發達せるは君の力に待つや大なりと云ふべきである。

病を得て正金銀行の頭取を辭職せる君は、同行の取締役として商工業視察の爲め三度歐米に漫遊し歸朝後鐵道其他の公益事業に投資し、明治二十七年には帝國銀行なるものを設立して取締役會長に擧げられ、卅一年行務の擴張發展に際して同行を辭し、それより山陽鐵道、總武鐵道、橫濱船渠を始めとして數十銀行會社に關係するに至つた、斯くて之等諸事業は着々として發展し基礎漸く鞏固を加へ來りしを以て其經營を後進に譲り、現在にては二三の會社に關係して其監督的立場にある、君は曩に正五位勳五等に叙せられたりしが、更に昨年勳三等旭日中綬章を賜りたるなど全く君の功勞を表明するものと言ふべきである。

君や資性温厚篤實にして而も放膽豪壯、其事業に對しては細心且周緻にして明敏なるは何人も嘆稱を禁せざる處にして、君が今日の成功を博せるもの豈偶然ならんやである、尙君は從來教育救濟其他の公益事業に盡力する處深く、之等に對しては毫も資財を吝まず、曾て理化學研究所に金三十萬圓を寄附し、鳥取高等農林學校にも亦數萬圓を寄附し、其他此種の義舉の枚擧に遑あざらるは當今稀に見る處にして、君の義俠的精神と人格の高潔なるを遺憾なく表してゐる、昨年七十七歳の祝賀の爲め盛んなる園遊會開催の企てありしも時局に鑑み、之を廢して其經費の利用を思ひ、即ち金二萬圓を品川小學校に寄附したるなど、其己れを空しうして公益に厚き所到底凡俗の能くする處ではない、而も平民的にして驕慢の風無く、温雅にして敷島の道を愛し、前記品川小學校へ寄附金の際詠すらく、「散りやすきもみちの國のあそびよりとはに榮えむまなび家にこそ」此の三十一文字能く君の眞價を語りて餘ある、近來塵境を避けて好山莊に閑棲し、品海の朝光名景に親しみつゝ、悠々と世を送りつゝ有るが

如きは、蓋し功成り名遂げたるの名將と稱すべきであらう。

今や新たに起れる世界的經濟戰を想ふの時、吾人は此千軍萬馬を往來せる古名將に學ぶべきもの甚だ多きを感じざるを得ぬ、君や尙は春秋あり、自重加養して後進の指導に盡されんことを。

鹽原 又 策君

君は人も知る彼のタカチアスターゼに依つて成功を贏ち得た人である、時は明治三十二年の事である、米國歸りの一友人から、高峰博士發見のタカチアスターゼなる藥が、外國で非常なる好評を博して居ると云ふ話を聞き込んだ君は、此機逸す可らずと直に米國に在る博士に交渉して、日本に於ける本品發賣の承諾を懇談した。

知らぬ人からの交渉ではあつたが、博士は快諾した、君の喜悅は一方ならず、直に匿名合資組織の一商會を起し、自ら其代表者となつてその賣弘めに従事した、然るにこの計畫は的中して、數年ならざる中に日本全國津々浦々に至る迄知らぬものなき程に行き渡つた、是れが現在の三共株式會社の起原で、君の新しき試みに於ける成功であると共に、君が博士と結び着く最初の關係であつた。

更に博士はアドリナリンの新發見に成功して歸朝するや、君は博士を神戸に迎へ相俱に神戸から横濱迄の船中に半日の會見を費し、アドリナリンの一手販賣權を得る事になつた、此半日の交渉會見こそ、爾來博士と君との兩者が提携するに至る序幕であつた。

初め藥劑事業は副業であつたが、製藥工業の前途大に矚目すべきものあるを達觀して、本業の羽二重業は斷然之を廢止して了つた、而して東京に三共商店なるものを開き、是等の製藥を始め一般藥品

の販賣に従事したのが、恰も明治三十五年の事であつた。爾來事業は益々發展擴張して、株式組織に變更するに至つた、それが現下日本橋區室町にある資本金五百六十萬圓、各種積立及び銷却金參百餘萬圓を有する三共株式會社で、高峰讓吉博士を取締役社長に推戴し、君は専務取締役として實際の業務擔當者である。

三共株式會社の取扱品は醫療藥品を主なるものとし醫療機械、化學工業用機械、各種絶縁材料等であつて、又内外各社の製造に係る工業藥品取扱の大問屋業も營んで居る、而して同社は東京府下北品川及び大阪に大規模の製藥工場を、又府下向島に工業用諸材料製作の大工場を有し、我國斯界の獨立を實現せんとの域に達して居る。

高峰博士は君の恩人である、けれども少くも博士も亦君に依つて其名聲に光輝を添へたものと言へる、この恩誼の關係は兩者をして益々深く結合せしめ、一層鞏固ならしめて居るが頃來博士は日米共同の各種化學工業を興すべく盡力しつゝありて、君は是等計劃の日本方面の中心となつて大に活動して居る、兩者今後の結束は如何なる方面に發展するか、大に刮目に價するものがあらう。

君の嚴父又市氏は明治初年、信濃の山國から横濱へ出て、事業に成功した人である、君はその長男として生れ、夙に米人に就き英語を學び、大谷嘉兵衛翁の麾下に馳せ製茶事業や、羽二重輸出業に従事して居つた當時、タカチアスターゼの一大福音は君の頭上に降つたのである。

君は化學工業の發展、學府と實業界との聯絡を問題に就いては、熱心なる主唱者の一人であつて且その實行者である、三共會社發賣品の多くは學者研究の産物にして、會社が之が販賣收得の一部を研究者に報酬して、新なる研究費に資してゐる、眞に君は事業から事業へと、終始一貫の態度を持して居る、惟ふに、若し君から事業を除いたら、君の生は認められない事になるであらう、然り、君は事業の爲に生きて居る眞の事業家と稱すべき人である。

海江田準一郎君

鹿兒島縣下の海江田家と云へば、現に直接國稅三千七百圓を納めて居る縣下屈指の素封家である、代々市來郷の富豪として聲名世に普く、殊に君の先代平治氏が一代にして今日の富と名を築き上げた人だけ曾て米穀賣買の巨商として、其の慧眼で大胆であつた事は屢々世人を驚嘆させたものである、而も一たびは貴族院議員として邦家に盡瘁する所あり、其功に依つて勳四等に叙せらるゝの榮譽を荷ふた傑物である。

君は明治十四年に生れ、大正二年先代の後を嗣いで家督を相續した、長じて慶應義塾に學び大學部法科を出でた、父君の性格を享けて奔放にして才氣濶達、理路に長けて居るが、何分叔父たる同姓金次郎氏が後見役といふ形にあるので、今の所自分の抱負を思ふがまゝに實行するといふ事は出来かねて居る様である、即ち夫れ丈け君の潜在力が豊富で又未來性に富んでゐる譯である。

金次郎氏は夙に縣下有數の富豪且つ實業家として名高く、現に鹿兒島貯蓄銀行の頭取及び百四十七銀行取締役の位置にも据つてゐるし、やはり多額納稅者と云ふ關係から地方財界には偉大なる勢力を有つてゐる、而して氏の長女フチ子は準一郎君の夫人で膠漆の關係から米穀商の方は兩氏の合資に成り、其他如何なる事業でも合議相談の上で着手するので、随つて準一郎君は表面に於ては叔父の傘下に庇護さるゝ型にあるが、然し、之れが爲め毫も君の眞價を減殺するものでは無い、要するに旺盛たる霸氣と奔放自在の手腕を一時局限的に抑止されると言ふに過ぎないから、一度君が獨立壇上の人とならんか疾風枯葉を捲くの勢を現するは見易き事である。

兎に角屈して後に伸びるといふ事もある、現今東海化學工業株式會社監査役、株式會社鹿兒島化學

研究所、株式會社明正社各取締役といふ地位にもあるから、今暫くのところはその才幹と頭腦を以て益々潜勢力を蓄へ、他日縣下企業界に馳驅して縦横に君の抱負と、期待とを實現し得る活躍の期を待たねばなるまい。

由來鹿兒島縣は九州の南隅に僻在し、其地勢上より見れば産業の開發の如きは勢ひ不振の状態に置かるゝは當然と見るべきであるが、然も藩侯島津家の勢力は封建時代より幕府の羈絆を脱して宛然獨立國を形成したる關係上、小規模乍ら産業の獨立策を樹てたる爲め、比較的進歩の傾向も認められ、國産として名ある物尠からず、旁々時運の進展に促されて各種事業の勃興を來たし、尙此傾向は將來益々濃厚ならんとするの機運に在る。

而して此時に於て此趨勢を助成するものは一に其地方の人材に俟たねばならぬが此點に於ては我が海江田準一郎氏の如きは當に其適材と言ふべく、君の潜勢力が如何なる形式に依つて發せらるゝや逆睹し難きも、蟄伏幾年、成熟せる手腕は必ずや、同地事業界に激濁たる生氣を寄與すべき事信するに餘りある、君の事業經營振りを見るに摯實にして固陋に墮らず、敏捷にして輕佻ならず、而かも熱心にして努力を惜しまざる處全く新時代の事業家と稱すべきである。加ふるに頭腦緻密にして理財の道に明るく、思想清新にして識見の進歩的なる處は飽く迄財界場裡の雄者たる資格を具ひ、前途光明赫々たる觀あるは君の爲め慶すべきである。

君や年齢未だ三十九歳、前途尙は多くの春秋に富む、而も今や貴族院議員として正八位勳四等の位記を有し、父子二代この榮譽を荷ふは、世の窄觀とすべく、亦海江田家の名譽と云ふべし、希くは、邦家の爲め自重して吾徒の期待に辜負するなからんことを。

石田文七君

君は現に社運隆々として名古屋事業界を壓する株式會社愛知物産組、及び株式會社名古屋物産組の各取締役として功勞淺からざる人である、愛知物産が資本金百萬圓を以て株式會社になりたるは近々大正六年九月の事であるが、同社は大正二年尾三の陸軍大演習に際して、聖上陛下が産業獎勵の優渥なる御聖旨を以て、侍從を當市の八工場に差遣せらるゝに當つて、其の筆頭に選ばるゝの光榮に接した歴史を有つて居る、而して尙他府縣より熱心なる工場視察者若くは知名の人士が實業視察に來る場合に、商業會議所又は縣市の商工課に案内を頼むと必ず定つて同社を指定する、其れ程行届いたる信用厚き織物工場であるが、同社をして今日あらしめたるは全く石田君其人の力であつて君は實に愛知物産組創立當時よりの偉勳者として、其今日に至る迄の生涯は正に立志傳中に列すべきものである。

同社は第一第二のボタン式廣織工場第三第四の並織工場、及ジャガード式工場、整理工場、管糸場、事務室、整理室、倉庫等を有し工場設備と男女職工の待遇の完全せる正に同市の模範工場と推稱すべきである、其寄宿舎に於ける職工取締の如きは最も理想的にして讀書裁縫を教へ、又救急衛生等の機關も完備し、病者に對しては設備完全なる病室を有し、尙ほ精神修養に就いても毎日教師を招聘して聽講せしめ、神佛の尊敬心を養成し、毎年一回報恩講を執行し、殉死幹部及職工等の冥福を祈る等實に至れり盡せりと謂ふべきである。

元來名古屋に於ける一般織物業者は、粗製濫造の弊に陥つて之れが改良に意を注ぐ事なく、爲に尾張物産たりし同品も名聲殆んど擧らなかつた、當時同社は木綿結城縞を製出して居たが、時弊に鑑みて極力堅牢確實の品を製織し且つ着尺の如きも一尺の餘裕をあらしめたるを以て、世人の信用翕然と

して集まり來り、物産編と稱して之れを綿糸織の代名とまでするに至つた、次で同社は同地同業者に率先して絹綿交織を製造し、又黒八丈の染色織方に改良を加へて輸入朱子の代用品となし、明治三十四年にはセル地代用毛織を試みたるが完成して輸入品に劣らざるものを生産し、尙種々工夫改良を加へて、今日に於ては優美精巧なる各種の製品を出して市場に多大の好評を博して居る、特に同社が如何にジャガード式に優秀なるかは、窓掛、卓掛、椅子掛等の巧緻目を奪ふが如き圖案及製織の模様を以ても窺ひ知る事が出来るのである。

同社は初め旭日城櫻の圖を商標となしたが、明治三十二年今の丸知號に規定し、爾來市内近縣は云ふに及ばず大阪、京都、東京地方に至るまで盛んに販路を擴張して其の名聲を高からしめつゝあるのである。

現今如斯盛觀を呈しつゝある同社は其の創立頗る夙く、今日の如き盛況を見る迄に幾多の難關を経來たのであつた、即ち廢藩置縣の當時に於ける無資産藩士の授産工業として明治十一年一月祖父江源次郎氏が、友人横井半三郎氏外二三の有志と相計り資本金二萬二千餘圓を以て同社を創立したるに端を發したのであるが、當時石田君は横井氏の手代より同社の支配人に拔擢せられ爾來一意惠心物産組のために盡瘁して幾多の困苦缺乏に堪へ貢獻して來たのである。斯くて明治二十六年には合資組織に改め、其の後數回の増資と共に漸次社運の進展を來たし、敷地の擴張、建物の増築、織物職工の増員等と相俟つて一昨年には資本金壹百萬圓の株式組織となり、押しも押されぬ同地の大會社たるに至つた、而して輓近生活の程度は向上し、又各種の事業勃興し來るや織物業は頓に旺盛を示し、名古屋を中心として縣下は勿論近縣に亘つて蔚然たる機械地を現出したのである、此雰圍氣に於て常に一步他に先じたる同社が遂に他の同業者を抜いて、今日の盛況にあるは又宜なりと謂ふべきである、之れ創立以來終始心血を傾注して同社の爲に一切を切廻せし石田君の盡力に負ふ處、即ち君は同社發展

史上没する事の出来ない功勞者である。

君は美濃關町の人にして、幼時同姓石田惣左衛門の養子となりしが、家産豊かならず幼年時代より小僧奉公に辛苦を嘗めたものである、十一歳の時名古屋西區傳馬町の茶屋榊半の丁稚となつたが、慧敏の才は忽ち主人に見出され、弱冠にして店務に携はり同輩を驚かした、後主人は山尾金三郎氏と合資して洋反物を營むに當りて其代理を命せられ、又祖父江氏と榊半氏が物産組を起すに至り、爾來滿身の精根を盡して物産組の發展に努め今日に至つたのである。

君資性忍耐力強く、自己の所信に向つては萬難を排して其の勇を現し來れりと雖も、身を持する事常に恭謙、斯かもその功に誇るが如き事なきは眞に他をして敬虔の念を起さしむ、要するに君は立志傳中の人として確かに後進少壯實業家の範なるべきもの、其偉功は永遠に名古屋發展史に録せらるべき人である。

田上源太郎君

忌憚なく言はしむれば由來佐賀には人物が缺けてゐる、殊に土着の人物と來たら曉天の星よりも更に寥々たるものがある、而して茲に田上君の如き人物を見出すことは、萬緑叢中に紅一點を發見したるよりも目出たく且興味深いものである。

君が先づ現在掌つてゐる其事業から述べる、即ち株式會社朝日商會取締役、株式會社榮銀行監査役たる以外、佐賀セメント株式會社に大島貞七、伊丹誠一、大島小太郎、岡部忠太郎諸氏と共に取締役の椅子を占め、縦横の經綸、悉く一手に引受けて大車輪の活躍振を見せてゐる。

佐賀セメント會社は明治三十年の創立にして、資本金八十萬圓、爾來好評噴々たる縣下代表的の大

會社である、伊丹氏を社長とし監査役には深川喜次郎氏あるが、君の如きは創業以來の忠臣として效績の尤も顯著なる人である、同社が今も一割五分以上の好配當を示せるは論より證據で、總て是れ同君等の辣腕の致す處である。

然し先年不景氣の折には、可なりの難關に當つたが、資本が充分なので、辛うじて之に堪え得たのであるが、此間に處せる君の惡戰苦闘は一と通りのものでなかつた、而も景氣の挽回と共に、次第に面目を改めて、今日此の好況に到達せるは大に歡ぶべきである。

而も君は目から入つて鼻に抜けるといふ小賢い男ではない、至つて鷹揚であつて、其間に如何にも機敏な處がある、例は少し突飛であるが、今の野田大塊翁の如く、自らヌーボー式を發揮し乍ら其實内部に於ては水も洩さぬといふ策戰計劃を有してゐる人ではないが、君に於ても亦表面と内面とは一見非常に軒輊がある、君は實に商才に於ては寧ろ天才的である、而かも其明敏の判斷力に於ては事物の深底を貫徹するの概がある。

而も其意志に於ては眞摯にして着實、よく事業に處しても輕舉盲動をなすが如きことは、樂にしたいはごもない、實に事業を發展せしめ、事業の面目を維持するに於ては、適材此の上なき人物である吾人の君を稱し縣下唯一の人物とし、事業界亦稀に見るの士なりと稱する所以も茲にある。

君は明治四年三月二十八日を以て生る、田上徳十郎氏の長男である、夙に實業界に入りて活動を始め爾來大に活躍をなして今日に及んだのである。

年齢未だ四十有九、實業界に活動する人としては未だ少壯の部分で、これから大に腕前を發揮する處である、冗言のやうだが、歐洲戦線上の活動の士を見ても戦後の現在に見ても七十歳八十歳の高齡にありながら尙ほ少壯を凌駕する活躍振を見せてゐるものが多いから、是から見れば君の前途は洋々たる春の海の如しである、現在までの實際的鍊磨と圓熟せる思慮を以て、一段の活躍を實顯せられ、

産業界の爲め將た佐賀市の爲に、大に努力されん事を切望する。

長谷川糾七君

君は岐阜縣加茂郡下麻生の人、山口七兵衛氏の長男にして嘉永四年八月七日を以て生る、既に古稀を越した高齡であるが、而も鑿鑿として元氣壯者を凌ぐ活動振りは、蓋し君が如何に精力絶倫の人であるかを證すべきである。

尤も政治家であれ、實業家であれ、古來非凡の成功を遂げ絶大なる功績を印するの士は、必ず其處に凡庸の到底及ぶべからざる大精力を具有するは、幾多の實例に徴して皆然りである、君は即ち此超凡的精力を以つて誠心誠意、恪勤精勵遂に今日に至つたのである。

顧ふに人間活動の天地は縹緲として多趣多様である、然し君の如く材木業に身を起して今日の大成を誇り得る人は、蓋し其の類例を多く見ることは出来まい、而も君は此材木界にありて常に皇居の造營、宮邸の造營、官省の建築等に與りて其名聲を贏ち得てゐることは、君が活歴史の上に赫々たる光彩を點するものであるが一面又非常なる苦心を重ねてゐる事は明瞭である、我が國は開闢以來、皇室の尊嚴は絶對である、洵に神聖にして犯すべからざるものである、而して絶對尊敬であるべき皇居造營の衝に當つた君の心中は果して如何であつたらうか、蓋し思ひ半ばに過ぐるものがある、即ち君は自ら木曾山中を跋涉して數十人の人夫を督勵し、吟味に吟味を重ねて邦國唯一の良材を物色し、造營總裁三條公に謁見して漸く納材を許された、而も、之れに投じたる資は實に數十萬圓を算し、専ら「質」の優良のみに苦心したといふに至つては、君の敬虔なる態度と謹直なる忠誠や洵に奇特と推賞すべきである、爾來君は其功によりて皇室御用商を特許され、伊勢神宮、熱田神宮の御造營に當りても建築

に諸材木納付の御用命を受けた、君が光榮と満悦は蓋し是に過ぎたるものなかるべく、又家門のためにも名譽之れに過ぐるものはなからう、君は此榮譽ある御用命毎に、殆んど獻身的に全力を擧げて惜しむ處がなかつた、従つて、君は恂うした御用命がある毎に、朝廷から嘉賞を受けてゐる。かく名譽を博し得たる君は自然事業の發展ともなり君が斯界に於ける、多忙と繁昌は非常なるものであつた、又明治十六年三重縣廳の委囑を受けて大臺ヶ原山林を巡回し、營林事業に資する處も多かつたが、君の隠れたる功績は此一斑を以つて全豹を評すべきである。

其後君の活動振りは、意氣軒昂といつた風であつたが、益々斯界を震撼せしむる如き大規模によつて、事業の擴張を圖り、即ち大和の富豪土倉庄三郎氏が十數萬金を投じて其大山林を伐採した時も、之れを一手に買受けたものは君であつた、斯くて幸福は幸福を産み、機運に乗ずる處、何物をも止むる事は出来ないのは世態の實情である、順潮に立つた君は、此の大買収にも大成功した、而して二十七年大極殿の御造營に當り巨材良木の必要起るや君は機熟せりと斗り、猛然起つて其供給を請負ひ、短日月にして其功を納めた、即ち功によつて第四種賞牌を下賜されたのも此時である、君の得意や想ふべしである。

後君は商業の中心點なる名古屋に根據地を置いて、東京、大阪、桑名、箕島、新宮等に支店を設置し又、信濃、飛驒、駿河、三河、遠江、播磨、和歌山、紀伊等の諸國に山林を有し、大小の船舶十數隻を管理して愈々斯業の發展を圖つた、現に日本木業聯合協會副會長、名古屋木材株式會社社長、名古屋材木商同業組合副組長たると共に、名古屋市に參事會員、市會議員、商業會議所商業部長、工業部長たり、最近名古屋市々區改正委員會委員に選任され其名聲噴々たるものがある。

君や材木界に身を起して、今日の位置を築き謂ゆる功成り名遂げたる立場にありと雖も、終始一貫努力を生命として渝らざる處、洵に斯界稀に見るの士である、殊に皇居の造營、神宮の建營に貢獻せ

る偉勳は永久に朽つべきではない、切に君が前途の多幸を祈る。

倉知鐵吉君

君は現下中日實業株式會社副總裁の重任にあるの人、明治三年十二月を以て金澤市に生れ夙に聰明の譽があつた、二十七年帝國大學法科卒業後、内務省に入りて參事官となり、後公使館、外務省、農商務省、總監府書記官を経、累進して外務省政務局長となつた。

この政務局長在任中は君の最も得意時代であつて、且つ外交官としてその靈敏なる手腕を揮つた時代であつた、かの日英同盟、日佛協約、日露協商、日米協約等の條約改正、韓國併合、間島問題に關する諸問題の解決等、各種重大なる懸案は多く此間に起つたのであるが、君は政務局長として逐一之に關係し之を變理するの任に當つた、而して機智縱横なる敏腕は、克く處理の宜しきを得て、援群の功績を擧げた。

それより榮轉して外務次官に榮進し、次の大任大使を以て萬人に矚目せられたが、大正二年二月官を辭して了つた、仕官する事十有七年、かく將來の幸運を眼前にし乍ら、野に下つたのには何か理由がなくてはならぬ。

果然君の一見貴公子の瀟洒なる風姿は、實業界に現はれた、即ち中日實業會社の副總裁として、日支兩國紳士の推戴する所となつたのである。

同社は日支親善をその存立の第一要義とし、兩國の主要人物を重役として組織されて居る所謂合辦會社にして、普通の營利會社とはその趣を異にする國家的事業である、故に若しその人を得ざるか將たその處理を誤らんか、直に日支親善に大關係を及ぼすや必然である、然して君の如き人と爲り潤

達にして包容の氣宇大なる外交官出身の大手腕家をその副總裁に仰げるは、眞に理想的なるのみならず亦國家のため慶賀に堪えない次第である。

同會社の目下從事せる事業は、鑛山業、鐵鑛輸入、電燈事業、各種借款等にしてその經營も尋常一様でない事が察知される、然も社運の隆盛なる、君の手腕に俟つ所大なるべきを思はねばならぬ。

この外その姉妹會社たる新設東洋製鐵會社の取締役を兼ね、尙東洋鹽業、東洋運鑛、富寧製紙、中日銀行、金澤紡績等の各重役として經營の重きに任じ、今や財界の精英として其の名を中外に馳せて居る。

夫人は田中平八氏の愛嬢かつ子と呼び、一男四女を得て、家庭愈々豊福ならんとせしが、一昨々年不幸令室を亡うて以來君は孤獨の人となつて居る、年五十、體軀長大にして學止活潑、才智湧くが如き好男子である、吾人は邦家の爲め君の益々健在を祈らざるを得ない。

下阪藤太郎君

現今臺灣財界の雄鎮として能く斯界の平調圓滑を保持し、尙糖業界の驍將として群雄の間に一頭角を顯はしつゝあるは下阪藤太郎君其人である、君は目下大正生命保險株式會社取締役、東洋製糖株式會社社長、東洋海上保險株式會社取締役及び株式會社臺灣銀行監査役等の樞位に在り、而して其熾烈なる奮闘的態度を以て縱横劃策し、是が經營に任ずるの偉材は斯業界の注目する處にして、將來必ず臺灣を背負ひて立つべき大人物たるを期待されて居るのである。

君は福島縣の人、會津若松の士族下阪藤次郎氏の長男にして明治元年十月四日の出生である、夙に郷賢の業を卒へて東都に笈を負ひ、第一高等學校に入りて業成るや進んで帝國大學法科に籍を置き、

研鑽大に努め、雖て二十七年目出度卒業して法學士の稱號を受くるに至つた。

而して君は直ちに仕官して大藏省に入り、多年鍊磨の手腕を實地に試みたるが、其頭腦の明晰なると又精力主義的熱心とは特に同省内に名を高むるに至つた、次いで秋田縣收稅長、大藏省參事官、大藏省書記官と順次榮轉歴任して、中央財界の要衝に當つて畫策甚だ努めた、而も君は飽迄不言實行を主義とし無言の裡に着々と歩武を進めたるを以て數年ならずして地位急速に榮進し、三十二年には臺灣銀行創立委員を命ぜられ、次いで理事の要職に就き、副頭取兼總務部長となり、克く當時の頭取柳生一義氏を補佐して同行の發展に銳意心力を盡くした、所謂女房役としての萬全を期し、只管臺銀の内容改善と其充實を計つたのである、而して頭取柳生氏をして内顧の憂なからしめ、自由による積極的才幹を揮はしめたるものにして、臺灣銀行が今日の隆盛に置かるゝも實に君の力に俟つ處大なるものがあるのである。

斯くて君は南方財界の實權を掌握して聲名頗る高かりしが、東洋製糖が鈴木家の經營に移るに至るや、君は拔擢されて、淺田君の後任となり、現に社長として營々業務擴張の爲に意力を注いで居る、元來は法科の出身とて理財學には最新の訓練を経たれば、鑛鑛の術にも最も克く通じて居つた、故に糖業界に於ける經驗は最も乏しかりしに不拘、克く波瀾萬丈、惡戰苦闘の境地を超越して、巍然として斯界に重きをなすに至つた、是等は遺憾なく君の偉大なる才幹を證明するものである。

君體軀肥大にして容貌魁偉、見るからに堂々たる風姿は直觀的にその大人物たるを思はしめる、辯訥にして居常多くを語らざれ共、一度開口するや、滔々懸河の辯を以て對者に徹せしめずんば止まず然かも穩健にして論旨透明なる、思慮緻密にして先見の明ある等、衆人の驚嘆する處である。

君正に分別盛りの壯齡、今や事業界は面目を一新して到る處活動的の事業家の出現を希望せぬ處はない、活躍の舞臺は愈々廣く、前途爲すべき事業は多々之を有するのである、思ふに君が畢生の力を注

いで飛躍を試むる事業は是よりなるべく、將來刮目して見るべき大成功を爲すに至るは筆者の確信して之を疑はぬ所である。

岩井勝次郎君

君は現に關西實業界に錚々の名を謳はれ、斯界の重鎮として押しも押されぬ勢力を有して居る。其身を丹波の山奥より起して、今日に至るまで非常の辛苦艱難に堪え得たるの精神と、時勢に順應したる明敏なる商略とは遂に其大成を爲せし所以にして、今や我關西實業界の革新は君の如き人に依りて達成せらるべきである。

君が目下最も精力を傾注しつつあるは株式會社岩井商店の事業にして、愆は大正元年十二月二日君の一門及上級店員を糾合し資本金二百萬圓を以て設立したるもの、後幾許もなくして歐洲大戰の好機に際會し、君が商略又其當を得たりしを以て一舉にして莫大なる利益を收め、一躍一千萬圓の増資を爲すに至つたのである。君が養父より資金の貸與を受け獨立貿易業を開始したるは三十四歳の時にして、爾來十九年間、全生命を賭し心血を凝したる苦心經營の努力は、遂に酬むられて今日の成功となつたのである。

同社の本店は大阪市東區心齋橋筋北濱四丁目四十三番地に在り、而して東京、横濱、神戸、上海、紐育に支店を、小樽、福井、漢口、桑港、倫敦等に出張所を各設置して盛んに同方面に活躍せるのみならず、其營業に關係ある商品の改善進歩を圖らんが爲め、之れが製造を企及し、現に大阪鐵板製造株式會社内大阪纖維工業株式會社を始め日本曹達株式會社、關西ベイント株式會社、株式會社白金莫大小製造所等の事業をも經營し、多大の信用を博して居る、同店取扱品中の主なるものは輸入品とし

ては金物類、硝子板類、毛織物、綿織物、工業藥品、燐寸原料、肥料、穀物、麻、洋紙、製紙原料等輸出品に於ては天産物、油脂及原料、羽二重、綿織物、金物類、工業藥品、紙肥料、海産物、燐寸及原料、セルロイド、ペイント、材木及其製品等にして現今三井及高田商會を除くの外直輸出入商としては邦人中其比を見ざる位である、其穩健着實なる營業振りと、終始從業者と協力一致し、利害を共にして事に當るの高潔なる心事は、遂に幸福を生むに至つたのである。

君は丹波の國の人蔭山祐次郎氏の令弟にして、文久三年四月十一日を以て生れ、廿二年二月即ち二十七歳の時岩井文平の養子となり、翌二十三年十月家督を相續したのである、併も其生家は資産裕ならず、且性來虛弱なる君は十一歳迄藥餌に親しみ、十二歳の時には慈父に別れ、十三歳にして早く大阪に出て岩井文助方に奉公し、偶々先輩店員の一時に退店するに當りては君弱冠にして店務を雙肩に擔ひて刻苦精勵する等、具さに逆境の苦難を嘗めたるが其時流に投じたる商略、能く人の苦衷を察するの同情等は此間に於て育成せられたのである、加ふるに公共的精神の頗る發達せる人にして、嘗て日露戰後に際しては十萬金を獻じ、又祖先の追善記念として、有爲學究の小壯子弟を奨勵せんが爲めに巨財を惜まざりし等は其一例である、而かも斯かる際にも決して外部に顯はるゝ事を望まざるは、其精神の高雅なるを思ふべしである。

突如として勃發したる歐洲戰亂は、俄然として我實業界の自覺を促がし、延いて海外貿易は未曾有の活況を呈した、而も大戰終結と共に各國間に於てそが販路の開拓に激甚なる競争の開始せられんとするの秋に當つて、其確實なる地歩を占得せん爲には、常に商機を捉ふに敏なるのみならず、最も人格崇高なる事業家の指導に俟ざる得ない。

然るに岩井君の如き此兩面を具備せるの士が、關西に飛躍しつつあるのは實に天與の幸福とも謂ふべきか、我邦實業界の爲に大いに祝慶して可なりである。

君當年正に五十七歳、新進と云ふは敢えて當らざれども意氣壯者をも凌ぎ、峻烈なる手腕商才を持つて極力斯界に活躍しつゝあるは、遠からず斯界の趨勢を左右するの覇者たるべきを暗示す。

君は蒲柳の質なりと雖も、愈々多事多端ならんとする貿易界に在つて活潑々地の働きを示してゐる、其徹底的清澄なる人格に至つては多年參禪して内面的に生命を意義あらしめたる賜である、是れ吾人の君に對して崇拜措く能はざる所以である。

森 恪 君

隣邦支那は世界の大国である、其境域の廣大なること北米及び露西亞にも比すべく、國民は約四億の多きに達し、此處より生産する物産の多額なる事又諸物品の需要の旺盛なる事は眞に驚嘆に値ひするものあり、世界各國の人々が支那を目して地球上に於ける第一の製産地將た消費地と稱してゐるの故ありといはねばならぬ、然るに翻つて我國の對外交を見るに、其状態の不振實に慨嘆の限りである、別して彼の山東問題より延いて日貨排斥となり、今や支那全土を擧げてポイコットの渦紋に投せられんとしつゝある。

斯くの如き支那の現状は之れを東洋永遠の平和より見ても實に嘆息す可き現象であつて、日支親善唇齒輔車の關係を根本より破壊するものにして東洋人種の危機といはねばならぬ、斯くの如き日支國交の暗黒時代に於て、我國の支那に於ける事業家を紹介し之を品臨するは大いに必要なる事といはねばなるまい、而も我が對支事業界は人物拂底して寥々たるの觀を爲せるが、其間に介在して陸離たる異彩を放ち、潑刺たる手腕を發揮しつゝあるを森恪君と爲す。

森家は代々の徳川家の直參にして旗本に屬してゐたのであるが、有力なる家柄であつたため旗本八萬旗の中でも特に名聲を謳はれてゐた、君の嚴父は作太郎氏といつて、三田守勝氏の二男であつたが、故あつて同じ旗本の一人なる森氏に養はれ同家を嗣ぎ、遂に森姓を名乗るに至つた、長ずるに及び法學を究め辯護士となり、初め東京に於て開業し、後轉じて大阪に趣き、法曹界の人として名望一世に高かつた人である。

君は實に嚴父作太郎氏の在阪時代に生れたのである、時は明治十六年煤煙渦巻く浪華の地に呱呱の産聲を擧げ、幼少の頃既に東上して慶應義塾の幼稚舎に入り初等教育を享けた、君は其當時より頗る聰明にして頭腦明敏、一を聞いて十を悟るの才能を有し秀才の譽れが高がつた、小學教育を卒ゆると共に東京商工中學に入學し孜々として普通學を勉強し、在學五年芽出度同中學を卒業したのである。

三井物産會社は我邦最大の商事會社である、夙に支那貿易の有利なるに着眼し、大陸發展の順序として人材の養成に努むるに至つたのであるが、君は中學を卒ゆると共に直ちに三井物産會社に入り支那修學生として北京上海方面に派遣された、支那に渡航してよりの後の君の勉學研究は眞に目覺しきもので、寸陰をも惜みて語學の勉強に没頭し暇あれば必らず四百餘洲の山河を跋渉して具さに風俗、民度、慣習より商業状態まで餘す處なく視察し研究したのである。

業成るに及んで同會上海支店に入り店務に勉勵せしが、續いて湖南支店に轉任し幾程もなく遠く北米紐育支店に轉任を命ぜられた、此間君は大いに泰西新智識の吸收に努力したのであるが、三井物産の支那大陸の活動には是非共君の如き支那通の手腕家を必要とし、再び支那に歸り、新たに天津支店長の榮位に就任し、獨特の手腕を發揮して目覺しき活動を試みたのである、支那に於ける天津の位置は恰も我邦に於ける横濱ともいふ可き土地で、一國首都の關門を要扼するのみならず北方支那に於ける商業殷盛の地にして、又最も重要な土地とせられてゐる。

三井物産が此地の支店長として君を任命するに至つたのは實に異數なる拔擢といはねばならぬ、之

れを以つて見るも君が如何に支那に對する識見の深きと手腕の卓拔せるかを知るに足るであらう、然れども君は又他に志す處があつて、此天津支店長を最後として三井物産を去るに至つたのであるが、君が物産在職中日支經濟の提携に努力したる功績は、一々擧ぐるの繁に堪えない程であるが、今其一例を擧ぐれば中日實業株式會社の設立である。

中日實業會社は日支親善、支那事業開發の目的を以つて日支兩國の政界及び財界の有力者に依つて之れが創立を企畫さるゝに至つたものであるが、君は進んで此計畫に參與し頗る盡力する所ありしかば會社成立と共に取締役推選され、北京に駐在して支那方面の事務を擔當したのである、同會社創立の前後より君の努力に係る功勞は大小數ふるに遑あらざる程であるが、中にも彼の有名なる桃冲鐵山と我日本との關係を今日の如く密接ならしめたのは、主として君の貢獻に依るといつても敢へて不可はあるまい。

桃冲鐵山は安徽大平府繁昌縣管内に在つて、裕繁公司の權利に屬し支那第一流の有望なる鐵山と稱せられたるものである、而して、それより採掘せらるゝ礦物は中日實業會社に於て一手を以て買受けの契約を締結し、此鐵礦利用の必要よりして同會社の姉妹會社といふ可き東洋製鐵會社の實現をも見るに至りしは世人の夙に熟知せる處、同鐵山の如何に有望であるかといふ事は此一事を以て見ても明瞭なる事で、鐵礦缺乏の折柄同鐵山をして我邦に吸収する事を得たのは我邦に取つては非常なる大功績といはねばならぬ。

然るに君は今春に至り中日實業會社の取締役を辭し、爾來獨立の事務所を設け、専ら支那に對する一般投資事業に主力を注ぐに至つたのである、而して其取扱へる諸種の借款中吉林に於ける三百萬圓の森林借款の如きは其有名なるもの、一つであるが、今後更に成立を期待されてゐる大借款も決して尠くないこの事である、故に其支那財界に對する眞活動は寧ろ今後之れを見る可きであらう。

君が現在關係せる對支事業なるものを擧ぐれば先づ壽星製粉會社(在天津)東洋鹽業會社(在青島)上海印刷會社の各社長たるを始めとし、滿洲に於ては東洋炭礦會社(資本金三百萬圓)の取締役任じ、其他吉林に於ける製紙事業、長江沿岸に於ける幾多の礦業に關係を有する等、苟しくも支那に於ける事業といふ事業には、殆んど關係せざるなく頗る廣汎なる區域に及んで居る。

君は本年三十六の少壯、人生の花ともいふ可き不惑の齡にさへ猶且四年を除すの新進人物である、資性英敏豪放にして機略に富み經綸を有し、又堅忍不拔の意志は能く事業の達成を見れば止まざるの概あり、其手腕の卓越せる點に至つては孫子の所謂九變の利に通じて大國を伐つるの概を示すものである、其趣味としては支那事情の研究を第一とし、支那内地を旅行して前人未發の遺利を探索して之れが開發を以て任としてゐるのである、而も現時に於ける日支國交の状態を觀察するに、危き事累卵の如く一步誤らば深淵に至らんとする状態であるが、此時に於て君の如き有爲なる支那通の自重と奮闘とを祈りて止まないものである。

山岡國吉君

君の郷里は、我が對外貿易の先驅として往年泰西文明輸入の關門であつた長崎である、此の商業的土地より鎖國的の鹿兒島に移住し來つて、今日の地位と地盤とを築きあげた其努力と、奮闘とは尋常一様のものではない、殊に萬事保守的であると云はれた當時に、代議士にまで選舉せられた君は寧ろ奇蹟のやうな感がある。

君は元來移住者である、其土地には縁故の淺い人であつた、然し高邁崇高にして其人格に於ては何人も君に畏敬せぬものはなかつた、加ふるに學識あり卓見あり、而して圓滿なる社交とを有してゐた

から、現に他郷人の君が衆人より尊重敬慕せられるのも敢て偶然ではなかつた。君は安政三年九月、久松又右衛門の六男に生れ、明治八年三月兄平九郎氏の死後を襲ふて家督を相続し、長じて長崎の文部省設立の師範學校を卒業した、第二の國民を養成する初等教員として教鞭を執ることは、蓋し君の本志ではなかつた、旺盛なる向上心の若き脈管に躍動してゐた君は法律家たらんと志し、研學多年遂に辯護士試験に登第したのである、茲に於いて君は直ちに辯護士を開業し、後辯護士會長に推され法曹界に於ける君の聲望は並ぶものなかつた。

爾來君は鹿兒島市の爲めに將た縣の内外事業の爲めに具體的に貢獻した功績は、殆んど枚擧に遑ない程であるが、同時に君が聲名は齊しく縣の内外に認めらるゝやうになつた。

嘗ては市會議員として市政に參與し、將た議長としても二回其職にあつて克く市政刷新の爲めに盡瘁する所あつたが、一昨年後進の道を開くが爲めに其任を辭した、且つ萬瀬水力電氣株式會社社長に推されたることあり、又曩に鹿兒島市より推されて衆議院議員となり、日比谷議政壇上の人たりし等、皆君が多年の功績の賜である。

而して君が鹿兒島市の爲め、將又縣下の内外に就いて畫策計籌する處は常に積極的にして遠大であり、消極的なる脚下目前の事業の如きは、蓋し君の抱負と相去る事遠きものである。

君常に以らく『縣内の物産を縣外に盛んに輸出せねばならぬ、彼の薩摩杉の如きは電柱用として、支那方面にも其需要が夥多しいが、濫伐の結果、甚だしく其數を減じた、瓶島の百合は殆んど日本第一である、製茶の如きも暖國たる鹿兒島には最も適してゐる、其の他海産物として鱒、松魚、鱈等非常に有望である、然るに夫等の海産物は多くは長崎商人によつて輸出されてゐる、鹿兒島人が自ら海外輸出を成さねば徒らに現状維持に止つて、發展は愚か却つて遂に疲弊の結果を見るであらう』と、實に君の議論は適切にして、最も妥當を得たるものであつた、本縣の如くに幾多自然の恩恵的産物の

多い所において、其自然的産物の保護、増殖によつて盛んに輸出すべきで、是に越したる財源はないのである、斯くして本縣の發展は愈々の確に、且つ尨大されてゆくのである。

君は實に鹿兒島縣に於ける一大先覺者であり、木鐸である、現在萬瀬水力電氣株式會社の取締役として活躍し、大に社運の發展向上に努力してゐるのであるが、今後同縣下に開拓すべき餘地尙渺しとせぬから、更に馬首を躍らして他面にも新天地を展開せん事を切望して止まぬ、是れひとり鹿兒島の爲めのみではない將に邦家の爲めである、希くは自重加餐を祈る。

樋口達兵衛君

晩近、滔々として打押せ來つた泰西文明の進浸は洵に決河の勢ひあり、僅々數十年を出でずして日本文明の體系は寧ろ悉く西洋文明の糟粕を嘗め盡した感がある、然しそれと共に輕躁浮華、外見裝飾といふ、鑿鑿すべき惡傾向をも招徠し來つて、今日世間は擧つて内實空虚、粉飾の不具的文明を建設せんとし、人心は亦この不具的文明に羅致せられて、堅實、眞摯の風は地を拂ふて去らむとするの傾向あるは、洵に識者の以て憂ふべき惡現象とする所である。

而して、茲に樋口達兵衛君の如き、堅實正直の人を見るは吾人の最も意を強ふする處、爰に同氏の爲人を廣く社會に紹介して、世人と共に深き私淑を成さんとするものである。

樋口君は今の下岡憲政會總務、幣原外務次官、大藤工學博士と共に第三高等學校に學窓を同じうしたが、帝大を出る時も首席優等の成績を以て卒業した、而も卒業後身分を落して、横濱商業學校某氏の人格を慕ひ態々同校に入學し、同氏の實際的人格に接して、大に修養を成したといふから、此の一事を聞いた丈でも、既に君が人格の人であり、名を捨て、實を取る誠心誠意の特志家であることは立

派に證明される、昔から一事は萬事だといふ、大學の門を優等に卒業しながらずつと校格の低い他校に態々舞ひ戻つて、専ら人格向上のための活學を成したなどは逆も普通凡庸の成し得ざる處である。かくて君は學校生活を終へると實業界に發足したのが、即ち貿易事業であつた、偶々家事の碍ぐる處となり、嚴父の懇請によりて歸郷し、大に腕前を見せて父のためにも劃策する處があつた、而して明治廿八年に至り篠山町の共同貯蓄銀行に入つて、嚴父が頭取の下に大に働き青年實業家として大に囑望される處があつた。

而も當地に於ける小銀行を整理して、株式會社百三十七銀行を設立し、金融機關の使命を全うし其効績によりて、専務取締役として現在に及んでゐる、常に内容の充實と主義の堅實を以て象徴する君であるから、同行の信用の如きは牢乎として抜くべからざる地位を築いてゐると共に、同行が一面同地方の産業上に裨益を興へてゐることも亦多大である。

更に同行の盛運は兵庫縣氷上郡柏原町、京都府下綾部町、同福知山に支店を設け、何れも國庫事務を取扱ふの外日本興業銀行の代理店事務を取扱ひ、大正五年篠山町南丹銀行を買收して戦後の經濟界に備へんとし、既に資本の増加を成すべく其筋に認可申請中である、寔に同行の信望と實力とは思ひ知るべきである、従つて今や阪鶴沿線中の有樞銀行として目せられるに至り、前途は洋々たる春の海の如き感あるは、均しく君が努力と快手腕の具體化である。

前にも謂つたように、君は飽くまで『實際の力』を欲して空虚な戸前口のみを擴ひことは嫌惡する處であるから、自ら韜晦して表さぬけれども、實際の資財なども優に一頭地を抜いて、年々歳々隆昌の歩を高めつゝある。

而も君が精力の絶倫と志操の堅實とは、君の終始一貫して渝らざる銀行業務の熱心に見ても確證するに足る、即ち日々銀行に出勤して、行員給仕等が夜業を爲す時は、君も亦夜業を爲すなどの勤務振

は、逆も君でなければ出来ぬ辛棒である。

而も一方に於ては多紀郡參事會員、町會議員學務委員、多岐郡教育會長、鳳鳴義塾商議員、所得稅營業稅調査委員、相續稅審査委員、篠山實業協會々頭其他の名譽職、公共團體の理事委員等に擧げらるゝ其熱誠は、蓋し郡民の一日も忘るゝことの出来ぬ處である。

かくて君が輿望と實勢力とは官民上下を通じて殆ど高潮に達したので、幾度か國會議員の候補者として推舉を受けたるも、君は斷然之を受けず、専ら百三十七銀行の向上發展と斯郡の公利民福のために全力を盡して顧みざる等、吾人は實に君が尊崇にして、質朴實直なる其高邁の人格を景慕して止まぬものである、年五十三。

上西龜之助君

神戸の海運界は時局以來破天荒の活況を呈し、這間の劇烈なる競争的活動は或る意味に於いて人物試験とも見られ、斯界の興亡浮沈に對する慶吊の念交々起ると共に、其人物の眞價は遺憾なく捕捉する事を得た、即ち茲に神戸海運界の花形、上西龜之助君を拉し來つたのも亦この意味に外ならぬ。

君は播州岩見港の素封家道明氏の四男にして、慶應二年に生る、濶達の氣性は少年時代から腕白者として持て餘されたものであつた、長じて中學に入りしも嚴父の計に會し半途退學を餘儀なくせられたが、躍々たる青雲の志抑え難く、終に十八歳の時郷里を出で、遠く東都に奔つた、而して君は獨立獨歩、鹽を背めても苦學力行せんと決意し、實兄の友人を介して國許へ事情を懇えて許容を乞ふたのである、素より吉報を得ようとは思ひ設けなかつたので、自分では宿志を果さない迄は、石に嚙り附いても東京は離れまいと深く期する處があつた、然るに家兄より情を罩めた書面に添ひて若干の學費

金を送つて呉れたので、有聲氣の勝れた腕白少年も、男泣きに咽いて遙かに家兄の厚情に感謝する所あつた、斯くて君は進文學舎に學び、更に東京英語學校に轉じ校長杉浦重剛の傑出したる人格に深く私淑する所ありしが、後感する所あり去つて福澤諭吉翁の門に學んだ、翁は新日本の黎明の幕を切り落して今日の文化を致した一代の巨人であつたから、自づと君の思想も感化さるゝ所あり、往時の腕白者の儼もなく實踐躬行の人になつた。

而して同校卒業に間もない頃、リカードの投機論を讀んで大に衝動を與へられ、實兄に強要して若干の資財を貰ひ兜町で仲買を始めたが、何を云うても炎々たる活火に包まれてゐた血氣盛りであり、且所思は飽までも遂行せずんば止まぬ氣象とて、手に唾して起つ所あつたが、時利あらず忽ち一敗地に塗るゝの不幸に際會したので、成功を他日に期し孤影孑然として郷里に屈するの止むなきに至つた、然るに君は神戸にある同窓久原久之助氏を森村組支店に訪ねて會はず、歸途摩耶山に登り山上に於いて弘法大師の偉業と荒廢せる大伽藍を仰望して、胸中深く感ずる所あつた。

其後後藤勝造氏の紹介を以つて船舶界の俠傑佐藤勇太郎氏と相知り、肝膽相照すること十年、既に摩耶山上に於いて一道の靈光に接せる君は、涙の經驗を積み、汗と血の健闘に生きて益々精神的領分を開拓することに努めた、三十七年佐藤氏の推舉を以て廣海商會に入り、居ること一年、恰かも海運界の盛時で將に張翼の時代なりしにも拘らず、君ひとり自重してこの好機會を白眼し私かに之を他日に期した、而して後、君は獨立して店舗を開き、次いで勝田銀次郎氏と協同して阜月商會を起し、爰に始めて洶湧澎湃たる時勢の波を蹴つて海運界に乗り出したのである、斯くて漸く基礎を固め得たりしを以て、同商會解散後も阜月丸を持船として縦横に活躍し、遂にその目的を達して今日の聲望と地位とを贏ち得るに至つたものである、現に神戸商船株式會社監査役として、大に異彩を放てる經營振りを示して居る。

君の、世の俗人輩と異なる所は、何物を以ても狂くべからざる勁烈なる氣魄を有してゐる事である、我志は石に非ず、轉ばすべからず、席に非ず、捲くべからざるてふ牢乎たる其主義主張である、故に己が主義として容るゝ能はざるものに對しては、秋水以て兩斷する底の、何の顧慮も躊躇もなく斷々乎として其所信を執行する態度は、偶々世に誤られて偏狹と誹られ、變物と評せられてゐる。

君嘗て、或人が逐鹿場裏に打つて出でんとして、其運動費の借用を申込まれた時、『政界の中心人物たらず、將た主義主張なく當選したりとて何かせん、先祖傳來の資産を蕩盡し尙ほ其上に借財して迄中原の鹿を争ふは愚の骨頂ならずや、』との善罵を以て挨拶に替へたりと云ふ、君亦常に『我が嫌ひ生臭坊主デモ學者政治を飯の種にする奴』と駄句つて、深く世の賸々者流を警むる所あつた、即ち君の躍如たる面目を窺ふことが出来やう。

君は大兵肥満なれども、赭顏童眼にして福相を湛え人を魅する優しみを持つてゐる、假令ば幽邃の裡紫翠瀾らんとする遠山の景とも云ふべきか、四邊一帶模糊たる紫煙の立罩めたる南畫の趣あり、若し之に薪を荷へる馬を曳き行く馬子を配せば、情味更に津々、親しく君に接見せし人々は正に如斯き情感を抱かぬはない。

而して君は佛門に歸依する所深く、處世の箴を此處に捉り、一切の應用は此處より出發して居る、而して宗教的信念に生くることが何よりの快味と悠暢とを感得するらしく、迸り出づるものは皆火の如き熾烈たる活動と不斷の努力である。世に感激なく自覺なき人程憐むべきものはない、又異常なる感激に遭ふて心機一轉し自覺したるもの程人生に於ける尊い價値を有するものはない、君は幼時早くこの洗禮を受け、時勢を脱却したる主義を以て終始する事が出来た、君の無爲にして人を化する底の徳望は自然に君の内面生活に於いて養成されたものであらう、かるが故に先づ君の趣味としては骨董や盆栽も弄らぬではない、又酒盃にも親しむけれども、而も淫せず、主として物慾を離れ精神的に這間

に樂地を發見して慰むる人である。

我が海運界の寵兒上西龜之助君、希くは忠實なる主義主張の下に飽く迄その鍛へ上げたる人格を以つて、斯界の爲め、將た實業界の爲め大に革新的努力せられんことを吾人は望むものである。

白石元次郎君

君は帝都の南西、芝區三田功運町に宏大なる邸宅を有し、日本鋼管會社及び電氣製鐵會社の社長を始めとして、淺野晝夜銀行、日本晝夜貯蓄銀行各頭取、東洋汽船會社、淺野セメント、日本エナメル、淺野同族、淺野造船、東海鋼業、大日本自轉車、中央製鐵等の各取締役、大島製鋼、日支炭礦汽船、帝國蓄電池外十數ヶ所の會社の重役を勤め、其雄名噴々として財界に普き人である、其關係事業が明示する通り、君は淺野家との關係非常に深く、總一郎翁の股肱として明治二十五年來氏と共に各種の事業に携つて來た人である。

君は新潟縣頸城郡高田の人、前山孫九郎氏の次男として慶應三年七月に生れた、拾二歳の時宮城縣石巻なる叔父白石武兵衛君の養子となり、爾來現姓を名乗るに至つたが、思ふに君は北上川の河口から澎湃たる太平洋の怒濤を眺めた時、人知れぬ大自然の力に打たれたのであらう、さうして其雄大な其勇ましい自然の光景に無限の刺戟と無限の鞭撻とを受けたであらう、君の全身に漲る躍々たる活力と驚くべき其精力とは、この時に早く啼くまれたに違いない。

志を起して十七年大學豫備門に入つた君は、二十五年無事帝大法科を卒業したが、水野鍊太郎、福原謙二郎、青木菊雄、下破彦磨、山座圓次郎、正木直彦、平岡定太郎、北里裘袈男の諸氏は、皆此時の同期生である。

君は卒業後直ちに實業家たるべく淺野總一郎氏の商店に入つた、間もなく君の手腕は認められて石油部の支配人及び淺野翁の秘書役となつた、而して在勤中翁は君の性格と忠勤振りを深く見込み、其將來を囑目して娶すに二女まん子を以てした、之れ明治二十八年で、君が今日あるの發端である。同年東洋汽船の創立せらるゝや、君は選ばれて其支配人となり、更に三十六年常務取締役に推され四十三年迄及んだのであるが、此間君は北米、南米、歐洲にも赴き、又桑港支店長たりしこともあつて深く世界の海運業の研究にも没頭したものである。

世人の知る如く三十九年より四十二年頃にかけて、我海運界は非常の悲境時代であつた、獨り東洋汽船のみこの影響に超越たる事能はず、四十一年下半年より四十三年下半年迄は、毎年無配當の有様で其上巨額の缺損を生じて殆んど安危存亡の危機に瀕したので、世間からは今にも瓦解するが如くに噂せらるゝに至つた、されば淺野翁を始めとして、當面の責任者たる白石君の苦衷は並大抵のものではなかつた、若しこの危機に際して淺野翁の膽略と、白石君の果斷周到なる畫策を得なかつたならば、同社は今日の隆盛、否存在をも完くすることは出来なかつたであらう。

斯くて四十五年海運界の趨勢漸く持ち直して東洋汽船も亦漸次好況を呈するや、君は製鋼専門家として有名なる工學博士今泉嘉一郎氏と共同して、資本金二百萬圓を以て日本鋼管會社を創立した、是れ君の獨立事業を開始した第一歩であつた、其業績を見るに初め二期は經營難の爲め缺損を生じたも、大正四年よりは時局の影響を受け俄然として好況に向ひ、翌五年五百萬圓に、次いで大正七年二月一千六百萬圓に増資し、尙現在の勢を以てすれば近き將來の内には三四千萬圓の増資をしよう云ふ素晴らしい景況である、今大正七年度下半年期の成績を見るに、當期利益金は四百八十九萬一千四百七十二圓餘を算し、それより諸機械建物償却金、及び社員恩給基金、職工救恤基金を差引いた純利益金三百七十四萬一千四百七十二圓餘に及び、株主配當は特別配當共に五割の高率を示し、後期に一百六

十七萬五千三百六十圓餘を繰越してゐる、以て其盛況を察知すべきである。

事業の内容を爰に詳記する餘裕はないが、要するに同社は吉野大峰、丹波福知山等の各鑛山を買収し、船舶の自營、硫化鐵鑛精練所大阪工場の建設、瑞典エレクトロメタル會社より東洋に於ける特許權を獲得せるスポンジアインの製造、鐵板工場新設及び平爐増設の計畫の如きは、何れも鋼管其他鐵鋼に依る各種製品に止らず、更に一步進んでは原料の獨立及び製鋼事業に對する大抱負の一般を語るものであつて、聞く處によれば同社一ヶ年の製鋼能力は遠からず十萬噸に達すべき豫定であるといふ、民間最大の製鋼會社を以て目せらるる又所以ある哉である、若し夫れ其設備の完全なるを、其事業の基礎堅實にして大規模なるは敢て贅言を述べる迄もあるまい、即ち萬人の矚目するが如く同社は近き將來に於て必ずや一大活躍を遂げて世界に其存在をより確實にするのであらう。

君は稀に見る濃厚な謙遜家で決して自ら自己の功名を矜る如き事はない、而して其精力の絶倫、其頭腦の明晰、其經綸の深き緻密さは、縦横八面、行く處として可ならざるなき手腕と相俟つて、燦爛たる光輝を放つてゐる、日本工業的地位が更に一層緊切を加へ來れる現下、君の如き事業家の我國にあることを吾人は心強しとするものである。

小林作五郎君

九州地方の郡村にはよく、昔の豪士或は庄屋等が今日酒屋とか蠟屋とか、大地主とかいふ姿に成變つて居るもの多く、到る處に唐鳩の寄りつくやうな大きな城廓然とした舊家を見受ける、由來斯かる舊家には一段傑出した惻愾な世嗣に非ずんば、多くは平々凡々たる所謂旦那株のみが輩出する、併し甚六でも世襲の家業を何うにか斯うにか行つてのけて來た昔なら知らず、現在では目醒めたる世界と

して、生氣潑瀾たる活動家を要する時代に推移してゐる、爰に叙せんとする小林作五郎氏は實にこの舊家に人となり今將に耳順を越ゆる四の老齡にあるが、活氣横溢、矍鑠として猶は壯者を凌ぐ活動家である。

君は福岡縣の人先代作五郎氏の二男として、安政三年四月縣下粕屋村宇美村に生る、世々酒造を業とし彼の芳醇天下に鳴る『萬代』は、實に同家醸造の銘酒である、資性謹嚴、威儀悠揚として迫らず眞に長者の風を備へたる地方切つての名望家である。

君が事業に對する努力と成功の第一歩は、世襲の業たる酒造に初まり夙に斯業を繼承し、未明より夜半迄火入の具合、麴の點檢等殆んど連夜徹宵の辛苦を積みたる並々ならぬ多年の刻苦精勵と、深遠なる學理應用の結果、君が醸造の妙技殊に冴えて銘酒『萬代』の名は天下に轟くに至り、各地の博覽會品評會等に出品の都度金銀賞盃其他の賞牌を受けし事數知れず、致富年と共に増大したのである。

君は酒造家の大成を期せんには、同業者が宜しく協同一致して根本的改醸を實行するの外なきを認め、明治二十二年九月縣下酒造組合の組織せらるゝや推されて其組合長となりしが、組合設立の目的たるや當に醸造法の改良進歩のみならず、營業上の利益増進、販路擴張及び弊害の矯正等、同業者の眼前に横はる緊急重要な問題を研究するにありとなし、挺身自ら進んで乞ふて縣吏となり、兵庫大阪愛知地方に出張して親しく醸造法を視察し、大に得る所あり歸來その復命を果すや直に職を辭し、縣下同業者の爲めに其見聞録を印刷して配布し、醸造の改良急務なる所以を鼓吹唱導する所あつた、爾來幾多の失敗を重ね巨資を蕩盡するも、屈せず撓ゆまず、苦心慘愴遂に成功の果を結ぶに至つた、其識見其熱誠、而して難に處して牢固たる眞に驚嘆に値するものがあつた、而も年を重ねると共に益々醸造の改善に努力し、三十七年には更に實驗室を設けて技術員を常置し、醱酵等は凡て分析及び細菌試験を行ひ學理の應用によりて醸造上に改善を加へた、又四十四年陸軍特別大演習の際には實業御獎

勵の思召により特に勅使御差遣の上御買上げの光榮を賜り、次いで日露、日獨兩戰役の際には軍用として千數百石を買上げらるゝ、等重々の名譽に浴し、従つて其聲價も亦頓に著聞し、江湖の需要は一層増大するに至つた。

説き來る所是れ、君が酒造に資せる其斷片を語るに過ぎない、而して君が曾て歴任したる要職を列記すると殆んど枚擧に遑ない程である、即ち四十一年來の主なるものとしては全國酒造大會副會長、日本大博覽會評議員、福岡稅務署管内營業稅審查委員等にして、現在に於ては全國酒造組合聯合會長、九州電燈鐵道株式會社、筑前參宮鐵道株式會社、福岡縣實業團體聯合會長等を兼ね、我が產業界其他公共團體の爲めに日本火災保險株式會社監査役、福岡縣實業團體聯合會長等を兼ね、我が產業界其他公共團體の爲めに大に盡瘁するところあつた、特に君の爲めに大書すべきは、大正七年四月福岡市に開かれた福岡縣實業團主催の九州沖繩物産共進會の事業で、之が會長に推され、官民と一致協同して努力せる其功は、當時如何に共進會の盛大なりしかを想察しても之を首肯することが出來よう。

君は老來益々意氣旺んに、壯者を凌ぐの概あり、凡て事に當るや實踐躬行して些の輕浮なく、德望風を望んで集り人皆進んで君の下に使はるゝを喜ぶ有様である、君資性温厚寡黙の君子なりと雖も、時に臨みて眠獅の決然と起つが如く、官憲の前と雖も敢て膝を枉げず、斷々乎として其の所信を吐露し、無告の爲めに身を殺して仁に出づることあるを以て、人君を稱へて大義人となせり、其仁俠實に義民佐倉宗吾を髣髴たらしむるものがある。

嗚呼君の德望は靡然として地方に布き、事業の治績燦として輝く、吾人は君に尙多くの事業的努力を望むと共に、邦家の爲め益々健在ならん事を祈るものである。

宮本甚七君

静岡縣の地たるや殖産事業の發達したる點よりすれば、恐らく東海道隨一の雄縣と稱しても敢へて不可であるまい、地勢は富士山麓一帯を別として概ね平坦にして東方は一面に太平洋に臨み、産業の興隆せる事は我邦有數の縣下と爲すのである、殊に茶業に至りては本邦第一の聲望を擅いまゝにして内地一般に供給するのみならず、遠く北米方面より南洋の邊に至るまで輸出を試み、國益を増進せしむる事多大なるものがあると云はれてゐる。

斯の如き土地にありて有爲なる實業家を輩出する事は決して故なき事ではない、即ち吾人が之より紹介の筆を揮はんとする宮本甚七君の如きは其一人である、有爲なる人材を出す事を以て名ある静岡縣にありても、君の如きは確に其白眉とも云ふ可く、斯界唯一人の名を擅にしてゐるのである。

君は静岡縣濱松市田町の人、宮本寅藏氏の長男として文久三年十一月を以て呱呱の聲を上げたのである、濱松の地たるや濱名湖の附近に位し、風光の明媚なる事我國有數の勝地にして、又商業の殷盛なる事縣下に冠たるの有様であるが、君の高潔なる人格も亦此自然に依つて涵養せられ、其卓拔なる商才は此潑瀾たる商業地に依つて哺育せられたのである、君は幼少の頃より聰明にして俊敏一を聞いて十を悟るの才能は度々大人をも驚かし、後年の大成を思はしめた程である。

其後長するに及んで家業に従ひ、明治十五年九月に家督を相續し孜孜として自己經營の事業に没頭し倦む事知らず、其年ならずして家産を増進せしめ名聲を發揚するに至つたのである、而して現在に於ける君の位置は實に堂々たるものにして静岡縣下の實業界は洵に多士濟々たるの觀ありと雖も、

能く君と比儔し得るものは尠ないのである、其關係會社は頗る多數に上れるが今是を列記すれば日本形染株式會社々々長、日本樂器株式會社、濱松紡績株式會社各取締役、濱松鐵道株式會社、旭織布株式會社各監査役等にして、此等の關係事業中に於て最も有望にして君が最も力を盡しつゝあるは日本形染株式會社と爲すのである、同社は現在君が社長として有らん限りの精力を傾倒し經營されつゝあるものにして、其成績又頗る良好、遙かに同業者を壓倒し斯界に於て獨歩の地位を占有せんとしつゝあるのである、其創立は古くして明治三十三年四月資本金十二萬圓を以て設立せられたるものなるが、現在に於ては増資に次ぐに増資を以てし、遂に百五十萬圓の大會社と爲るに至つたのである。

君の經營せる商店は丸三呉服店と稱し濱松市田町の一角に堂々たる店舗を構へ盛んに營業に従事されてゐるのである、本店は君の子息伊兵衛君主として經營の衝に當り店員數十名を使役し、同地第一流の呉服店の名を擅にしてゐるのである、又丸三支店は同市鍛冶町に有り、洋物雜貨の販賣を主とし支配人越川慶次郎君をして専ら同所を擔當せしめられ、之れ又濱町第一洋品店として名聲を擧げつゝあるのである、君は斯の如く諸會社の重役として將た自家の經營に没頭して寸暇もなき身であり乍ら公共事業に盡瘁する事多大なるものにして、現在濱松商業會議所副會頭として同市商業界の事に奔走し、又濱松市會議員の一人として市政の爲めに盡力されてゐる。

君の住宅は濱松城外の邊にありて構造壯大、其庭園は廣大にして約二千坪にも餘り、樹木は鬱蒼として美やましむる程である、君は實業家として俗事に奔走する半面又趣味の人として知られ、繪畫其他美術に關る鑑賞眼を有し、竹内栖風、今尾景年、山元春舉其他當代の諸畫伯と交遊深く、大家の畫幅を藏する事は勿論であるが、特に栖風の畫風を愛し其畫幅を所藏する事數十幅の多きに上るとの事である、之れを以て見ても君が功利一點張りの實業家ではなくして、趣味の人であると云ふ事を知るに足るのではないか。

さしも猛烈を極めし歐洲の大戦亂もカイセルの屈服に依りて芽出度平和に歸し、今後の世界は擧げて鐵火の實彈戰より牙籌の經濟戰に入らんとし、歐米の列強は先きを争ふて東洋の天地に殺到し、商戰は之より益々盛んならんとするの狀勢を示してゐるが、斯る時代に際し君の如き勇敢にして達識、加ふるに巨大なる資産を有する事業家の存在する事は大いなる強味であると云はねばならぬ、吾人は最後擲筆に際し切に其の自重と自愛を祈りて止まないものである。

鈴木良一君

君は野州の人、文久二年五月九日を以て栃木縣鹽谷郡熱田村に生る、彼の有名なる鈴木重清翁は即ち其嚴父である、今君を紹介する前提として嚴父重清翁の人物を語る事にする。

今を去ること約七八十年前、當時の鹽谷郡飯室村は有名なる天明の饑饉以來、打續く天變地異の禍する所となり、美田は悉く荒蕪して耕す能はず、産穀また著しく減少し、之を業とせる村民は流離四散し、其悲惨なる状態は轉た凄愴を極め、人をして救濟の至難事なるを思はしむるものがあつた。

然るに當時名主役たりし重清翁は、遙に相州小田原に在る二宮尊徳翁の事蹟を聞いて大に發奮する所あり、自ら居村の恢復を計るべく、代官眞岡支配所に其救助を請ひ、且つ二宮翁の門人たる吉良八郎氏の指導を受け、率先して顛瀾を既倒に回さんとし、臥薪嘗膽晝夜の別なく東奔西走して開墾に努力した、而して其費用を節約する爲めには遙々加賀、越後等より人夫を誘致して之に當て、或は農期閑散時を利用して他村より勞賃の廉なる勞働者を使用する等、凡ゆる智囊を絞り銳意劃策し、一心に村落の恢復に力めたる結果、漸く其田畑に青色を認むる事が出来て、村人初めて愁眉を開くことが出

來た、茲に於て曾て郷村を離散したる人々も追々歸來し、其後數年ならずして舊態に復するを得、戸數も三十餘名に達し、其耕地は約七八十町歩に餘り、共有金穀の貯蓄は一萬餘圓、田畑二三町歩に上り、交通排水到らざる處なく、其功特に著しいものがあつた、然も開墾の成田は自家先祖傳來の分八九町歩は自己の有なるも、他は悉く二十七八戸の來住者に分配し各戸平等の所有としたが、今日に於ては多年の苦心が一農村として相當の生計を立たしめ、他町村に土地等を所有する者過半に及んで居るのは、總て是れ重清翁の偉大なる治蹟の實賜と言はねばならぬ。

斯くの如き俠人重清翁の血を享けて富貴の家庭に生れた君は、襁褓の中より乃父の努力を目のあたりに見て來た必然的に、大なる感化を蒙つて自ら群童と異なる處があつた、幼時は親しく鋤を採り土を運び營々として家業に勵み、乃父の成業に與つて大に力があつた、然し乍ら君は徒に一勞働者となつて終始しやうと云ふ心はなかつた、炎々たる功名の念は瞬時も忘るゝ時なく、終日の勞働に綿の如く疲れたる身を以つて刻苦精勵、讀書に屢々夜を徹することがあつたと云ふ、爾く君の着實にして勤勉なる、全く農村子弟の好模範とも稱すべきであつた、斯くて炎熱灼くが如き酷暑の候、寒風肌を劈く極寒の日も君が爲めには良き試金石となり、この試練を経るに従つて君の意志は鐵心石腸の強固なるものとなつた、陽氣の發する所金石も亦透す、精神一到何事か成らざらんとは、蓋し君が座右銘であつた。

明治二十一年乃父の歿すると共に家督を相續して、肥料商を營むに至つた、而かも薄利に販賣せんが爲めには自己の勞力を以つて之を補ひ、或は現金購入を以つて安價に仕入れる等、昂めて其費費を節約して薄利多賣の方針を以つて營業上の主義としたれば、需要者の信用を増し家運日に盛大に赴き次いで明治二十五年人造肥料の有効なるを知り大に之が販賣に努めて地方の農家に一大福利を與へ、爾來其農産物は日々に増加しつゝあるは亦君が彼地に人造肥料の適切なるを教示し之が供給に努力せ

る所以に外ならないのである。

明治三十一年地方の有力者協力して株式會社喜連川銀行創立の擧あるや、君は親しく其衝に當り日夜東西を奔走して盡力する所あり、遂に翌三十二年四月其成立を見るに至るや、選ばれて其取締役となり、爾來二十有餘年間常に其重職に在りて只管行運の進展發達に盡す所があつた、従つて營業は日々隆盛に赴き地方銀行として相當の成績を收め、即ち資本金三十萬圓に對して年壹割てふ好成绩を擧げつゝあるは、亦以つて君の手腕の凡ならざるを證左するものではあるまいか、近くは大正四五年の交、鹽那電氣株式會社が現社長若松五郎平氏其他の有志の盡力にて二三の會社と合併成立するに當り君亦其取締役と爲り社長を輔佐して社運の發展に努め、今や資本金七十五萬圓を抱擁して栃木縣下に於ては下野電力會社に次ぐの大會社として盛名を博し、那須鹽谷兩郡を供給區域として相當の業績を擧げつゝあるもの、亦君の明智に俟つ所大なるものがあるのである。

由來君の性格は摯實堅實にして、敢て輕浮なる時代の惡風に染まず、飽く迄自己の所信に向つて着實なる手段を執るは、直ちに事業の上にも現はれ、例せば銀行に於て貸出、回收等に違算なく、行運益々隆盛に行ひつゝあるのを見ても、君の人物を窺ふに足るべく、亦近時財界の一般的變調に對して細心の注意を以つて進みつゝありと云へば、其前途の如きは何等憂ふる所無きは勿論、君の不斷の努力と共に益々健全なる發達を見んことは、蓋し當然の事と云ふべきであらう、君や尙ほ春秋なしとせず、自重加餐永へに立志傳中の人として後進に其範を示されんことを望んで止まざる者である。

杉本音吉君

臺灣南部に於ける有数の運送業者として、打狗の大阪組と云へば誰知らぬものはない、否や打狗の親分としても大阪組經營者たる杉本音吉君の名を逸する譯にゆかぬであらう、それ位君の聲名は著聞されてゐる、而も今日の名聲を贏ち得るに至れる迄の所謂苦勞は、決して尋常一様の徑路でなかつた事は云ふ迄もない、渡臺爰に二十有餘年、酷熱と闘ひ炎暑に苦められ、凡ゆる辛酸の間に處し、倦まず、撓ゆまず營々として叩きあげた、即ち努力の實であつた。

君は大阪府下南河内郡の人である、明治二十九年春未だ寒き三月十六日、股肱の若者六名を具して渡臺した、其當時は領臺未だ間もなかつた事でもあり、土匪到る所に蜂起して危険極りなかつたが、虎穴に入らずんば天下何事をも爲し得ずと、君深く期する處あり壯心躍々として瘴煙蠻霧の地に航したのである、是れ君が臺灣に足を印した最初であり、且つ君をして今日あらしめた發端であつた。

君が渡臺の目的は基隆で仲間の寄場を開く考へであつたが、當時既に基隆組と上榮組と云ふ二ヶ所の寄場が成立つてあつたので、自己の立場を開拓するの不利を覺り、暫らく翱翔の翼を收め、基隆組へ若者を預け自ら同組の後見役として種々劃策する所あつた、然るに基隆組と上榮組は相拮抗して下らず、常に紛争絶ゆる時がなかつたので、居ること四ヶ月、去つて淡水に乗込み自から寄場を開業した、其頃支那より入港した福清丸と云ふ船が卑南行積荷の爲め碇泊中、君も其船内の荷役に従事したが、船長の愛育してゐる小猿に戯かつたのが遂に喧嘩になり、英國人たる船長は威脅の爲めに放つた短銃が却つて喧嘩の上塗りとなり、竟には警察沙汰と迄なつて漸く落着した、然しその喧嘩で君が如何に大膽な、且つ利かぬ氣の男であるかは普ねく知れ渡り、同業者間には太く重視されるに至つたのである。

である。

當時の淡水は今日と違ひ南部支那との交通貿易は却々盛んであつた、随つて仲仕業も相當の成績を認めないではなかつたが、君が積年の志を伸ぶべく淡水の天地は餘りに狭かつた、斯うした狭い所では何をしても將來の見込がないと思つた君は、岡村と云ふ男に自分の寄場を譲り、最初伴つて來た六人の若者と共に臺南に往つた、それは三十年の六月の交であつた、後、安平に渡り其處で多年の辛勞を以つて貯蓄した小資本を以て仲仕元締を開業した、是れが抑々君が開運の緒となつて、遂に打狗の運送業者として、大阪組杉本音吉君の名を知らぬ者がない迄になつた、君の如き實に腕と力と汗とで叩き上げた成功者と云へやう、眞に立志傳中の人であつた。

君は資性剛健、功名利欲に頓着せず常に公共事業に盡瘁し、今や大阪組經營者として、將た亦打狗消防組の頭取として打狗になくてならぬ人物として敬愛されて居るが、君の爲人を語る一挿話として特筆せねばならぬのは、頗る仁侠に富んでゐる事である、嘗て在阪當時の同業者であり且つ知り合であつた俵元熊吉が、渡臺後基隆で仲仕業を開業して居つたが、都合あつて滿洲へと押し渡り、色々の運命に飄弄せられて、遂に彼地に客死した、遺された知邊少き不幸の親子四人は、路頭に迷ふの窮狀に陥つたのを、仁侠な君は傍觀するに忍びず之を手元に引取つて厚き扶養を加へ、現に女子供は學資を給して高等女學校へ通學させて居る、亦淡水での知人中野吉松は、之も榮枯盛衰の範を脱する能はず、其後零落して見る影もなかつたのを、君は陰に陽に何吳となく世話をした事は一通りでなかつたが、中野は終に不治の病に罹つた、之も君の手に據り臺南病院に入院せしめた、この同情の美譽を見ても、君の如きは洵に現代に得難き義侠の人である事を知り得るではあるまいか。

濱口吉兵衛君

本邦實業界の重鎮、濱口吉兵衛君の事業と人物を説述せんとするに當り、先づ由緒ある君の家柄を説明することが順序であらう。

君は元和歌山縣有田郡の人、現に東京日本橋區小網町三丁目に醤油、雜貨、貿易等を營みつゝある濱口商事株式會社の社長として、且つは帝都の巨商として信望高き濱口吉右衛門氏の叔父である、明治元年七月に生れ、後上京して共立學校、第一高等學校を経て、東京帝國大學法科に學び、在學中に歐米各國を漫遊して親しく商工業を視察し大に得る處があつた、實地の研究は之を文明の粹を聚めたる歐米に學びたるは、實に君をして今日の盛名を成さしめたる所以であると同時に、君の前途亦光彩陸離たるものあるは云ふ迄もない。

君は歸朝後直ちに一年志願兵として近衛師團に入り、日清日露の兩戰役に從軍して功あり、中尉に榮進して從七位に叙せられ、勳六等旭日章を下賜せられてゐる、君が洵にこの雄々しき軍人生活によりて得たる、其潑刺たる意氣の横溢と、遠大なるその抱負とは、徒らに父祖の財と業とを襲いで晏如たる、彼の殿様實業家とは到底同日の論ではない、惟ふに、軍人生活は男子の一生の華にして、此間に收得する體格の練磨と士氣の涵養とは、吾人の常に讚美措く能はざる處、彼の階級の何たるを問はず、業務の何たるを區別せず、何人と雖も一たびは此軍隊生活の實物教授を得るを以て、男子の本懐なりと力説する所である、即ち君が血腥き砲火の間に馳驅して武勳を現はしたその閱歷は、一軍人として、將た實業家として茲に吾人の特筆するに値するものであらう。

君今や日本醸造界の權威として著聞せる、かのヒゲタ醤油の醸造元たる銚子醤油株式會社に社長

として斯界の一方に覇を唱へてゐる、同社は實に君を中心とせる家族的の株式會社であつて、その醸造品たるヒゲタ醤油は、關東醤油として最も古き歴史と、他の模倣す可からざる卓絶せる品質とにより名聲宇内に冠たるものである。近來益その醸造能力の増大と、設備の完全を計りたる結果現在工場を五ヶ所に有し、一ヶ年の醸造石高約四萬石餘、而も常に供給の不足に苦しみつゝあると云ふに見ても、如何にその盛況なるか、窺知せらるゝ所であらう。

又明治三十一年株式會社武總銀行取締役となり、同行の發展に資して功勞あり、全三十九年には全行頭取の榮冠を負ふて、計籌畫策、益々全行の爲めに努力を怠らなかつた。

更に四十年豐國銀行監査役に、又第一生命保險會社の監査役に推され、君の往く處、何れも社運好調を來たせる幾多の勳功と功績とは、光輝燦爛たるの觀がある。今や君が斯界の驍將として、畏敬と思慕の焦點となりつゝあるが、なほ前途の大成期して待つべきものがある。

君や事に處して常に堅實無比、輕舉妄動を戒めて熟慮斷行する、従つて君の向ふ所必らず勝算の歴々たるものがある。其學識も深く、識見亦非凡にして元氣旺盛なるは、斯界の重鎮として將來一段の活躍を現はすは信するに難しとせぬ。

井上虎治君

君は播州の人川上吉左衛門氏の三男として生れ、後井上家の養子となつた、幼少既に穎才を以て郷間に稱せられ、將來有爲の士として囑望厚きものがあつた、夙に神戸に出で、學を修め、電信技術を修得して遞信省通信屬となり、累進して明治三十年姫路郵便局に電信課長となり、恪勤精勵、治績大

に見るべきものがあつた。然も君以爲らく男子志を爲すの天地は、將に實業界にありと爲し、即ち三十二年遂に志を轉じて大阪商船會社に入つた。之れ君が實業界に於いて、今日の大飛躍を成す最初の出發であつた。爾來徑路曲折、變現多岐の斯界に處して奮闘し、今や大阪回漕業者として雄名を馳せてゐる。

君一たび大阪商船會社に入るや、直ちに其才識の卓抜にして其手腕の凡ならざるを認められ、恰も會社が臺灣航路に重きを置かんとするや、幾多俊髦の中より拔擢せられて大阪商船臺灣組の支配人となつた。而かも君が支配人としての囑望に背かず、貢献せる其功績は頗る偉大なるものであつた。

斯くて三十九年再び商船會社に歸任して、大阪支店に助役となつたが、其時合資會社富島組の内部に於て手腕家を要望したる事情があつた、爰に於いて君は擧げられて同組の理事となり、内外の經營を其一身に擔當するや、先づ海陸運送の業務を擴張し、倉庫業を新設し、組織を變更して増資を行ひ株式となし、彌よ基礎の堅全を計り以て事業の革正を期した、是れ富島組が今日の盛ある所以で、實に君が努力奮闘に歸すべきものが多かつた。

君の手腕は如斯く重要な場合毎に其焦點となり、聘せられて効績を示して居るのは、君の鼎の輕重を問ふべき好箇のパロメーターとも謂ふべきである、人間の價値は世に必要不可欠の才器如何にある學者たり、政治家たり、又事務家たり、技術家たるも其理想とする所は、所詮社會的に必要不可欠の材たるに其軌を一にす、即ち君の如きは、此意味に於て最も價値多き人物であると言はねばならぬ。

君は又、先年曳船會社の取締役に擧げられ、次いで商船一派の有志と共に、別府ホテルの創立にも參割して其取締役に擧げられ、尙ほ極東硝子工業、網島工地、浪速セルロイド會社等の諸會社に重役として其事業に係る等、愈よ出で、活動的人物たる事を現した。

或は嘗て歐米を漫遊して海陸運輸交通の状態を視察し、歸來歐米諸港に關する一書を刊行したるが

其視察の細密奇警にして眼光の透徹せる、以て識見の凡ならざるものあり、識者をして驚嘆せしむるものがあつた。

君や爲人、豪快にして洒脱、機智才略に富み、而も意志雄健にして堅忍、態度沈着にして、事に處して曾つて誤りなかりし所以、蓋し偶然ではない、今や君年齒漸く不惑を越ゆる四五、眞に活動盛りの實業家である。洵に君の前途は燦として光明の輝くあり、吾人切に足下の自重を至囑せざるを得ぬ。

渡邊義郎君

現今名古屋に於ける大銀行の一として其盛名を謳はるゝものは實に株式會社愛知銀行である。同行は明治二十九年四月の創立にして資本金七百萬圓を抱擁し、ひとり縣下のみならず岐阜、三重の近縣に亘つて數多の支店を有し、其勢力隆々として將に斯界を壓して居る。而して之が取締役頭取として縦横に靈腕を揮ひつゝあるは、我が渡邊義郎君である。

君は四面峨々たる山嶽を以つて圍繞せられたる山梨縣の人、彼の金融界の巨人として名聲を馳せつゝある、日本勸業銀行總裁志村源太郎氏の令弟である。明治五年九月二十四日を以つて生れ、夙に大志あり、弱冠郷關を出で笈を負ふて東上し、帝國大學法科に入學して専心學業に勉勵し、他日大成の夢を胸に描きつゝあつた、而して當時大學生間に於ける情勢は擧つて官界を風望し、仕官以外又出世の道なしとされてゐた、君も亦當時はこの思潮に掉し將來は堂々たる外交官として華々しく手腕を揮はんと欲し、前途に洋々たる希望を抱いて赤門を出たのである、然るに父君は極力君に懲むるに實業界に入らんことを以てしたので、飄然として積年の志望を擲ち、遂に父の意に従つて身を實業界に投

じたのである。

初め日本銀行名古屋支店長たりしが、後四十一年八月に至り、愛知銀行が人材を求むるに際し、君は招聘されて同行に入り常務取締役となり、幾くも同行頭取の榮位に登るに至つたのである。

君愛知銀行の重鎮として、只管行運の隆盛と發達の最善を盡しつゝあるが、尙ほ此以外豊川鐵道株式會社、日本實業肥料株式會社、株式會社丸八貯蓄銀行、株式會社名古屋物産組及び株式會社愛知物産組等の各取締役として之を兼務し、今や中京實業界の巨頭として重望を擔ひつゝある、之れ君が如何に斯界に功績を現はせるかを知ると共に、又如何に其人物の偉なるかを察するに足るであらう。

君資性謹嚴極めて几帳面にして、一小瑣事と雖も苟しくもせざる處、蓋し銀行家として最も適應せる性格と云ふべく、而して一見親み易き風格の裡自ら犯すべからざる威嚴を具へて居るが、却々人を反さぬ如才なさと、親切さを有する人物である。而も其精勤と緻密とは如何なる書類と雖も自から之を點檢し處理せざれば止まぬのを以ても知らるゝが、例の三井償還事件に際しても決して獨斷的に裁せず、幾度か東京間を往復して遂に之を解決したる如き、其の周匝細心を窺ふに足りるであらう、要するに君は飽く迄堅實に引緊めて、勵精奮進する恰適の銀行家として稱すべきである。

令兄志村源太郎君は斯界の元老として財界に重きを爲し、君は中京に在りて之れが重鎮となり、兄弟東西に相對して敏腕なる銀行家と稱せらるゝは、是れ洵に異數の事に屬し、又一門の慶事なりと言はねばならぬ。

君未だ五十に達せず、尙ほ多くの春秋に富んで居るが、戦後經濟界の面目は一新せられ格段の活動を要する舞臺は既に展開せられてゐる、由來偷安姑息の評ありし名古屋市にありて、君の斯の如き發展活躍は既に大なる成功なりと雖も、吾人は此間に更に君をして一層霸氣あらしめ、刮目して以て見るべきの大飛躍を決行せん事を要望して止まない次第である。切に自重を禱る。

中 根 壽 君

古い帝大の文科からは、政治家其他の各方面の秀才を出した如く、札幌の農科大學からも異彩ある多くの人材を輩出してゐる、現在の貝島鑛業株式會社取締役中根壽君も亦其一人者である。

君は青森縣の人、舊會津藩士中根幸之助氏の四男として、慶應二年三月十九日若松城下に生れた。幼にして穎才、長じて札幌農學校に學び、螢雪多年、業を卒へたのは明治十七年七月であつた。

君は學校を卒業するや、其修學した處とは方面違ひの實業界に投じて、天稟の才腕を遺憾なく發揮した、即ち日本の炭鑛王として、一世の人傑たる貝島太助氏の經營に係る貝島鑛業株式會社に入りて其才腕を認めらるゝに至つた。

君が威風堂々たる其風丰、霜を交へたる美髯、寡言沈着にして小事に拘泥せず、巨然として山の如き態度は、恰も猛虎嶋に嘯くの慨あり、而して其心膽亦宏量寛懷にして光風霽月、眞に大人物の品格を有してゐる、宜なり、君が棟梁の利器は、流石に天下鏘々の人材を網羅して、多士濟々の噂の高い同社に於て、大に異才を以て許されてゐる所以である。

然り君は、貝島鑛業株式會社取締役の椅子に悠然として安居し、機務を執り、大綱を總攬すれば足るのである。従つて表面には神出鬼没の機敏なる外交振りも現れず、宛として枯木寒巖の觀ありと雖も、一眼よく事物の奥底を洞察するの明智に富み、一たび事に處するや、機略縱横其決裁流るゝが如きものあるは、人の私かに畏敬しつゝある所である。即ち君が沈黙は千金の價値あるもの、従つて君の大貫目も這假に發揮されてゐるのである。

君の長子は工學士中根元氏で、帝大出身の秀才である、其外幾人もの令嬢があるが、君は亦子福者としても世間から大に羨望されてゐる。

今や故貝島太助氏鴻業の役を享けて、益々發展しつゝある貝島鑛業株式會社が、二百五十萬圓の大資本を抱擁して天下に其覇を稱する所以は、現社長貝島榮四郎氏等一族一門の努力與つて偉大なるものありと雖も、亦以て會社の大黒柱たり、大立物たる君の偉材に俟つ所亦尠からざるものあるは、吾人の贅絮する迄もない所である。

君正に五十有四、尙ほ多くの春秋に富む、君が得意の才腕を發揮して克く、不世出の偉人故貝島太助氏の鴻業をして萬歳動きなきものたらしむるは、ひとり貝島家一族の幸福のみでなく、亦一に未來ある君の祝福である、自重加餐、大に努力せられんことを祈る。

吉田良春君

現今若松市に於て第一流の人物として容されて居るのは吉田良春君である。君は帝大出身の法學士で、學才も深く又辯舌の雄でもある。それに背後の大勢力として百萬長者の住友家が控へて居るから君にありては將に鬼に金棒の觀がある、斯くして君は業務の關係より筑豊石炭鑛業組合の常議員となり、又若松石炭商同業組合の評議員又は組長に推さるゝ以外、若松市教育會長として、將た若松築港株式會社取締役として、此等關係事業の發達と若松市發展の爲めに多大の貢獻を爲して居る。

由來九州に於ける住友家の事業はと云へば、金融業と石炭業とである。而して同家の炭鑛業の大本營として若松市に置かれてゐるのが住友炭業所であつた。君はそれが主任として最近まで同所にあり

經營の爲めに大にその智能を揮つたものである。

若松は炭業を中心として興つた新開地なる故、土着の人物としては殆どないと云つても宜く、皆他から寄り集つた外來の人で、その外來の人にも人物が乏しいのである。その間にあつて君は同地の信望を負ひ、手腕家として聞えある石井市長を向ふへ廻して堂々として論陣を張つて居る。兎に角手腕家が共に若松市には重きをなして居る人物で、若し市制施行の當時に當選のまゝ市會議長の席にあつて思ふが儘に經綸を行ひたらんには、面白い場面を見る事が出来るであらうと思はれる。

君に會見せし人は皆洒脱なる性格と親しみ易きを云ふ、然り君は胸中常に光風霽月の如く、人に對して障壁を設くることなく、全人格を露き出して訪問客と談論する、而して事業經營に當つても矢張りこの主義を以て一意誠心に部下を督勵しつゝその範を示すので、業務は頗る圓滑に進展し住友家固有の着實謹厚の氣分が横溢して居る。

君の對敵たる石井氏は九州鐵道から出て、その社長たりし植村俊平氏が大阪市長となりし際には、同氏は大阪にあつて市政を研究した程の手腕家、此の人と對陣して吉田君は住友家を背後の勢力とし着實なる思慮を以て角逐せんとするのであるから、此二人者は同地の雙壁として並び稱せられるのである。その勝敗は暫く措き、如斯き二大人物の出現によりて沈滞したる氣分を緊張せしめ、同地の發展に資せんが爲め兩々相下らざるの意氣を以て事業經營のために心血を注ぐものとすれば、同地方の爲めには幸福なる次第と云はねばならぬ。筆者は君自身のためにも又、若松市のためにも君の健在を祈りて已まぬものである。

坂本清三郎君

本邦膠業界の慧星として、噴々たる聲名を世に馳せつゝある坂本清三郎君は、丹青よし奈良は南都の西南、皇祖神武天皇の宮居噺間丘の麓に生れ、爰歳二十八歳の少壯である。

膠業は我が化學工業中にも特殊の事業として、亦特殊の手腕を要する難事業であることは、少しく生産工業に意ある者の齊しく首肯する處である。殊に又化學工業の發展と共に、此膠業が最も緊要のものなるは識者を俟つ迄もなく明らかな處であらう。

元來君の現事業は先代清五郎氏が、明治五年創めて斯業に従事せしに始り、當時は専ら製墨用膠をのみを製造し、**セ印膠**といへば製墨家の信望厚く、大に歡迎せられたものであつた。然るに従來製墨用膠をのみ製造してゐた同工場では、近來輸出品たる合板(ベニヤ)、燐寸、其他一般工業用の、粘着力強き膠の製出を發明するに至り、盛んに斯界の賞讃と好評を博してゐる。

斯くして同工場が、斯界の注目を集め、日に月に隆盛に赴くと共に、樽物たる君の事業熱は向上して底止する處なく、即ち大正二年長男清一郎氏をして滿蒙地方を視察せしめ、原料の直輸入を實行して事業の擴大を計劃したが、尙ほ原料の不足を感じた君は、隼の如き其爛眼を他方面に展開したる結果、終に東北地方に同材料の一大源泉を掘りあてた、それは鯨頭骨に多量の膠質を含有せるを新に見出した研究であつた、而も之を自家が苦心創作せる獨特なる製造機械によつて精製するに至つたが、此精製品こそは、實にかの工業用白洋印セラチンである。

顧みれば明治五年創めて製墨用のみの膠を造つた同工場が、今日の盛大と聲價とを博する迄の、君

が苦心の徑路を辿ると決して坦々たる道程を歩むが如き易々たるものではなかつた。幾度か難關に處したであらう。けれども意志堅固な君は勇往邁進して之が遂行に努力した、而して常に研究創作に苦心した結果が、目下專賣特許の出願中である。合劑太平洋膠を發明した、我國一般の膠製造法は、數十年來の今日も尙ほ因襲的舊弊を改めず、雜種動物の混合皮屑を以て高度の熱を加へ、長時間煮沸凝固し之を乾燥したるものであつて、結果は膠質分子を阻害し自然粘着力も柔弱であつた爲に、一旦接合したものでも偶々入梅期の水氣或は氣熱に會へば再び分離し、燐寸の如き亦不發に終ることが多かつたので、一方需要家に於ても使用困難にして非常なる手数と時間を要し、甚だ不經濟と云ふべきであつた。君爰に深く着眼研究する所あり、幾度か失敗し幾度か創作を試み、多年苦心の結果最も強大なる粘着力に富む、分子綿密なる膠を創作したのである。而も其特長は化學的に粉末状態にせるものであるから使用容易にして、熱湯に投すれば忽ち溶解し、又乾燥力速かなる爲めに水氣氣熱に會ふも毫も變化なく、大に膠としての目的を達することが出来るので、勞力と時間の手数を省くのみならず其價格に於ても一般の膠より安價に求め得らるゝと云ふ幾多の特長を有つた經濟的のものである、實に我工業界に一大福音を齎せるものであつた。

斯くして君は、波瀾重疊の難關を突き排けて幾多の新品を發見創作し、我が化學工業界に資する所大なるものがあつた、惟ふに今後と雖も隼の如き君の爛眼は、國家的事業の何物かを捉へて之が發見創作を爲さずんば已まぬであらう。洵に君の前途や洋々として廣く、而かも其成功や期して光彩陸離たるものがあらう、幸に自重を祈る。

一色忠雄君

現今帝都に於ける個人經營の印刷工場として、其の設備の完全なる、其の製品の優秀なる、其の營業の親切且つ確實なる點に於て、其人格と相俟つて眞に斯界に北斗星の觀あるものは、一色活版所であらう、その事業の隆々として旭日冲天の勢を示せるは當然である。

一色忠雄君は實に其所長にして、その成功は大正成金傳中に一異彩を放てる人物であるが、今日に至る迄の數寄を極めし小説的生涯は、波瀾曲折の繪巻物で、而かも夫れには血が迸り、涙が滲んだ史痕を留めてゐるのである。

君の生家は鳥取の舊藩、祿高三百石の家筋で、君はその二男として慶應元年五月呱呱の聲を揚げ幼時は何不自由なく幸福に生ひ立つたのであるが、明治の革新と共に榮枯盛衰定めなき世の態、人の身の上に荒める風浪の急激に襲ひ來り、同家も爲に動搖を餘儀なくされ、多少の貯蓄あるに委せて明治十三年十一月一家を擧げて上京した、當時は朝野新聞の全盛時代であつたので、君も私かに期する所あつて先づ京橋尾張町なる積文社の解版小僧となり、日給七錢を給與せらるゝに至つたが、次いで文選となるを得た。然れ共君は此處に永く止まるの不利なるを悟り、出で、慶應義塾の附屬出版部に轉じて奮勵すること二年、後更に丸山作樂氏經營の明治日報に移つた。

斯くて年十七歳の時自ら獨立して小印刷所を創立せんと志を起し、叔父の臺所を借り受けて之れを印刷工場となし、母君の助力を得て一臺四十五圓の手引刷機二臺を据付け、健氣にも開業を試みたのである。その熱心、その努力は悉く叔父夫婦の同情する所となり、打揃ふて親しく援助の手を下さ

るゝに至つたので、君は益々勇を鼓舞して奮闘維れ努めたが、何分薄資を以つて創業した悲しさ、設備の不完全を補ふ熱心努力の結果が、仕事を生み出せば生み出すほど却て資金の缺乏を感じ、遂に祖先傳來の數多の名劍類をも悉く賣却して之れに充つるの止むなき境遇に立ち至つた。

此處に一進境を見るべく君は明治十七年現時の東京朝日新聞社の裏手なりし京橋三友社附屬の家屋を十八圓にて借入れ、繁華なる場所に於て再び營業を開始した、流石に場所もよく、又得意も増して好況を呈したが、偶々鏡浦雜誌及世界新聞の印刷を引受け、その賣行面白からざる爲め、思はざる大蹉跌を來し進退維れ谷まつて、君は横濱へ夜逃げ同様に落ち延びたのである。

斯くて君は奮然志を立て、如何にもして米國に渡り天晴れ大人物たるべく新運命を開拓せんものと深くも決心する所ありしが、渡航費を造るべく荏苒日を徒消するに堪えず、大膽にも遂に密航を企て明治二十年八月十七日無事、リョヂャネイロ號に乗り込み横濱を解纜したが、航海中洋上に於て發見する所となり、雜役を命せられ少なからず苦心困難せしが、十九日目漸く目的地たる桑港に安着しながら上陸することを得ず、進退全く窮り、茲にチレンマに逢着したのである、健氣なる君は更に思を運らし一度は海中に飛び込んでも目的を果さんとして得ず、悲憤の涙を呑んで本國に送還さるゝの已むなきに至つた。

然かも尙ほ青春の血物々として燃ゆるが如き君は、飽迄此目的を達せんと、百方友人間を奔走して旅費を整へ、横濱着後八日目といふに再び三等船客として殘金僅に一圓五十錢を懐中し十一月二日恙なく桑港に着するを得たのである、而して翌三日日本領事館に來意を告げ、早速印刷所の就職口を求めしも中々見當らず、詮方無きまゝ、ボーイとなつて其家に皿洗ひに雇はれしが思はしからず、居る事半年、辭して同地より十哩も距る一農家に雇はれ、徐ろに機會の來るを待つた。

至誠天に通すとの古言の如く、君の熱衷は幾多の苦がき經驗を重ねた後、遂に桑港の某印刷所に奉

公口を得、初めて宿志を貫徹するの緒を見出したのである、而して主人に愛され、多くの給料を得たが、不幸にも二年後に同所は閉店するの厄に遭遇せるを以つて、君は止むなく他の印刷所に轉じ、前後十五年の間米國に在つて斯業に伴ふ各種の事項を研究したのである。

斯くて此處に君は初志を果し得、數千圓の貯蓄も出來たるを以つて、久々に母の温顔に接し、大恩ある叔父を慰めんと、所謂錦を着て歸朝したるが、母君は老ひ、叔父君は相變らず健氣にも孤城落日の一色活版所に在つて具さに悪戦苦闘を續けつゝあつた、君は初め米國を出發するに當りて思へらく老親を慰藉して直ちに引返へし、更に印刷業に於て米國の天地に大飛躍を試みるの快絶なるに如かずと、而も此豫定は、道に如上の悲惨なる狀況を目撃して、情義黙止し難く、遂に意を譲して日本に留まるべく變更し、挺然孤壘に健闘すべく決心したのである。

爾來星霜を閱みする事十有幾年、君が米國に在りて鍛練したる利腕は、光榮ある成功の冠を握るを得、事業は日に月に繁盛を來し、工場は新築又増築、目下都下に於ける最大最盛の工場として押しも押されぬ覇者たるに至つたのである。遡つて密航者として送還されし當時を回想し、現時の盛觀に比較せば轉た今昔の感に禁へないであらう。

遮莫君の徑路を辿るに當つて最も痛切に感動せしめらるゝは、終始一貫して動搖せざる奮闘的精神にして、其熾烈なる意志は遂に君をして玉成せしめたのである。

西哲曰く、大きな喜びを得るには必らず又大きな悲しみを經なければならぬと、實にその言の如くにして君の生涯は悉く奮闘の歴史、努力の結晶たらざるはない、君が眞に權威ある立志傳中に列せらるゝ亦宜なる哉。

深川忠吉君

「水田の佐賀」と云はれた農業國の佐賀縣が、近時異數なる工業的發展を爲しつゝあるは面白い現象である、是れ吾人の贅絮する迄もなく、世界的戦亂の餘響は、敢爲なる縣民性を驅つて、農業國たる佐賀縣をして一縣工業國たらしむるの機運に乗せしめ、更に之を激成せしめたものに外ならぬ。而して我が深川忠吉氏は、將に同縣の事業界を風靡しつゝある實業家の錚々者である。

氏は佐賀縣士族深川喜次郎氏の令弟にして、明治八年十月十日を以て生る、元來深川家と云へば佐賀市に於て並びなき富豪で、其事業も又極めて多い、氏は之等の事業に關與すると共に、又同地に於ける各種の事業の振作に盡瘁してゐる、今回氏の關係し居れる事業を擧ぐれば、深川汽船株式會社、株式會社深川造船所等は云ふに及ばず、大川鐵道株式會社、地所株式會社、九州舍株式會社等にして何れも副社長並に取締役、監査役等の重役を勤めてゐる。

氏は資性至つて磊落濶達にして徒らに他と城廓を設けず、談論風發して一見政治家の如き趣きがある。而して其精力の絶倫なることは人をして常に推服せしむる處で、一日も寧日なく活潑々地の活動を續けてゐる、若し夫れ手腕の卓越、頭腦の明敏なることに至つては世既に定評あり、蓋し氏の如きは職務に忠實なる理想的事業家と云ふべきであらう。

又氏は前記の關係事業が之を明示する通り、至つて多方面の人にして、其趣味も又廣汎に亘つてゐるが之氏は部下を愛すること骨肉に等しく、よく夫等の人々の長所を認めて、適材を適所に置くと共に、種々なる策を講じて之が慰藉及未來の發展に資せんと力めてゐる。されば氏の部下が氏を敬愛す

ること慈父の如く、爲めに其事業は着々として進展し、秩序的な發展振りを見せてゐる。君にこの好舉あるは當然の事であらうが、特記して其の徳を頌しなければならぬ特志がある。それは郡内に一大古墳あるに着目し之れが耕地整理の爲め破壊せられ耕地とならんとするを聞き大に慨歎し、巨資を投じて之を買収し各方面の有志の後援に依り大に復舊工事をなし保存の方法を講じ居れる事である、然るに考證の結果は景行天皇の皇子國乳別皇子の古墳ならんと傳へられてゐる、之れに付ては更めて世間に紹介する他日があらう。

思ふに平和克復後の吾國事業界は、戦時に倍して更に一層重大なるものがある。この危機を突破して今やその序幕を開きたる世界經濟戦に勝者の位置をしめるには、國家の事業家が相協力して而して堅實なる發展を爲すに若くはない、かゝる重大の時に際し、佐賀縣事業界の重鎮たる氏の使命は又、重大の自重と奮闘とを切に希望して止まない。

重田 榮 治君

菊元商行主重田榮治君は、現今臺北に於ける最高納税者中の有數である。而して其事業は大稻埕に於ける綿布商、城内文武街に於ける呉服店とに分たれ、臺灣の大綿布商として、將又臺北有數の呉服商として、本島は勿論對岸支那方面にまで其盛名を馳せてゐる。

君は周防岩國町の人、明治三十六年郷里の菊元家より分れて渡臺した人である、元來岩國の本家が綿布問屋として名高つた、君亦斯業を以て世に立たんと志し、臺北に於て綿布商を開店したのが抑々今日ある第一歩であつた、而して同家が今日斯界に於て最も重要な地位を得るに至る迄、その經營は

全く獨立獨歩で、這間に於ける君の經歷は實に孤軍奮闘の姿であつた。

君曾て營業上の便利なる點を指摘して「我等が臺灣各地及支那の要所に於ける支那民族との取引上に於て、一の支店又は出張所を置くの必要がない、各地取引先との直接連絡は一層密接となり信用取引をなして何等の支障なきのみならず、商標の信用亦確實に保持する等は營業上常に便利を感じつゝある所で、之が爲め商店經營の幾分を減じ、それだけ廉價取引の行ひ得らるゝ譯であるが、店員も亦力めて簡易生活に慣れ本島内如何なる僻地と雖、支那何れの地に於ても少しも不自由を感ぜざるは、今後の活動上に甚だ利便である」と云ひ、又更に「岩國に於ける木家との取引連絡は事業上非常の便宜なるは云ふ迄もなし、而も好意的後援者として綿布の織元たる岩國藩士の授産所即ち義濟堂及び宇和島都築工場が、熱心なる研究を以て支那向幅廣のものを製造し、益々取引を盛んにしつゝある等は本店現在の盛況に達せる原因であり、又今後多大の嚮望を以て經營に従事し居る次第である、目今各府縣授産業の不振なるを見て義濟堂の現状に及ばず、誰しも想像以外の美點あるを感ずるであらう」と以て如何に君が各地方より信用を博せるやを知るべく、部下統御に妙を得たる經營の才は、多數の店員皆喜んで君の麾下に働きつゝあるに徴して知り得べく、總て是れ斯業將來の發展と、君の幸福を象徴して餘りあるものである。

遡つて君の渡臺當時を顧れば、本島斯業界の實態は支那輸入綿布の香港經由の歐洲織物のみを以て充たされ、日本製は唯僅に在住内地人の需要を充たすに過ぎなかつた。然るに君は熱心に臺灣人及支那向の織物研究の目的を以て、屢々支那市場の往復し又内地製造家との間に連絡を取りて之が指導をなす等、一心に努力せし結果、内地製品は漸を追ふて販路擴張せられ、且現今に於ては臺灣綿布商等の盡力及往年關稅改革の餘慶も與りて、遂に全島各地の外國製品を驅逐するを得、而して其餘勢は遠く南方支那各地に向つて盛んなる輸出をなすに至つたのである、現今綿布の綿織品が基隆埠頭南支中

繼輸出貿易品中の重なる一品目となれるは、偏に君が率先して斯業の振作に最善の努力を爲せる結果と云ふべく、而して又當菊元商行が本島内は勿論對岸南支地方に至る迄、大綿布商として實に重要な位置を占むるに至りし所以である。

産業界の先覺者として、將た我が貿易上に於ける偉大なる功勞者として君が事績は決して看過することが出来ぬ、吾人は、國運の發展を期する上に於て、更により大なる努力を以て一奮闘せられんことを切望して止まぬものである。

大塚 篁 一君

時局に依りて我邦事業界の受けたる教訓は、決して僅少ではない、其教訓の吾人の最も留意すべき點は企業組織の上に於ける變化である、即ち小規模なる企業を合同して生産能率を増進せしむる事は戦後の我企業界が自から進んで敢行せねばならぬ、緊要なる方策の一である。

大規模事業の利益にする處は、資金を潤澤にして低廉なる原料を購入し、随つて生産費を低下せしむる事を得、又工場の設備を完全にして製品の統一を計り、以て粗製濫造を防止し、更に市場に於ける需要供給の調節を施して、生産過剰の弊を防壓する事を得るのである。

我邦の諸工業家が戦後の大方針として、海外輸出に全力を傾倒せねばならぬ事を自覺する以上、小事業を合同せしめて組織の規模を大にし、外國製品と競争して勝利を得るだけの實力を涵養せねばならぬ、更に又従來内地の需要を海外よりの輸入に俟ちし者には、特に國産の獎勵を爲し産業の獨立を樹立せしめ、自給自足の方策を定むる事が我邦刻下の大急務である。

この主旨に合致したる方策を試みつゝあるは、岡山縣一帶の機業である、由來本縣下の織物は數十年前より海外輸出品として名聲甚たりしも事業區々に別れ、只一部々々の需要を充するに過ぎず遺憾の感なき能はざりしが、今や戦後の時局に際し諸工業家一齊に自覺するありて、將に合同は試みられんとし、大資本、大工場組織の下に生産品は統一され海外市場に雄飛せんとしつゝあるのである。

岡山縣後月郡一帶の地は由來機業地として著聞されてゐる處であるが、同郡の機業界が今日の如き大活況を呈する事を得たるは、歐洲戦亂の影響を受けて輸出向製品の増織を企てたからである。吾人は今其過程として本郡の機業界に多大の貢献を爲したる大塚篁一氏の功績を録さねばならぬ。

氏は現在高屋織物株式會社、中備織物整理株式會社の社長にして敏腕を揮ひつゝあるが、特に此地方の産物たる中備織に最も深き關係を有し、氏は明治二十五年以來織物業に従事し、現に今日氏一個の經營に係る大中屋織物工場は中備織の製織を専業とせる地方斯界の最高權威と稱されてゐる、然るにかの有名なる隣接廣島縣の特産品たる備後織は其名聲を天下に博したる時期に於て、一日の長ありと雖も、現在中央市場に於ける信用と聲價は、遂に中備織の品質優良なるに及ぶ可くもないのである。而して中備織をして今日の如き、名譽と信望とを得せしめたるは、實に氏が過去半生に渡りて幾多の艱難と辛酸とを嘗め、且つ多大の犠牲と努力とを拂ひ、内製品の改良進歩を計り、外販路の開拓に東奔西走したる結果に外ならないのである。斯の如きは實に氏の如き公共心に富みたる人士にあらざれば、能くせざる處にして利己的觀念より外に何物もなき、尋常一様の商賈の夢想だに及ばざる所である。

氏の工場によりて生産されつゝある中備織は、福樂織の商標によりて斯界に一頭地を抜いてゐる。元來福樂織なる商標の由來は先年大阪毎日新聞に掲載されたる、新小説百合子の挿絵を利用したるものにして當時此小説は全國至る處に喧傳されて、幾多の婦女子をして其才筆に惱殺せしめたのである。

が、遠に慧眼なる氏は天下の視聽を集めたる、此挿繪を採つて以て自己の製品たる中備織の商標と爲したのである。

蓋し斯の如きは些々たる一小事に過ぎざれども、以て氏が商機を見るに敏なるを想見するに至るのである。氏は一面に於て自己の營業に熱心なるのみならず、頗る公共心に富み、其地方一般の機業界に盡したる功績は偉大なるものとせられてゐる、曩に此地方に於ける織物業を統一して其製品の改善を圖る可く同業組合を創立したるも、主として氏の奔走盡力の結果にして、現に今日中備織物同業組合長として、將た又岡山縣織物同業組合聯合會會長として、不斷に且つ熱心に努力盡瘁し、其功績は枚擧するに遑なき程である。

以上の如く氏は岡山縣に於ける機業界の主動者たるのみならず、其政治的手腕に至りても亦此地方一帯の右に出ずるものがないのである、聞くが如くんば氏は年齒まだ至らざる少壯の時代に於て、高屋村長に推擧され治績甚だ見る可きものありしと云ふ、更に推されて縣會議員となり、現に縣參事會員として侃々諤の辯論を以て滿場に畏敬を拂はれてゐる。

而して氏の政治的地盤は、日を逐ふて益々鞏固を加へ今日に至りては殆んど氏の獨擅場なるかの觀がある、氏は壯歲にして老いたり云ふ可からず、眞に活動す可きは寧ろ今後に屬するのである、吾人は氏の經營に係る機業工場の將來が、氏の前途と共に必ず目覺しき大發展を遂ぐ可きを信じて疑はないのである。

田中海一君

本邦紡績界の權威、東洋モスリン株式會社專務取締役として、卓越せる識見手腕を以て錚々の名を馳せつゝあるは、我が田中海一君である。

君は備中鴨方村の人、明治六年酒造家田中榮三郎氏の長男として生れ、中學を出るや上京して明治法律學校に學び、卒業と共に一旦歸國して家業に従事せるも、嚮勃たる雄心は永く家業を守りて鄉村に晏如たるを屑しとせず、私かに期する處あり、斷然意を決して廣島に走つたのが、恰も君の二十六歳の時であつた。

當時百圓を懐にしてゐた君は、先づ同地に於て雜貨の賣込を企て、續いてメリケン粉の輸入せらるゝを開くや、直ちに神戸に走つて之を購ひ、廣島地方に販賣を開始したが、商略適中して忽ち六七萬圓の儲けを得たので、之を資力として君は下關、大阪、若松等に支店を設け、廣島を中心として活動を始めたのである。

斯くて日露戰爭に際しては一擧にして三四十萬圓の資財を積むに至りしかば、佛人ルーネン氏を知りしを好機として、四十一年門司田の浦に一船渠會社を經營せんとし、併せて土地の思惑をした迄はよかつたが、ルーネン氏は其後失敗して歸國するの始末となり、田中君も亦大蹉跌を招ぐに至つた。

茲に於て親戚知人は頻りに善後策を講じて、同社の再起を勧めたが、君は徒らに一旦失敗せし事業の彌縫を好まず、斷然本支店の閉鎖を命じて家政の整理を爲し、十數萬の借財を背負ふて四十三年關西の土地を去つた、而して上京後は知人の勧めによりて株式仲買店の小池合資會社に入り、居ること

三年、献身的努力を捧げて只管同社の進展を計つた。

然し乍ら君は、自己の性格が到底この投機的不安定な株式事業に適せざることを自ら感じた、君は今少しく堅實な基礎の上に築かれた事業の上に將來の立場を安定しようと欲したのである、其處で君は一旦歸國して捲土重來的の事業を試みんとしたが、恰も其時東洋モスリン會社に人材を求めてゐたので、意を醸へして會社に入ることゝなつた、之が大正二年十二月であつた。

當時會社の重役は新入の田中君に屬するに、紛糾せる會社の整理を以てし、遂に會社の支配人となつたのである、全く會社の當時の紛糾は決して優柔不斷な、姑息な方法では之を整理することは出来なかつた、即ち之を決行するには斷乎たる積極的な、快刀亂麻を斷つの大手腕が必要であつたので、同社は長い間之等の手腕を有する逸材を翹望してゐたのであつた、同社の會長は神戸舉一氏で、取締役には前川太兵衛氏を始め小池國三、若尾幾造、渡邊福三郎、菊池長四郎氏等の財界の錚々者を網羅して居つたのであるが、田中君は入社以來將に五年、其地位は一支配人であつたけれども、殆んどこの専務の格を受けて一意専心事業の改善發達を謀つたのであるが、大正七年十二月専務取締役に就任し、而して今日の如き機運を齎すに至つたのである。

會社近來の發展は眞に目醒しいものがある、資本金今や一千万圓を抱擁し、斯界の雄として稱へられてゐる同社は原料羊毛輸入難を見越して先年來工場を擴張し、現に綿緇子製造兼業を以て、内地は勿論支那方面へも盛に大活動を遂げてゐる、されば其資本金の如きも大正八年六月臨時總會に於て從前の四百萬圓を一躍一千万圓に増資の決議成り立ちしものであるが、實に之等の好況は五六年迄は夢想だにも爲し能はなかつた所で、田中君が入社以來全く面目が一新された觀がある、君の畫策經營が如何に周到明敏を極めたるか推して知るべきである。

今試みに大正八年上半期の成績を見ても當期純益金九拾五萬九千餘圓を擧げ、内本社工場建物機械

器具原價銷却金、戰時利得税見積額等合計二十四萬圓を差引いても、克く七十一萬九千餘圓を算するのである、されば決定準備金の如きも四萬圓を積立て、後期八九萬八十一圓餘を繰越し、株主には特別配當共に二割五分の高率を處分するの盛況を齎してゐる、又君の得意思ふべしである。

君は社業に熱心なる必然の結果として、殆んど他事業とは没交渉である、世の所謂事業家と云へば唯だ自分本位の利欲にのみ眼が眩んで、何等自信も經綸もない輩が、徒らに肩書の多きを欲するもの多き中に、唯僅かに日本製麻株式會社の一監査役として就任して居るのみ他を顧みず、専心東洋モスリン會社の改善發達のみに努力しつゝある君の如きは、蓋し現代にありては異數であると云はねばならぬ。

君資性快濶、識見あり、經倫あり、手腕あり、膽力あり、果斷あり實に好個の實業家であるが、而も多趣味の人で諸藝に通じ、園藝は初段を以て目され謠曲、義太夫、長唄、清元、常磐津、新内等何れも素人の域を脱せりと云ふ、亦一異材たるを失はぬ。

佃 一 誠君

我國銀行界の機威、日本勸業銀行理事の榮職にありて鏘々の才を以て鳴る、我が佃一誠君の月旦を試みんとするに當り、君が多年經歷し來つた其歴史を緝くに、君は官吏として適材の士か、或は財界にありて縦横の才腕を揮ふべきの人か、蓋し何れを良とし、何れを適なりとすべきかは、猝かに之が斷定的批評を下すことが困難である。何となれば君が今日迄の幾多の變化ある其閱歷に徴して行く所一として可ならざるはなく、功を收めて名聲の擧らざるもの爲きの觀があるからである。少しく君が

多曲の富む今日迄の其生涯を説くこととする。

君は明治三年九月二十五日、石川縣加賀國石川郡一木村に生る、幼にして俊敏既に群を抜いて神童の譽が高かつた、全十九年上京して共立學校第一高等中學校に學び、進んで二十八年帝國大學政治科に入り同三十一年卒業した、卒業後直に大藏省主税局に勤務し、續いて文官高等試験に登第し、翌年司税官に任じ、廣島稅務管理局間稅課長となり、爾來稅關事務官、函館稅關監査課長、稅關監視官橫濱稅關監視部長、松江丸龜、神戸稅務監督局長、神戸鹽務局長(兼任)、專賣局部長(收納部長)、大藏省參事官、日本興業銀行監理官、印刷局長等に歴任し、其間統計調査、所得審査、煙草產地整理、收納事務、特殊銀行機能改善、關稅訴願に關する委員又は委員長となり、何れも此難局に處して着々其功を奏して嘖々たるの聲名ある處、寧ろ鬼才とも天才とも稱すべきである。殊に、印刷局長時代は君の天稟は最も鮮明に發揮され、其辣腕縱横は時人齊しく嘆服せし處であつて、其功績は永く録するに足るべきである。

大正六年轉じて現在の日本勸業銀行理事に擧げられたのも、君が今日までの手腕に托されたのであるが、同行が此辣腕を茲に招じ得て、君の功に待たんとするは誠に好個の筈り役と謂ふべきである、而も君が、此榮譽ある地位を贏ち得て其の才幹を揮ひ得るは、心私かに誇りとし、勝算の既に歴々たるものがあるであらう。

君は又曾て神戸稅務監督局時代、同鹽務局長兼任時代に於て、彼の日露戰爭當時、非常特別稅法制定に與り、多年蘊蓄せる深奥の學術と經驗とを傾注して、中央當局の卓抜なる意見を提出し、其理路の井然たるを、高邁の識見一として肯綮に値せざるものなかつた事は、君が偉功中の尤なるものとして我が稅制史上、永久に絢爛たるの光りを留むべきものであらう。

更に山本内閣當時、特殊銀行の機能改善に關する調査委員として、其の他大隈内閣時代に於て印刷

局長たりし時、官業整理問題を解決し、抄紙部の一部を民間に拂下ぐべく、遽かに斷行を成したる等は茲に詳叙すべく、よく筆紙の足らざるものがある。

君は常に縱横の才幹を有すとも、決して輕舉盲動を成さず、深き學識と幾多の經驗と明敏の頭腦とにより、熟慮反覆して始めて斷行する人である、而も機を見るに敏なる、到底凡鱗の企及し能はざる處、君が成功の所以は亦茲にあるのである。

勸銀は基礎既に堅く、信望夙に高し、加ふるに今亦個君の俊秀を容れて、經營更に新なるを成さんとする同行の前途や誠に刮目して見るべく、君が巨腕奈邊にまで進展して止まざるやは、蓋し洋々として渺溟際涯なきに似てゐる。

君や年齒未だ四十有九、理智更に深奥に入らんとするの秋である、勸銀の向後に於ける大飛躍や火を觀るよりも明らかであつて、國家經濟の礎石も愈々確乎たるの度を増すべきであらう。

由來、銀行界の事業の難きは誰もよく知る處である、適材として適所に赴ける君や、如何の抱負と所信を有して居るや、明徹にして緻密なる其頭腦、縱横にして圓熟せる其手腕、加ふるに最高の學府に學び得たる其深き學識とを以つて、如何の活動をなさむとするか、而も君や膽大斗の如し、君が前途の大成は宛として掌を指すが如きではあるまいか、切に自重を祈る。

靜 間 溫 夫 君

・近時我が臺灣に於ける企業熱の勃興と、新時代の氣運とに促進されて、續々内地實業家の渡臺活躍するもの相繼ぎ、中には偉大なる好成绩を擧げ斯界を聳動しつつあるもの數ある中に、未來ある基隆

事業界の新人として、前途を期待するものは、靜間温夫君であらう。君は長州須佐の産、郷覺を出づるや先づ商賣の實習として神戸の憐寸會社に入り、一事務員となつたが在勤久しき間忠實熱心に働き、事務に慣るゝと共に社内信用する處となり、衆望を一身に擔ふに至つた。

而して時恰も日露の風雪急にして終に干戈を交ふるの止むなきに至るや、君も國家の干城として滿洲の曠野に従軍し、具さに苦難を経験した、雖て平和克復して凱旋するや、當時殖民地に於ける企業の有利なるに着眼し、明治四十年決然として渡臺し、驛傳社の社員となつて其才幹を示した、是れ君が新人として臺灣に飛躍せし初めにして、又成功の階段に足掛けし第一歩であつた、而も毅然たる勇氣を有せる君は、唯々として他人の支配下に願使せらるゝを屑しとせず、遂に四十三年獨立して營業を開始するに至つたのである。

基隆停車場前通の一と構は即ち君が營業事務所で、明治四十三年以來臺灣總督府鐵道部專屬、臺灣總督府稅關貨物取扱代辦、大阪商船會社南北支那南洋線及臺灣沿岸線の專屬を得て、獨立獨歩、運送業を營みつゝ、爾來今日に至る十箇年間の勇奮苦闘は、遂に君が名をして同地に高からしむるに至つた。傍ら四五年前より石炭に着手し、當時々局の影響により炭價の暴騰、船腹不足等の機會に乗じ大に臺灣の炭輸出を行ひ、少からざる巨利を博し、更に大正七年より石炭事業の一切を、領臺以來討伐隊として民間に於ける元勳者とも云はるゝ岡本萬太郎氏と協同し、萬成商行名義の下に盛んに輸出し、今や全島炭業者の第三位を占むるの盛況を齎してゐる、仄聞する處に依れば近來更に或事業の計畫を目論見、之れが準備として目下船隻を新造中にして、之れが竣工の曉には資本金百萬圓を以て起業を決行し、而して某方面に大活躍を開始すべしと傳へられてゐるが、手に唾して起つ君が抱負の大は果して如何なる形式にて實現せらるゝや、吾人の豫測し能はぬ所であるが、兎に角潑潑たる活動的精

神の津々として盡さざるものあるは何人も畏敬する處であらう。

君は斯く運送業を本業として専心従事しつゝある外、竹廳三角店に在る臺灣製材株式會社の監査役として、同社の業績をして向上せしむべし努力しつゝあるが、同社は實に大正二年七月資本金二十萬圓全部拂込を以て創立せられたもので、爾來四年を経過せるのみなるに既に年配當二割の好況を示してゐる、而して同社は今春來内地の大資本家と提携し、本年八月迄に資本金を三百萬圓に増資して二個年内に全部を拂込み、私設鐵道二十哩を敷設して一大會社と爲すの計畫着々として進捗しつゝあるが、之れ各重役諸氏の熱誠摯實なる經營の結果であつて、就中生氣横溢せる靜間君の努力亦與つて力あることは云ふ迄もない所である。

君は一體に輪廓の大なる處あり、見るからに大陸的氣分と進取的氣象とは眉宇の間に横溢し、我が大器は將に晩成にありと暗示するが如く見ゆる、要するに君は未來ある事業家として基隆一般に前途を期待さるゝ人物であるが、思ふに近き將來に於いて君は、偉大なる功績を擧げて世人をして驚異の眼を睜らしむるものあるに違ひない、而も君は未だ不惑に達せざる三十七の男盛りである、其胸中如何なる理想を藏し、其才腕はまた如何なる變幻の妙を現はすか、是れ筆者の刮目して見んと欲する處である。

服部俊一君

大正三年六月三重紡績、大阪紡績の兩社が合併して東洋紡績株式會社が成立した、本社は依然四日市に置き、營業所は大阪と名古屋に設けて居るが、合併前の三重紡績時代でさへ、日本の代表的大會

社として盛名を謳はれてゐた、更に大阪紡績を加へた今日、會社は如何に大會社であるかは瞭かであらう、即ち資本金に於て、織機に於て、將た鍾數に於て富士紡績に匹敵し、鐘紡に相伯仲せるのみか或部分に於ては寧ろ兩社よりも優越なる點を有して居る、

會社が斯の如き實に目醒しい盛運と、進展とを示して居る所以は、同社が其主腦幹部に斯界に於ける代表的人物を網羅して居る事が、與つて大なる力を成してゐる、而して茲に其の一人たる取締役工學博士服部俊一君は、實に此織中の翳々たるものである。

君は山口縣の人、帝國大學工科を出たのは明治十四年で、同校で機械科を専攻した、同じ工學博士の齋藤専務と同じく三重紡時代の中心人物であり、合併後の今日にも猶ほ然りであるが、此二人者は近く工學博士の名譽を贏ち得た幸運兒である、君は飽く迄も技術家の本能を發揮し、拮据黽勉、本社の爲には一日も忘るゝ事の出来ない功績者である、而も前後三十年の永き年月を日本の紡績界に盡した其功に至つては、又顯著なるものである。

君は幼時漢學に志し、郷國の服部東陽の塾に學んだ、然るに君の穎才は東陽氏の認む所となりて、養嗣子となり、明治四年服部家を相續するに至つた、同五年笈を負ふて東上し、攻玉舎及工學寮豫備校に學び、進んで工科大學に入り、深く學術の濫奥を究め、卒業後一時官人生活に入り、十五年から六ヶ年農商務省、兵庫造船廠、海軍艦政局に歴任して令聞ありしが、明治二十年奥田正香氏一派によつて計畫された尾張紡績の創業に當り、同社に聘せられた、之れ君が官界より實業界に投じた最初のスタートであつた。

尾張紡績に入つた君は、懸て紡績事業の視察と、据付機械の購入等の要件を帯びて英國に航し、親しく歐洲各地の狀況に就いて見學し、傍らオールドハム並にミドルトン等の紡績工場に職工となつて、六ヶ月の實習を試み大に會得する所あつた、又工業夜學校にも通學して専ら紡績に關する知識と、實

際を修め滿一ヶ年の後歸朝し、以來畢生の事業として斯業に全力を傾注した、即ち幾多纏綿せる難局に處し、其衝に當つて効空しからず、遂に今日に至つてゐる、之れ君が斯業に如何に熱心であり、献身的であり、趣味的であるかは容易に看取する事が出来るであらう。

君は飽く迄意志の人である、然り君一たび意を決して起ちや、之を成就せざる間は如何なる難關に遭遇するも、如何なる難問蝟集し來るも、決して志を替へず、斷々乎として遂行せざれば止まざること其意志の堅實牢として抜く可からざるものがある。

君亦、曾つて桑名、知多兩紡績會社の囑托を受け、工務顧問、或は設計監督者として抜群の功勞を現はした幾多の事績を有し、赴く處として可ならざるなき明智と、才腕を謳はれた。

君將に六十有五、尙ほ矍鑠として壯者を凌ぐものあり、只管會社の爲めに努力渝らざるは、誠に畏敬するに足るものがあるが、學者として、技術家として、君の同社にあるは同社の爲め、將た我が紡績界の爲め大に慶賀する所である。

柏木勘八郎君

福岡縣京都郡行橋町の富豪として、聲名世に布く我が柏木勘八郎君は、山口縣士族福原彦七氏の次男にして、故侯井上馨氏の甥である、慶應二年十月四日を以て生れ、明治十二年三月先代勘八郎氏の養子となり、同三十八年三月家督を相續し先代の名を襲ぐに至つた。

由來君は幼にして俊髦の譽れ高く、夙に同地方の實業界に意を潜め、種々の事業に盡瘁すること多年、現に行橋電燈株式會社社長、株式會社榭屋商會監査役、福岡縣農工銀行取締役として名聲噴々た

るものがあるが、曾つて又、宇島鐵道株式會社々長として大に貢献する所あつた。

行橋町は『九鐵』筑豊方面に於ける分岐點で、縣下樞要の地である、明治四十三年五月始めて行橋電燈株式會社の創立せらるゝや、暗夜に等しかりし同町は忽ち華かなる電燈の光明を仰ぐに至り殆んど別天地の觀を呈した、從つて同地に於ける凡ゆる事業も又電力供給の恩澤を蒙つて、その發達を促進したことは蓋し少くなかつた、されば同社の消長が、同時に行橋町の盛衰に係つたことは勿論で、この意味に於て、同社は實に同地の開發を爲した一要素であつた。

この重大なる經營上の責任を負ふて、最善の努力を盡し以つて今日の盛を謳はるゝに至つたのは、實に柏木君の明智と手腕と、人格の高邁の致す處であつた、然るに今や同社は九州水力電氣株式會社と合併の約成り、目下其手續中なりと云へば、近く行橋電燈の名が失はるゝであらうが、同町にその光明を仰ぐ限り、君の治績は永へに傳へらるゝであらう。

所謂實業家は多いが、君の如く公共的精神に富み、私情を犠牲にしてよく献身的努力を惜まざる人は蓋し少ないであらう、されば現在に至つては如何なる問題と雖も、其大小を問はず、其難易に關せず、悉く君の盡瘁に俟たぬものはない、而も思慮才腕共に圓熟して、徒らに積極に流れず、妄りに消極に走らず、又退嬰に陥らざる堅實を以つて事に當つて居るから、君の關與した事業として功績を擧げぬものはない、君の盛名ある亦宜なりと言はねばならぬ。年五十有四。

小川直馬君

基隆を以て墳墓の地とし、海陸運送業を以て己が終世の事業として臺灣全島に活躍し、現に多大の

信用を博しつゝあるは、我が小川直馬君である、基隆新店街にある廣通運輸社は實に君の經營に係り海陸運送、船舶代辨、通關及び勞力受負業者として全島に於て著聞されてゐる。

君人に接するや溫容、而してよく論じよく語る、其話柄の間にも自己が事業に對する熾烈なる信念、理想、或は抱負など、殖民地に於て活動せる人々に潜在せる一種の通用性を遺憾なく發揮し、人をして快然たらしむるものがある。

君の生國は愛媛縣宇和島、最初遞信省管理局に出仕し、後日本郵船株式會社に入り、神戸支店東京本社等に歴任したるが、明治三十一年渡臺し同社基隆出張所員となり、三十六年迄同所へ勤続した、而して同年辭任再轉して日東商船組に入り、その基隆支店員となつて、當時大阪商船會社の獨占航路なりし沿岸航路の花蓮港荷主の應援によりて、店主大坪與一氏を助け、日本郵船會社小倉丸の廻航を畫策し、東部沿岸航路に一革新を實現する等、曠腔の智囊を披瀝して本島運輸界に貢献する所が少くなかつた。

此等の經驗に依りて練磨されたる小川君は、大正三年遂に獨立して基隆に廣通運輸社を創設し、臺北に支店を設け現今に及んでゐるが、君の生涯を通じて運送業の外には事業なしと言ふも敢へて過言にはあらず、三十年以來二十有餘年間、純然たる運輸の事業を以て終始一貫奮闘し來つた有様は實に運送業の小川君か、小川君の運送業かともいふべき程である、營業の誠實、叮嚀迅速にして賃率低廉なるはいふも更なり、三井物産會社を初め大倉組、澤井組、臺東製糖會社等を主なる得意先とせる事實の如何を知り得るではないか。

尙ほ簡單に同社の營業課目に就いて述べんに、同社は前述せる如く海陸運送、船舶代辨、通關及び勞力受負業を主なる目的とし、石炭、材木、烏龍茶、米、樟腦、砂糖、本島特産物等諸雜貨を取扱つて居る、而して臺北、淡水及び臺内各地に支店を有し、基隆作業組合取締、基隆船組副組長、

臺灣運輸業組合常任幹事等數多の事務に關係して居るのである、而もその營業振りたるや機略縱横、人をして快感を覺ゆる程の緊張を示し、計籌畫策忽ちに成る底の手腕鮮かなものあり、然かも事に處して用意周到を極むるを以て、同社は一般に氣受けよく、今や斯界にその覇を唱ふるに至れるも當然と言ふべきである、

尙ほ君は附屬事業として小規模の造船所を有し、小蒸氣、舢舨の修理等を經營しつゝあるが、之は未だ自家使用船のみに限らるゝ現状なるも、亦以て勢力の強大と將來の發展性に富むを首肯するではないか。

君が運輸界の爲めに如何に貢献しつゝあるかを立證せんに、大正七年六月、臺灣倉庫株式會社が驛傳社を買收して運送業を兼營せんとせし時、全島の同業者は反對運動を起し爲めに重大なる紛擾を見しが、此時に方り君は運送業者としての立場より私見なる一冊子を刊行し、全島同業者は勿論一般識者に之を配付して倉庫と運送業の立場を論究し、臺灣倉庫會社の創立沿革より説破して大いに妥協、緩和の策を提案せる等、人物寥寥たる斯業界の爲め先覺者として、頗る人意を強うせしむるに足るものがある。

君資性快活にして度量廣濶、寛仁人を包容するの襟度と、稜々たる義侠心に富み、運送業には最も恰好なる敏腕家である、今や大勢は益々斯業の爲めに多事ならんとするの秋、吾人は君の飽く迄一貫せる奮闘を喜ぶと共に、その縦横八面の機畧、畫策立所に成る快腕が如何に神出鬼没の妙を現はし、又如何に偉大なる美果を齎すか、多大なる期待を以てその前途を刮目して見んとするものである。

梶 莊右衛門君

本邦漁網業者の權威として天下に名聲を馳せるる人は、實に我が梶莊右衛門君である、爾く君が今日の盛名の礎を得たのは、何と云つても、往年帝國水産株式會社が能登小木港に於て、鱒の大敷網を試みんとして、之に要する貳張即ち四千貫の網を調製せしむべき適任者を得ず、大に困憊したことがあつた、時に君は、未だこの鱒網の製造に經驗を有せざりしに拘らず、僅かに四十餘日の短日を以て之を調製し、製品甚だ卓拔なりしが爲め大に江湖の賞讃した時である。而も其製品の耐久力は從來の製品に比して、十倍の強さありと高評せられ、梶君は一躍して無上の賞讃の聲に圍繞されて、本邦漁網界の第一人者となつた。

君のこの成功は僥倖的、一時的の所以ではなかつた、君は職こそ未だ漁網業者として世に立つて居なかつたが、其研究は久しき以前から即ち嚴父の時代から大に努めて來たものである、されば同家の斯業は嚴父に其端を發して、其基礎を確立され、君に依つて之が成功を見るに至つたのである。

抑も梶家は藤澤町に於ける有数の舊家であつた、始め旅館を業として居たが、文久二年祝融の災に罹りしより麻網事業を開始し、其販路を擴張して、遂に三浦半島を擧げん顧客たらしむるに至つた。

君は文久元年十月三日を以て生れ、當初他家に養子たりしが、長兄の歿するに及んで復歸し、嚴父を扶けて製網業に従事した、偶々杉山龜吉なる者あり、相州平塚に於いて麻糸製造場を設け、盛んに之が製出に従事したが、販路狭少にして振はず、製品常に店頭に山積し、徒手傍觀するの止むなきに至つた、之に反して梶家の販路は、至つて廣汎なりし爲め、其需用も亦常に不足で、大に困却してゐ

た折柄なり、二人が相協力せば相互の長所を發揮するを得べく、共に利益する所大なるべきを思ひ、この事を以つて杉山氏を説き遂に相提携するに至つた、茲に於て杉山氏も亦君も大に自己の手腕を遺憾なく發揮することを得た。

斯くて日清戦争の勃興は、同君等の事業に至大なる好影響を齎した、即ち戦時に緊要なる砲車の曳網、馬具、船具等の一手下請負は、斯業を大に旺盛ならしめたのである、越えて明治三十年に至り君は杉山氏と共に麻糸燃接機械を發明した、是を專賣特許品として一舉製造能力を増大せしめたが、之によつて君の名は普く世に布き、遂に獅大盡たる日高榮三郎氏の知る所となり、茲に於て同氏の發明品たる獅大敷網に使用する糸及び麻網全部を引受くるに至つた。

されば君は、従來の工場のみにては狹隘を感ずるにより工場の増築を行ひ、第一工場を藤澤に、第二、第三、第四工場は馬入村に設け、須賀村に又分工場を設立した、而して第二工場の主任として杉山氏を、第三工場主任として大野信太郎氏を、第四工場に遠藤源太郎氏を主任たらしめて大に事業の擴張に努めた結果、大正六年一月には愛知縣室飯郡形原町に支店及び工場を設置して、麻糸及び網の製造を開始し、更に大正七年には神奈川縣中郡須原村に麻糸専門の一大工場を設け、大に業務の擴張に努め、今や其販路は内地は云ふに及ばず北海道全土、樺太、臺灣、滿洲、南洋及米國ローサンゼルスに亘り、戦時中は英國へ軍用品として多數の輸出を爲し、又常に全国各地の水産講習所及び試験場の用命を受けつゝあり、而して其製品は各博覽會及其進會に出品して、名譽大賞及び金牌十數個を受領してゐる、以て其製作品の如何に好評噴々たるものあるか察知する事が出来よう。

「君は資性温厚なるも、一種犯すべからざる力を持して人を畏敬せしめてゐるが、特に大筆して云ふことは君が頗る責任觀念の心強いことである、君は常に商人が稍もすれば利欲のみに流れて、商業的道徳に缺く嫌ひあるを憤慨して居る丈、其製品の如きは未だ曾つて一度も期日を誤つたことはない、

この一事を以つても人格的商人として讚美の價値があらう。

思ふに眞に成功者とならん爲めには、單に利益的觀念のみならず、この徳性は最も必要である、この徳性に喩まれぬ利益觀念は、實に我慾であり、利己慾である、而もこの徳性の缺けるもの多き現代に、君の如き人格的商賈の人を見出せるは、我が實業界の甚だ心強しとせねばならぬ、君の今日ある亦決して偶然ではない。

高松梅治君

最近我邦發明界の誇りたると共に、萬國發明界に、日東男兒の爲めに萬丈の氣を吐けるものは、無限軌道の發明者たる我が高松梅吉君である。

抑も無限軌道とは砲車、馬車、荷馬車其他一切の車輛をして其自ら敷設せる一種のレールの上を走らしむるもので、其勢力を半減し、能率を倍加せしめ、牛馬の虐待を防止し、更に車體の動搖を緩和し、道路の保護上一大福音を齎せるものである、而して其構造及び使用法は頗る簡單で、唯一條の鐵帶を在來の車輛に箝むるのみで、優かにレールの代用をなし、其堅牢にして實用的なるは世界無比と稱せられてゐる、實に然り唯此一條の鐵帶を車の外輪に被せたるのみで、萬里の遠きも尙ほ鐵路の作用をなす處に、無限軌道の生命あり、價値あり、將た又高松君苦心の存する所である、宜なり、田尻子爵は「萬里一帯鐵」と賛し、日正將軍また「輪前自現鐵路」と嘆賞せるは偶然にあらず、

無限軌道の効力を細記すれば(一)無限軌道は普通車に比して惡道重荷の場合には効用二倍三倍となり、良道輕荷の場合には効力を漸次減殺されるが、普通良道には約五割の効力を有する、(二)坂の登

りに効力あるは勿論、下りの場合と雖も、軌道と車輛との間に隨時に木石又は、三日月形のブレーキ代用品を拵めて回轉を制禦する事が出来るから、坂の昇降に何等の効力を失はぬ、(三)在來の車輪に其儘取附くるを得る便利がある、(四)軌道の取附け取脱しには、何等道具の必要なく、又何人も即座に出来る、(五)無限軌道の使用に當つては、何等練習の必要なく、耐久力は路面の良否、積荷の大小輕重及び手入の如何も影響する事なれば使用年間に長短あれども、約三ケ年は使用し得らるゝ等幾多の特長を有して居る。

如斯き簡單なる構造で、其効力また甚大なる無限軌道なるを以て、遂に我國及び英吉利一ヶ國の專賣特許を受くるに至つた、而して其後各所に於ける實驗に依りて、挽曳力の輕減並に道路保護上、極めて顯著なる効果あるを證されたので、無限軌道は漸次その價值を確認せられ、内地に於ては明治神宮造營局を始め、東京市役所、朝鮮總督府、富山縣廳、三井三菱の鑛山部、久原(日立及朝鮮甲山鑛山、南洋ホルネオ護謨園)南亞公司、新高製糖會社、大阪府廳、西部遞信局、ケーブル線運搬大車其他諸鑛山に使用され、尙ほ米國農場、濠洲羊毛運搬馬車、南洋護謨林、南部支那等に盛んに使用せられてゐる、而して其無限軌道一臺分の代價は荷馬車用五十五圓、二輪荷馬車用九十圓、四輪荷馬車用百二十圓、普通内地式二輪牛馬用百三十圓、臺灣固有の木造二輪大牛專用百七十圓の數種に分たれて居るが、簡單、堅牢、實用の三特點を具備せる世界的發明品としては、最も安價と言はねばならぬ。

而して之が發賣元たる帝國無限軌道社は、東京市芝區白金三光町百十五番地に在り、支社を大阪市北區信保町二丁目十二番地に置き、三重、岡山、岐阜、島根、鳥取、高知、愛媛、香川、徳島、福岡、鹿兒島、佐賀、大分、沖繩、熊本、朝鮮、關東州等の各地に一手販賣特約店を設け、相互に連絡して熱心に需要者の便利に應じて居るのである。

君が如斯き効用と實質を有せる無限軌道發明の動機に至つては、蓋し一朝一夕の苦心でなかつた、

夙に勞力を半減すべき經濟的軌道の利用に着眼し、刻苦精勵、幾度か蹉跌し幾たびか失敗の苦き經驗を嘗めしも、不屈不撓の精神横溢せる君は、之が爲め少しも悲觀せず勇往邁進、家産を蕩盡するに至るも意に介せず、具さに破壊と建設とを繰返して奮闘し來りしが、一難到る毎に更に創造的頭腦は牙え、技術は益々熟達し、苦心慘愴爰に十有八年の星霜を経て、遂に無限軌道は完成せらるゝに至つた世に發明に志すもの少くないが、一たび蹉跌するや忽ち自暴自棄に陥り、遂に終りを全うするもの尠き中に、君は飽く迄も初志を翻さず、遂に此大事業を成功し得たるは、將に立志奮闘の權化とも推稱す可きものである。

而して君の發明や、區々たる日用品又は裝飾品の類にあらず、其範圍は世界的に、其効力は實用的である、今や無限軌道の眞價は普く天下に認められ擴く人口に膾炙して、各種事業界に於ける需要は日に月に擴大を見、今後の發展は實に無限なるに至らんとしてゐる、爰處に慧眼にして時勢を遠觀するの明ある君は、近く經營組織を株式に改め更に一大飛躍を爲すべく準備中にありと云へば、之が實現の曉に於ては會社の將來や實に洋々たるものあるべく、發明家高松君の前途や洵に祝福に満ちりと云はねばならぬ。

實に君の如きは立志傳中の華ともいふべく、其半生に於ける苦心奮闘の迹を願れば、將來爲す有らんとする少壯子弟等の活きたる好模範である、其功績は國家的否な世界的にして君が芳名は永遠に發明史上に残る事であらう。

高取伊好君

九州に於ける成功者の著聞せるものを擧ぐれば、その總ては殆んど炭礦業者にあらざるものはない。安川にせよ、貝島にせよ、伊藤にせよ、麻生にせよ、皆鶴嘴一挺のごん底生活より奮闘激勵して、終に今日の資産と、聲名を造りあげたのである。而も此等の人々は恰も福岡縣に限られて居るかの觀あるが、爰に佐賀の一角より炭礦界に於ける一人の成功家を出した、是れ我が高取伊好君である。

氏は佐賀縣士族鶴田斌氏の三男にして、嘉永三年十一月十二日を以て生れ、而して安政六年同縣士族高取大吉氏の養子となり、慶應元年十月其家督を相續した、君が少年より青年に至る時代は、即ち明治維新の時代であつて、血腥き風は我國隨所に靡びき、驚天動地の大變革は今にも國民の頭上に落下し來らんとする形勢であつた。

天下の志士は四方に横行濶歩し、時の幕府はそれを取締る實力なく、威令更に行はれず、天下の浪人は男子志を達するは將に此秋にありと、意氣衝天、手に唾して起つもの多かつた、如斯き天下の風雲急を告ぐるの時、生來個偉大志ある君の、いかで妥如として九州の僻陬に跼蹐して居ることが出来やうぞ、君また青雲の志を伸ぶるは此機會にありと叫び、一雙の草鞋軽く肥筑の山野を踏破して、東上の途に上つたのである。

之より先、藩主鍋島公は氏の穎才を愛し、之を長崎に赴かせしめ泰西の新智識を修學せしめんとしたが、當時地方の人々は未だ文明の空氣に接觸せず、英學の研究を以て夷狄の學なりとして一概に之を排斥し、君の親族故舊も亦長崎遊學を絶對不可なりとして、之を中止せしむるに至りしかば、君の

失望落膽は譬ふるにもなく、怏々として暫らく不快の日を送つたが、遂に發奮して東上したのであつた。

君は笈を負ふて帝都の人となつたのは、恰も明治二十年であつた、その當時に於ける青年崇拜の的になつてゐた福澤翁の、慶應義塾に入學し、孜孜として研鑽怠りなかつたが、中途感ずる所あり轉じて工部省鑛山學校に學び、鑛山學を専攻したのである、爰に於て氏が將來鑛業家として起つべく其素地を作り、遂に今日の富と名とを致すの基礎を確立したのである。

君は入學以來螢雪の功なりて業を卒ゆるや、明治五年當時政府の事業たりし肥前高島炭坑の技師に任せられ、一介白面の青年技師は喜び勇んで任地に赴いたのである、之れ君にとりては言はゞ故郷に錦衣したるもの、其得意や思ふ可きであつた、斯くて君は任地に着するや否や、直に献策して一大改革を敢行し、學窓に修得せる新知識を以つて、率先歐米の採掘法を實施したので、出炭の狀況一變し、頓に盛況を呈すに至つたのである。

爾來君は精勵衆に勝るものありしかば、信任大に加はり、累進して技師長となり、刻苦多年、海中の一孤島をして天下の良炭坑たらしめ、高島炭坑の名聲を江湖に籍甚たらしむるに至つたのである。此間に於ける君の苦辛、努力は大書して高島炭坑發達史上に録す可く、一たびは坑口の潰裂より海水浸害の厄に遇ひ、僅に身を以て免がれ、九死に一生を得たるも滿身創痍を以つて包まるゝの災禍に陥つた事もあつたのである。

然れども君の不屈不撓の精神は、終に高島炭坑をして九州第一たらしめたのである、元來君は獨立自主の精神に富んだ人で、何時までか他の指揮下に願使せらるゝが如き人ではない、其後高島炭坑を辭するや、舊藩主鍋島公に隨ひ香焼、端島、中ノ島の方面に事業を企圖し、更に唐津方面に躍進して羽翼を伸べ大に爲す所あらんとしたのである。

茲に於て君は中央政界の名士と相提携するの必要を感じ、大江卓、竹内綱等諸氏の後援を得て、芳ノ谷炭坑に手を染め、次で相知炭坑を經營するに及び、出炭の成績常に良好を齎らし、忽ち巨萬の富を贏得し、其基礎愈よ定りたるが、而も活躍を停めず巨擘彌よ延びて赤坂炭山に達し、爰に一躍して西肥鑛業界の霸王たるの榮冠を頂くに至つた。

斯くして君は四十幾年間、終始して炭坑業に従ひたるを以て、其經驗の豊富なる事驚くべきものあり、又斯業に對する識見は大に傾聴に値ひするものがある、君七十に垂々とする頽齡にあるも、尙矍鑠として壯者を凌ぎ、日々孜孜として自己事業の經營に従事されてゐる、君今や玄海の怒濤打寄する唐津西の海の一角、白沙青松の間に宏壯なる邸宅を構へ、居然として九州の炭坑界を睥睨しつゝあるは又偉んなりと言はねばならぬ。

山下尙市君

臺灣に於て山下金物商店といへば、高進商會と肩を並べ、業務隆々として冲天の勢ある大店舗である、臺北模範市街目抜の商區たる府中街三丁目に堂々たる三層樓の大建築を構へ、商品精良にして價格低廉、又その豊富なる點等に於て臺灣全島一流の金物商として優に同業者を凌駕して居る。

店主山下尙市君は山口縣美禰郡大里村の人、年未だ不惑に達せざる新進氣鋭の新人物として斯界に其名を知られし居る、君の家は代々金物商を業とし令兄より引繼ぎ而して君に至つた、令兄仙太郎氏は、往年我領臺當時年齒弱冠なりしも雄心勃勃として禁じ難く、徒に故山に老ゆるは男子の本懐にあらず丈夫須らく新天地に飛躍すべしとなし、周圍の情實より脱却して奮然渡臺し、而して臺北に於て

父祖の事業たる金物商に従事したのであるが、奮闘精勵只管江湖の信用を得るに努めたる結果、業務日々隆盛に赴き嶄然として同業間に頭角を顯はすに至つた。

斯くて益々業務を擴張したる結果、明治三十八年中部臺中街に支店を開設するに當りて、令兄にも劣らざる新銳の商才を持てる君は踴躍して渡臺し、即ち臺中支店主任として家兄の業を輔佐したのである、之れ君の本島實業界に於ける活動の初舞臺であつた。その臺中支店を主宰するや、平素含蓄せる君の經驗と天稟の商才とは異常なる同店の成績となりて現はれ、忽ちに中部臺灣に於ける同業者を凌ぎ、斯界に兄弟並び稱せらるゝの成功を見たのである。

後明治四十五年不幸にして令兄の長逝するや、亡兄の後を承繼して臺北本店の事業に従事したるが精力を傾注して専心奮勵し、最も確實至誠なる取引を以つて一貫した、而して猶ほ臺灣東部の需用にも應ずべく花蓮港外各地に出張所を設け、又近く本店と相對して同町内に機械部を開き、分業的に取引上の便宜を圖り、商品を精選し、又價格の低廉を期したるを以て信用は舊時に倍し、店頭は常に華客を絶たず、出入の荷物絡繹として絶えざる有様に至つた。

殊に戦時に於ける活躍は頗る目醒しきものあり、諸金屬の暴騰によりて自然的に收得したる利益のみにて、概略數萬圓の額に達せりといふ、機略縦横の商才は適所を得て一層その光彩を放ち、企畫一々その圖に中り成功に次ぐに成功を以つてし、店運隆々今や臺灣に於ける地盤は牢乎として抜くべからざるものがあるのである。

その潑瀾たる活動は臺灣金物商の花形として、洋々たる前途は同地實業界の麒麟兒として矚目嘆美の中心となりつゝあるが、君未だ不惑に滿たざる少壯の士、且つは今日の成功實に冲天の勢ありと雖も、單に之を以つて満足し終るの人物に非らず、君が今日あるの因をなせる過古の勇奮力行の跡を見而してその機略に富める商才を以つて飽くまで精力を傾倒しつゝある、同君の現況を見る時は、その

星加彥太郎君

現今臺灣の巨商として、臺灣全島内は勿論、對岸厦門を始め、汕頭及福州の地方に至るまで、臺灣最大の綿布問屋として其名を知らるゝものは星加彥行である、而して行主星加彥太郎君の名は同商行の名稱と共に燦爛として異彩を放つてゐる。

君は愛媛縣今治の人、初めは武骨一片の軍職に身を措いたのであるが、一轉して事業家として成功するに至つたのである。領臺當時帝國軍隊に従ひ出征し、爾來總督府陸軍部軍務局に奉職し、臺北臺南に於て補給廠に勤務したが、在臺七ヶ年の間規律嚴正なる軍職に在りて私かに臺灣の社會生活狀態を洞察するに、本島の商業は多數の本島人を相手にするの最も利あふを悟り、大いに實業界に於て雄飛せんことを志し明治三十四年決然退職して歸還した、即ち將來の形勢を觀破し、自らその境遇を脱出して職業を轉換したる君は一步時勢に先じたるの明ありといはねばならぬ。

而して君は郷里の先輩たる柳瀨義明氏經營の今治綿ネル製造會社乃ち興業會と特約を締結し、僅少なる俸給の餘蓄に過ぎざる小資本を以て臺北に店舗を開設して事業を創めたのが、同君今日の成功を贏ち得た原因であつた、由來人生行路難し、常に難關にのみ際會せる此の間に於ける君の努力、其の開拓經營の苦心は實に言辭に盡し能はざるものがあつたが、君が成功の裏面には常に隠れたる功勞者たみ子夫人の内助あるを忘れてはならぬ。

斯くして君は飽迄斯業の成功を見ずんば止まざらむとし、本島人を相手に一意専心營業に従事し、心氣些かも動搖せざりし堅實なる態度は、最も強く本道人に感動を與へ、其取引忽ち旺盛を重ね、其餘勢は南支の厦門を初め、汕頭、福州方面にまで取引の擴張開始を見るに至り、今や星加彥行の聲價は隆々として旭日昇天の狀況を齎してゐる。

而して君は此功を以つて決して誇ることなく、常に謙讓の態度を持って自己の事に關しては多く語らず、語れば之を後援者の功に歸し君自らは其器に非ざることを持つてす、前記興業會長として君を援助せし柳瀨氏は、愛媛縣下の大資産家にして其資産信用は同會の信用をも高からしめし、惜哉數年前に逝去した。而かも君は單に柳瀨氏の恩願を受けしに止まらず、尙其後の會長たりし舟下辰雄氏、現會主柳瀨義之氏等よりも永年の後援を得、一方には同商行の方針が臺灣銀行の柳生頭取時代に於ける、南支方面輸出綿布業者に對する、低利資金融通の方法を設けられたる主旨と合致するところありし故非常の便宜を得て、所謂順風に帆を上ぐるが如く着々事業の成功を見たのである。

又近年には更に綿織布をも取扱ふ様になり、大阪の山本商店とも取引を開始し居るが、本島が從來に於ける特殊の歴史を有せると、又地理的關係が最も克く南支の事情を詳悉し得るの便宜あるのみならず、本島と對岸との貿易は船腹及運賃關稅等の關係より、基隆がその中繼貿易港として盛況を呈し來ると共に、將來益々有望の前途を有するのである。

開店當時僅々俸給の餘蓄に過ぎざりしもの、今や臺灣百萬長者の一人として最も質素堅實なる生活をなし、對岸及本島間に於て商品獨占の立場にあるもの、君の先輩の助力に依る處多かりしと雖、蓋しその奮闘開拓の苦心經營の道程は、以て我立志傳中の一光彩として後人の範とすべきものである。

君嘗て曰く「勿論自分一個の力が今日の店を成して居るとは何うしても思つては居ないが、自分は土地の實業家の一部の一人が何彼につけて官憲の便宜を得やうとする方法を取り得なかつただけが自

分自身の生命であつたかと思ふ」と、こは君にして初めて味ある言にして、數千萬言を費すよりも此一言は以つて君の全生涯を飾るに足るべく、所謂君は「事業の前には困難なし」てふ金言の實行者であり、事業界の優勝者である、新天地の開発之より更に多忙ならんとする時、臺灣の地此人あるは大に人意を強うすべきである。

末正繁太郎君

現今關西土地信託株式會社取締役社長、株式會社湊西銀行取締役、加古川製材株式會社、兵庫電氣軌道株式會社、明石電燈株式會社各取締役及び播州鐵道株式會社監査役等、其他各種の事業會社に關し、神戸實業界の飛將軍として錚々たる聲譽を馳せつゝあるは、我が末正繁太郎君である。

殊に東京向島中之郷に設立せる末正化學工業所の經營者として、又私立神戸東尻池幼稚園の設立者たり其園長たり、將又神戸教育會青年會長として行住座臥常に至誠を以て一貫し、身を以て自ら人を指導せんとするの眞情に至つては、終始、實業界の向上發展に盡瘁して熄まざる不斷の熱烈と共に、人格的事業家、活動的事業家として斯界の推讃措く能はざる處である。

抑も君は兵庫縣の人にして、末正久左衛門氏の長男である。即ち明治四年二月十六日、祖先以來現代迄三十三世を累ね舊幕時代には里正役を勤め苗字帯刀の名族の芽生として出生し、温かき家庭の園藥内に在つて育成した、幼にして秀才を發揮し屢々人を驚嘆せしめたが、夙に東上の志を抱き遂に出で、慶應義塾に學び、年二十三にして目出度業を終るや、雄心勃勃として燃ゆるが如く、大鷲南方に翼を張らんとして、身を實業界に投するに至つた。

而も天資聰明にして學識該博、才氣煥發、事に當つて明快流るゝが如きものある君は、一度實業界に入るに及んで、奇計縱橫畫策立處に成る底の天才を發露し、飽迄向上進取を主義として猛然活動を爲したるを以て、忽ち小壯有爲の手腕家として認められ、多年ならずして同地の重鎮として許さるゝに至つたのである。君が目下取締役頭取たる湊西銀行はその創立頗る早く明治二十九年十一月、資本金は二十萬圓を以て生れたものである、敢へて大銀行と云ふは當らざれ共、近來急激なる發展を爲して今や資本金一百万圓に増加し市の内外に支店を設置するに至り、又播州鐵道の如きも資本金五百萬圓を抱擁して近時躍然たる進境を示してゐる、其他君の關係せる爾餘の諸會社も凡べて順調に擴張發達をなし相當の成績を示して居る、之れ畢竟時代の趨勢に投じたるの好運に依るものとは云へ、又重役諸氏の努力に依るべく、殊に超然として異彩を放ちつゝある君の功に歸すべきもの、實に大なるものあることは云ふ迄もない事である。

今や君は斯くの數多の銀行會社の重役としての明快なる經營振は世既に定評の存する處にして、活動倦むを知らざるのみならず、我國化學工業の改善討長には最も意力を注ぎ、一兩年前より我國に於ける毛織物製絨用染料の改良發明者として國家に貢獻する所多く、其製品中「クロームブラック」の如きは外國品に優越せり又明治三十九年三月以來慈愛と熱誠とを傾倒して育兒教育に力め以て邦家社會の爲に貢獻を爲しつゝあるのである。即ち東尻第一第二幼稚園並に保姆養成所、教育會青年會幼稚園等凡べて君の經營に係るものであるが、尙目下君は數萬圓の私財を投じて幼稚園分園及青年會及教育會等の爲に兵庫和田岬吉田新田に公會室を新築し一般公衆の便宜を計れる等、其識見の高邁なる、態度の眞摯なる、彼の錙銖の利に區々たる凡俗實業家とは大に其趣を異にするものがある。

君本年正に四十九歳、手腕人格は益々其圓熟を來して聊かの間然する處なく、今や機略縱橫の實業家として、はた典麗謙讓、至情を以てするの育英家として同地人心を革新すべき肅然たる木鐸とも稱

されつゝあるは又宜かる哉である。
 實に浮華輕跳欺瞞を以てして猶ほ我慾を充かさんとするの現代實業界にあつて、君の如き人物は方に人格的實業家として聲を大にして紹介すべきものである、其偉績は永世に之を傳ふべく、又終始變らざるの熱烈なる態度は少壯子弟の範とすべきものである、君を評議せんとするに當りて敬度の念湧出するもの、強ち吾人のみではないであらう、即ち未だ春秋に富む君の前途に向つて滿腔の敬意を表し、更に偉大なる成果を結ばれん事を祈るものである。

岡部菊太郎君

現在の横濱が「商業地より工業地への推移時代」だと云ふことは、殆んど何人にも異口同音に發せらるゝ語である、吾人と雖もこの決河の如く漲つて來る機運を認めないではない、然し現實の問題として横濱の地が果して何れだけの工業的發展を爲すべき可能性を有して居るか、其背域、其位置、其動力の供給等の諸問題に就いて仔細に觀察すると、吾人は多少の不安と懸念とを感ぜざるを得ない、今茲に之を論議するの暇はないが、吾人の見る所では横濱は飽迄も商業地として、一横濱と云へる貿易港を中心として、一大發展して行く可きものではないかと思ふ、勿論工業の隆盛と雖も、横濱の貿易地として、商業地としての發展を阻害するものではないが、此方がより積極的であり、より易き又は精巧な方法ではあるまいが、我が岡部菊太郎君は實にこの横濱に於ける、主要貿易品の一たる羽二重輸出品の牛耳を執つてゐる著名の人である。

君は栃木縣安蘇郡新台村の人である、先考仲歲氏の二男で、明治四年に呱呱の聲を上げたが、十九

年中村敬宇先生の同人社に入り、轉じて早稻田専門學校に學んだ、同校卒業後君は貿易に従事する志を立て、横濱の絹物商津久井商店に入りて實地の練習に従ふこと年あり、三十年獨立して輸出羽二重業を經營し、苦心慘澹、幾多の曲折を経て今日に及んだものであつたが、君の明敏なる頭腦と卓越せる手腕とはよく今日を致し、現在にては絹物賣込問屋として横濱第一流の地歩を占むるに至つたのである、而して現在君が取扱つてゐる主なるものは、羽二重を始め、絹縞子、縮緬、シッボン等各種の高等織物である。

之等の絹物輸出の外に君は三十八年岡部商會なるものを起し、雜貨其他の直輸出業を開始した、是亦漸次隆昌の域に進み、現に輸出先は歐洲、南北米、加奈陀、濠洲、南洋支那の各方面に亘るの盛況を呈して居る、寔に獨立經營開始以來、二十一二年に過ぎざる事業としては、大なる成功と云はねばならぬ。

されば君は現在、横濱輸出絹物同業組合長たるの外、又横濱商業會議所議員、横濱市會議員、横濱市參事會員等の公職を帯び、就中絹物同業組合長としては勤績茲に十年、此間輸出貿易の發達に貢献すること少からず、近く組合にては勤績表彰式を擧ぐることになつてゐる。

今其治績の代表的なるものを擧げて見ると、君は絹物輸出港たる横濱に、絹業試験所、絹物倉庫、絹織物精練の三事業を起すの必要ありとは、年來の抱負希望であつたが、君はこの希望の實現に献身的に東奔西走した結果、今や之が實現を見るに至りしは、寔に君の何物よりも満足とする所なるべく又横濱に取つて何れだけの利益を齎しつゝあるが豫測するに足る、又君は近時更に羽二重の外縞子、壁織、縮緬等絹物類の輸出盛大に向ふや、君は必然的の要求に従つて、「機械捻糸事業を大に勃興せしむべし」との主張の下に、今やこの問題にも最善の努力を拂つてゐる、斯くの如く君は單に自己の利益の爲めのみならず、公益を基本として大いに活躍し居れるは、吾人の益だ心強く又欣慶に思ふ所

である。

然し茲に吾人の閑却すべからざる一事がある、それは君の成功は勿論君の手腕名望に據る處であるが、又令弟織吉君の努力をも没することは出来ない、實に織吉君は殆んど献身的忠實と熱誠とを以つて令兄の事業を輔佐して居る事である、君は明治法律學校の出身で當年四十三歳の春秋なるに拘らず、未だ獨身を守り、岡部商店の全事業を統理して居るのみならず、三友組の直營事業たる三友汽船、三友鑛業等の各専務を勤め専ら事業の發展に精力を凝いて居る、聞く所に依れば君は劍術及び柔道に長じ殊に柔道は澁川流の皆傳を免許されて居る達人であると云ふ。

岡部君は資性磊落にして徒らに對者の間に城府を設けず、よく語りよく談する、君の趣味としては青年を愛して親切に叮嚀に世話する外にとり立て、云ふべきこともなく、酒を飲まず、遊逸に耽らず但し煙草と蕎麥は大の好物、年が年中葉巻を口から離したることなく、又商用にて福井に行けば必ず宿屋に命じて蕎麥を取り寄せ、毎日朝ばらから食つてゐるやうな人で、客を請じても又この蕎麥を無理押しにすると云ふ熱心である。茲に君の關係事業を舉ぐれば殆んど應接に遑なき程であるが、横濱精練株式會社、日本製袋株式會社、伊萬里炭礦株式會社各社長を始めとして、横濱燃系織株式會社、上毛燃系株式會社、富山織物株式會社、日本絹布精練株式會社、共保生命保險株式會社、第一バンド株式會社、三友汽船株式會社、三友鑛業株式會社各取締役、帝國化學工業株式會社、日本ブレード株式會社各監査役、菅川商店相談役等を算へる、之を以ても君が現在横濱の事業界で如何に大なる名聲と信望を博しつゝあるかを察す事が出来やう。

思ふに戦後の日本が、世界經濟戰の渦中に投じて、何を以て之に對應すべきかと云へば勿論輸出貿易である、然らば輸出貿易として何物を主要とすべきか、吾人は矢張纖維工業の輸出物特に絹織物を推奨するに憚らざる者である、其所以は元來他の工業製作品は殆んど其原料を他國に仰ぎ、之を單に

若干の加工を施して再び彼地に輸出するものであるが、絹織物は悉く其要なき一大特長を有するからである、殊に大正七年度に於ては同品の輸出額は一億六千萬圓にも及んでゐるといふ、今後品質を改正し、染織仕上等の技術方面にも力を注ぎ一層の發達進歩を期しなば、遠からざる將來に於て數億萬圓の輸出額に達すべきは、既に今日のこの機運に觀るも明瞭なる所である、この秋に當り君の奮闘努力を望むは、必ずしも吾人のみであるまい。

久保田庄左衛門君

京都に於て有名なるもの曰く本願寺、曰く何、曰く速康散。この速康散は賣藥界の名藥として往昔より人口に喧傳されしもの、その宗家は即ち久保田庄左衛門君である。

君は先代の次男として明治二年六月二十七日を以て生れ、幼名を幸次郎と呼びしが、明治十六年家督を繼ぐに及び、名を庄左衛門と改め、一意家運の興隆を計つて今日に及んで居るのである。

この間屢々諸國を視察して時代の變遷と共に種々の方法を講じ、且つ原料の精選に留意する等、君が家業に精勵努力した事は非常なるものであつた。その結果速康散の名をして仙丹靈藥の重きを加へしめ、わが賣藥界の明星たるの觀あらしめたのである。

夫人ちか子は同市素封家杉浦忠三郎氏の令姉にして、同家に嫁して以來夫君の業務を扶け、家運の振興に盡し、尙母堂八重子に仕ふる事孝順を極め、一家之がために春の如き和平を呈し、界限では美望の的となつて居る。

二男一女と叔母のむめ子とあり、令妹せい子は府下の豪農大藪重太郎氏に嫁して、和平を極めて居

るが、この他君は二三の會社銀行の重役として、陰然たる活動を成して居る、今その關係せる會社銀行の一斑を略述せんに、日出土地株式會社は土地の賣買及び殖林を目的として明治四十五年五月、資本金五萬圓を以て、上京區柳馬場通に創立されたもので、現今相當の収益を擧げて居るが其社長には君が任じて居る。

次に京都工商株式會社は、刷毛製造販賣及び商品輸出品の目的を以て、明治三十九年二月、資本金三十萬圓の株式組織として、下京區東洞院通り錦小路南入る阪東屋町に創立せられたもので、大阪にも支店を有し、堅實な發展を見せて居つたが、時代の要求はこの小資本を許さず、現今では一躍百萬圓に増資するに至つて居る、更に株式會社商工貯金銀行は明治二十八年十月、資本金二十萬圓を以て設立せられたるも、現在は五十萬圓に増資せられ、毎年一割以上の配當をなし、市内各所にその支店を増設する事八、以つてその盛況を見るべきであるが、君は此二社の監査役に任じて縦横の手腕を揮つてゐる、即ち君の關係する處を見るに財界の變轉に處してもよく其時宜を誤らず、秩序を紊さず、相當の成績を齎してゐるのは、全く諸氏の手腕に負ふ所のものである。

君は摯實にして勤勉、家運の興隆を計る傍ら、斯くの如き方面にも投資或は關係して、産業の發達金融機關の圓滑を期し以て公共に資しつゝあり、以つて君の爲人なるを知るべく、更に奮勵して事業の爲に盡瘁せられん事を祈るものである。

松村八次郎君

愛知縣は由來陶器の製造を以て其名を知るゝ土地である、而して近來は陶磁器といへば必ず硬質の

二字を冠せらるゝ様になつて居るが、此の硬質陶器の發明こそは、縣下愛知郡千種町なる松村硬質陶員合名會社代表員、松村八次郎君が元祖である。

抑も此發明は英國に於てせられ、爾來時代の要求と共に製法は駭々として進み十八世紀の末には既に立派なる品を出すに至つた、爾來商略に拔目なき英國人は當時海運業の盛んなるに乗じて販路を世界各國に求め、盛に之が輸出を圖つたものである、而して當時瀬戸物を以て誇りとなしたる我國にもドシ／＼輸入せらるゝに至り、之を以て我國製陶界の不名譽となし、國家の爲め此の如き輸入を防遏して天晴れ舶來品にも劣らぬ逸品を出さんと、斯界の人々が苦心碎膽する處あつたが、遂に硬質陶器發明の鼻祖たるの榮は我が松村八次郎君其の人の頭上に落ちたのである、世上硬質陶器を説くもの、多く金澤を以つて元祖と稱するが、然し年代史上の偽らざる證據は之を抹消する事は出来ない、該製法は外見の立派にして堅牢なる等に於て從來の不經濟なる點を除去せるもの、眞に斯界に一新紀元を劃したげと云ふべく、此點に於て君の偉功は永遠に不朽なるものである、尙君は此發明の外に松村式石炭窯を創造して窯業界に革新を與へたる斯界の大恩人である。

君は元佐賀の人、父君は明治初年早く長崎に出でて實業に従事したるが、偶々獨逸より酸化コバルトの輸入せらるゝを見、大いに啓發する處あり、之れ聽て製陶界に革命を齎すものとなし、各地へ盛んに之が供給を開始するに至つた、而して當時名古屋市は陶磁器の一大中心たりしを以て自然同地との往來が繁くなつた關係上、遂に意を決して足を此地に止め、中區七曲町に一工場を設立して製陶業に従事した、而して早くも海外輸出に着手して瀧藤萬次郎氏と共に盛衰浮沈の難關を経、同市の貿易業に盡力したのである、次いで明治二十四年令息八次郎君が東京高等工業學校窯業科を卒業するに及び、父子協力して斯業に當り、家運の發展に努めたのである。

八次郎君は新進の學識を養成したる少壯有爲の士、極力輸入品を防止し、我陶磁器界の名聲を海